

REVIEW OF STREAM OF URBAN AND LIFE DESIGN,
FACULTY OF ARCHITECTURE AND BUILDING ENGINEERING,
KANAGAWA UNIVERSITY

【特集】製図室は自由の地

vol.20





目次

・特集 製図室は自由の地	1
神大建築リベラリズムの伝統と今	2
自主管理 自らつくった学びの場	4
受け継がれた自由とその途絶	6
リベラリズムの復活・継承をめざして	8
編集後記	10
・建築探訪 MARU。architecture 高野洋平+森田祥子	11
・2023年度学生優秀作品紹介	19
修士論文	20
修士論文 全作品リスト	44
卒業設計・論文	45
卒業研究 総評	56
卒業研究 全作品リスト	61
学部設計課題 優秀作品	63
・NEWS	91
学外受賞	92
学内受賞	93
留学生レポート	94
・研究室紹介	95
・沿革・クレジット	96

特集

製図室は自由の地

大学における“自由”とは何だろうか。神奈川大学建築学科は、草創期からリベラルな気風を湛えてきた。

1965年の創設以来、学生運動の高まりによる大学封鎖時にも、学生は一部の教員とともに学内外に場を確保しては勉学の継続を試みた。制限下にあっても自ら学ぶ。自由闊達なその態度が結実したひとつの象徴が、自主管理の製図室である。

個人所有できなかった製図道具を分け合い、手を動かしながら会話する…24時間開放された製図室で学生たちは延々と議論し、図面を描いて互いを磨き合った。暮らすように建築をする、そんな言葉を彷彿とさせる小宇宙で彼らが得たもののかけがえのなさは、想像に難くない。

時代の風に加え、歴史的な感染症蔓延がその環境を一変させる。しかしかつて先輩たちが築き守ってきた自由の地への想いを、伝統のリベラリズムとともに後輩たちは受け継いだ。失われつつある至宝の行末は、今を生きる彼らの手の内にある。

本特集は、激しく移り変わる世界の中で新たな自由を信じ、創造への憧れを翼に先陣を切って飛び立つ建築学徒の『離陸宣言』である。

（二階さちえ）

製図室は自由の地

神大建築リベラリズムの伝統と今

神奈川大学の建築学科では、自由な環境が長く維持されてきた。特に広々と使える研究室は、建築学科の学生にとって貴重なものだ。この“自由さ”はどこから始まり、受け継がれてきたのだろうか。

今回の特集では、製図室を舞台に過去の神大建築学生の活動や状況を追うことでその本質を探った。それらを踏まえ、コロナ渦を経て失われつつある神大建築独自の気風を、我々がこの先どう再構築し取り戻していくかを考える。

学生運動： 自由と変革の始まり

学生運動とは、学生という立場から権力や社会の在り方を問い直す運動である。

日本国内では主に学生自治や学費問題など大学当局に対して要求する運動が多かった。1960～70年代にかけ様々な運動形態が現れ、自然発生的に全国各地で盛り上がりを見せた。破壊行為や建物占拠のように過激化することも少なくなかった。

神奈川大学における本格的な学生運動は、1968年1月に起こった原子力空母エンタープライズ寄港阻止支援

カンパ活動が「学内規程」によって止められたことから始まる。これが火種となって学生による学内規程白紙撤回闘争が起こり、反乱が全学を覆った。

これらの責任問題が追求され、大学の創立者米田吉盛学長が退陣へと追い込まれるなど、神奈川大学にとっても大きな変化となる出来事であった。

建築学科OBに聞く

製図室＝自由の象徴

インタビュー 01

今井清隆さん（4期生・1971年卒業）

大学封鎖もあった、学生運動の季節

1967年当時は1年生で、山登りクラブに所属して、その頃は大学もまだ平穏でした。2年生になって勉強が忙しくなり、学習に集中していましたが、1968年に大学封鎖がありました。

2月に2年生から3年生への進級試験があった時も封鎖は続いており、立て看板がたくさん立って学内は騒然としていました。試験が始まると同時に学生3人が試験を拒否する意思を示します。当時は大学の体制に対する批判や学費の値上げ闘争の最中で、これに抗議するための行動でした。

私と数人の仲間はこの試験の中止を決意して受験を見合わせ、他のクラスにも呼びかけて試験全体を中止しました。

学生の意見でカリキュラム改編が実現

当時の理事長が初代建築学科長の谷口忠先生に対し、建築の中堅技術者を養成する学科を作りたいと要請したため、学科創設時のカリキュラムは必修科目が多くて非常に厳しいものでした。

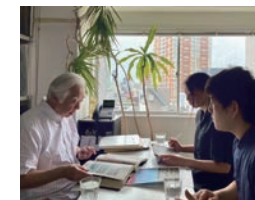
学生たちは変更を交渉しましたが、多くの教員は決められたカリキュラムに従うべきとの考えから耳を貸しませんでした。



高揚する学生運動

現在研究室として使われている神奈川大学横浜キャンパス8号館6階は、建築学科創設当初は製図室であり、時代とともにその使われ方は変貌している。

この製図室を神大建築リベラリズムのひとつの象徴として焦点をあて、各世代のOB・OGにインタビューを敢行。製図室への想いとそこで得た経験、次代への継承について語ってもらった。



いまい・きよたか

1948年東京都生まれ。1971年神奈川大学卒業後、内井昭蔵建築設計事務所入社、1978年(株)ファイブステージ設計事務所共同設立、1990年CAD設計組織(株)今井清隆+ファイブステージ設立、1991年改組し(株)イマイ・ファイブステージ級建築士事務所／1991年～1995年神奈川大学工学部建築学科意匠系講師

そんな中でも白濱謙一先生と志水英樹先生が対応してくれたので、中堅技術者になりたい人はその道を選び、デザインの勉強をしたい人はその方向に進めるように、さらにデザイン専攻の学生は卒業設計だけで卒業できるようにとの要望を出しました。当時は卒業設計と卒業論文の両方を提出しなければならず、デザインを志す学生には負担が大きかったのです。

これらの要望は教授会で議論され、最終的にカリキュラムは柔軟な方向に変更されました。学生の力で物事を変えていけると感じた瞬間でした。

当時の製図室

製図室はほとんど使われていませんでした。学生たちは課題が出ると下宿や寮に戻ってしまい、製図室で図面を描くのは数人程度。それでは意味がないとのことで、学生たちは製図室の24時間開放に動きました。

当時、外国の雑誌でスウェーデンの学生が教室でベッドや机などを組み立てているカラフルな写真を見たことがあり、それを参考に自分たちもやってみようと考えました。材料は机と椅子しかなかったの、それらをひっくり返して二段に重ね、寝袋を持ち込んでベッドを作り、製図室を24時間利用することに。

我々4～5人と、ほかにも2～3組がそれぞれブロックを作り、製図やコンペの準備をして過ごしていました。

建築学科OBに聞く

自主管理 自らつくった学びの場

学生運動が継続する中、24時間開放された製図室を学生たちは自主管理するようになっていく。当時を知る3人のOBに話を聞いた。

制限された学びの場

講義を受けている時に突然、ヘルメットを被った学生たちが入ってくるんですよ。そして先生を囲んで「あなたはおかしい」と。大学がまだ民主化されていない中でいうことを聞いているのはおかしいじゃないかといって、動きが取れないようなことをするんです。

我々からすると、勉強する機会を妨げられていたわけですね。

心ある先生の学外授業

そんな状況がエスカレートし、授業もできないし一般学生も被害を受ける環境だということで、大学がロックアウトされて入れなくなりました。

先生たちは何も言わないけれど、中には「少なくとも学生に授業もせずただ放置しておくのはいかがなものか」と考える有志の先生もポツポツいて、学生を集めて近くの喫茶店で講義のようなものをしてくれました。少人数で「こういう本を読んだらいいよ」とかね。あとはもう自分で主体的に勉強するしかなかったけれど。

最終的に学生を縛りすぎると反発でいろいろ起こってくるとして、かなり自由に大学を使うことを許されるようになりました。

インタビュー 02
内田青蔵さん／井上祐一さん／金丸壽男さん(ともに7期生)



製図できる環境を求め、自主管理を要望

製図室の自主管理が始まった背景には、白濱謙一先生をはじめ、建築学科計画系の先生方の理解と支援があります。

当時の白濱研究室では、研究生や卒業生が5〜6人集まって実施設計を行い、教育とアルバイトを組み合わせた活動をしていました。けれど多くの学生が自宅に製図道具を持っていなかったもので、夜間も自由に作業ができる環境を望み、製図室の自主管理を希望する声が高まったのです。

そんな要望を白濱先生は受けて大学に掛け合ってくれ、自主管理が実現しました。

講義より大切なもの

白濱謙一先生は自身の生き方をすべて見せ、それを通して学生に建築を理解させようとする人だった。学生と一緒に昼食をとったり、応接間でお茶を飲みながら雑談を楽しんだ。学生はゼミよりも

生活の中にあるこの雑談に価値を感じていたという。

学生運動が終焉を迎えたのち、製図室は学年の制限もなく開かれた自由な創作の場として、教授や学生同士の会話が広がる環境となった。

議論し助け合う、自由なコミュニティ空間に

我々が学部4年生の頃、4階の製図室は下級生が利用し、6階の部屋は4年生専用の製図室になっていました。1、2年生の頃にロックアウトで制限された反動や経済的な理由で、壁を張って自分の部屋を作り暮らしていた人も。朝から集まって、電熱器で自炊してみんなで食べる光景があったり、ベニヤ板で作った鍵のかかる部屋で交互に寝泊まりしては起こし合う生活をしていました。

共に過ごす環境の下で、お互いの作品を見て褒め合ったり議論したり教えてもらったり、切磋琢磨し助け合うような空間だった。単なる作業場ではなく、製図室は建築学科独特のコミュ



ニティ空間となり、共有する自由な環境が創造性や学びにおいて私たちに深く影響していったと思います。

建築コンペへの積極的な挑戦

学生運動のさ中であっても、製図室で落ち着いて設計の楽しさを味わえるよう、建築学科では様々な活動が行われていた。

2007年まで教鞭を取られた高木幹朗先生は1971年、研究室(4期生)と共にタンザニアの国会議事堂などを対象に開催された国際コンペ『NEW NATIONAL HEADQUARTERS FOR TANU, AT DAR ES SALAAM, TANZANIA』にチャレンジ。ものづくりへの熱意や楽しさを学生たちに伝えた。

一方、白濱研究室の学生たちは製図室を合板で区切って場所をつくり、そこを拠点に卒業設計やコンペなどを行っていた。さらに志水研究室では、前述の今井さんを含む白濱研の学生や下級生とともに合同設計に挑戦し『新建築住宅設計競技1970』では革新的な住宅設計に取り組んで、受賞する実績をあげている。

製図室が自主管理の場となったのは、こういった活動のおかげでもあった。

うちだ・せいぞう
1975年神奈川県立大学工学部建築学科卒業、1977年同大学大学院修士課程修了、1983年東京工業大学大学院博士課程満期退学 工学博士／2009年神奈川県立大学工学部建築学科教授、2022年神奈川県立大学建築学部長

いのうえ・ゆういち
1975年神奈川県立大学工学部建築学科卒業、2004年工学院大学大学院博士課程修了 博士(工学)／井上祐一建築研究室／神奈川県立大学非常勤講師

かなまる・ひさお
1975年神奈川県立大学工学部建築学科卒業／2016年3月まで神奈川県立大学に勤務

喪失した伝統

建築学科創設以来の自由な気風は、そのときどきの時代の風に翻弄されつつも誇りとして受け継がれてきた。しかしながら新型コロナウイルス蔓延に代表される様々な要素により、その伝統は失われつつある。今このときキャンパスに学ぶ者として想うこと、めざす未来について語りたい。

世界的感染症が大学を変容させた

2020年、新型コロナウイルスの蔓延によってあらゆる分野で自粛が強いられたことは記憶に新しい。神奈川大学への影響も大きく、大学への入構が禁じられるなど緊急措置が取られた。

授業体制も変更せざるを得ず、これをきっかけに遠隔授業が誕生。学内での授業は非常に制限され、建築学科においてもそれは同じだった。講評会なども4階の製図室で学生が一堂に会することはできず、教授や発表者などの一部が立ち入る形が取られた。

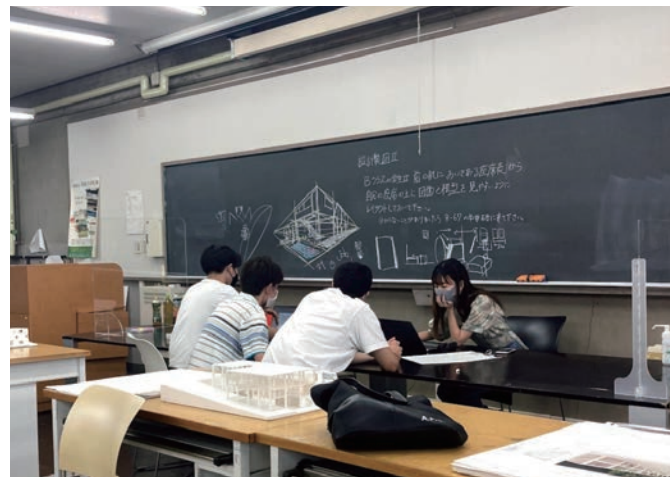
研究室も当初は入室すらかなわず、その後もしばらく多くの活動が制限された。プロジェクトは停滞し、卒業・修士設計期間内でも学生には家や個室での作業が推奨されるなど、研究室がもっていた活気は失われていった。



制限を超え生まれる新たな想い

製図室・研究室の24時間開放もなくなった。しかし今でも、大学が閉まる間際まで残って課題や作品づくりに取り組む学生の姿はある。コロナウイルスで途絶した研究室の垣根を超えての交流や、建築家の討論会の映像を見ながら意見を交わし合うかつての光景も戻りつつある。

さらにオンライン環境を活用した遠方との交流が増え、“新しい自由さ”への想いが育まれはじめている。



“自由であれ”受け継がれてきた誇りを取り戻し、未来へ

過去の学生たちから継承された神大建築の歴史や文化は、時代の流れや様々な出来事を経て変化し続けてきた。私たちはそれをどう感じ、どのように次代へつないでいけばよいのだろう。

過去を振り返らなければ、その価値や努力を理解することはできない。当たり前のように使えている製図室や研究室は、先輩たちが利用できるよう行動した成果だ。

しかし今の私たちは、受け継がれてきた創造の場を失いつ



つあることを許容してしまっている。自由を求めながらも行動には至っていない。それこそが大きな課題と考える。

かつて先輩たちがそうしたように、学生ひとりひとりが声を上げることで大学の環境は変わっていく。彼らは困難な環境に屈することなく建築コンペに勤しんだ。この姿勢に学びたい。同時に自由を手にするため自身が持つべき責任感をも、当然ながら忘れてはならない。

先達が勝ち取り、つないできた神大建築伝統のリベラリズムを、未来に向けて復活・継承していく。私たちこそが今、そのきっかけとなるべきだろう。

編集後記



私たちが特集「神大のリベラリズム」を創り上げるにあたり、過去の膨大な記録を調べ上げた。今私たちが当たり前のように神奈川大学で学んでいる環境の背景を知ることができ、これからどうしていくべきかを考える大きな起点になったと思う。
(大石純麗 鈴木研究室)



得られた情報のうち何を載せるべきか。広い範囲で考えると中身が薄くなってしまう。テーマを見返し全体を見通し、最終的な決断をする難しさを感じた。
(早坂恒成 山家・柏原研究室)



神奈川大学の歴史を学び、過去の建築学生や教授の成果に感謝し、現代の私たちがどう貢献できるかを考える機会となりました。多くの情報を集め、困難を乗り越えながらも、無事に冊子を完成できたことに感謝します。
(佐藤秀哉 曾我部研究室)



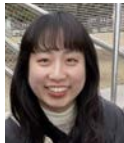
今回の特集でたくさんの先輩建築学生から多くの建築学生ならではの話を聞くことが出来た。建築というものは常に身近にあり学ぶことが多岐にわたる。限られた時間での学びのなかで、色々なことに挑戦する大切さを感じた。
(平井 翼 山家・柏原研究室)



今年は前年と比べて作業人数が多かったため、より良い成果が期待されましたが、人数が多いためになかなかまとまらず、情報や考えの共有がうまく進まないことがありました。また、一人ひとりの作業に対する責任感や積極性が重要だと改めて感じました。しかし、無事に完了できたことは良かったです。
(高橋昇太郎 六角研究室)



建築学部創設をきっかけとして、過去の神大建築学生の軌跡を辿る特集が組まれた。のびのびと研究室を利用し自由に活動できることは当たり前のことではない。今建築を学ぶ我々は、過去の学生や教授が培った神大建築ならではのこの環境を、より一層大切にすべきではないだろうか。
(平島 岳 曾我部研究室)



大学院より神奈川大学に就学し、今回のRAKUを通して神大について知れて良かった。過去の神大建築学生や教授が培ってきた良き神大建築を大切にしていきたい。
(田口綾乃 上野研究室)



神大が持つ様々な歴史を調べていく中で、学生であった方々から当時の状況についてのお話を聞き、現代の学生である私たちの在り方を考え、これからどうするべきかを答えていく必要があると思いました。
(吉田慶祐 曾我部研究室)

阿部凌大／稲葉圭美／鈴木迭武／東野葉月／王 斯文／許 智程（曾我部研究室）

監修・編集協力
二階さちえ（青空編集事務所）

参考文献

『神奈川大学工学部建築学科 創設50周年記念誌』 神奈川大学工学部建築学科/シュープ rint

『神奈川大学90年のあゆみ』 学校法人神奈川大学/神奈川大学百年史編纂委員会専門委員会 神奈川大学史料編纂室 編集/河北印刷株式会社

『神奈川大学100年史 資料編Ⅰ』 学校法人神奈川大学/神奈川大学百年史編纂委員会 神奈川大学史料編纂室 編集/神奈川新聞社 クロスメディア営業局出版メディア部

『RAKU vol.7』 神奈川大学工学部建築学科デザインコース

建築探訪

MARU。architecture
高野洋平＋森田祥子

建築探訪 kenchiku tanbō

未来の建築家たちへ 若手建築家の事務所を訪問

設計事務所での実際の仕事や働き方を紹介。
これからの建築業界を担う若手建築家の事務所を訪問し、
建築設計のリアルな現場を紹介する。
設計事務所の働き方、建築家の考えを知り、
これからの学生の目指す VISION を伝える。



MARU. architecture
高野洋平＋森田祥子



高野洋平

1979 年愛知県生まれ。2003 年千葉大学大学院修了。
03 年佐藤総合計画。13 年 MARU. architecture 共同主宰。
16 年同大学院博 後期課程修了。22 年高知工科大学特任教授。



森田祥子

1982 年茨城県生まれ。2008 年早稲田大学大学修了後
08 年佐藤総合計画。10 年 NASCA。
10 年 MARU. architecture 設立。13 年から共同主宰。

Who is ?

高野洋平と森田祥子が共同主宰する建築アトリエ。
誰もが居場所を見出せる空間、人々に親しまれる建築
を目指して、公共施設から個人住宅まで幅広いプロジェ
クトに取り組む若手建築家ユニットです。
地域と共存する設計を重視し、自然や社会に開かれた環
境を創造しています。

主な受賞として、松原市新図書館設計・施工者選定プロ
ポーザル 最優秀賞、日本建築家協会優秀建築選 2017 (間
の間の家)、グッドデザイン賞 (二重窓の集合住宅)、東
京都建築士会住宅建築賞 (Around the Corner Grain)、
土佐市複合文化施設設計者選定プロポーザル 最優秀賞。
他多数。

Workday

MARU.
architecture
の 1 日

設計事務所
働き方に密着。探訪

2024.06.13 Thu

12:00

お昼

Lunch Time



キッチンカウンター

お昼休憩は、高野さん・森田さんも集まり
楽しくお話をしている時間が流れていました。
みなさんとお話できると思わず、ド緊張...

14:00



模型土台づくり

設計事務所の作業実態！

15:00

コの字に配置されたデスクは、事務所を
見渡せ、スタッフ同士のコミュニケーションが活発に図面作業、パース作成、打
ち合わせといった作業風景が見られた。

集中作業



ペンダントライト
特製のチェア

18:00

詳細デザイン

梁のデザイン。屋根に降った雨
水は曲面の梁に導かれ、柱から
地面へ落ちるようになっている。

模型土台・修正完成

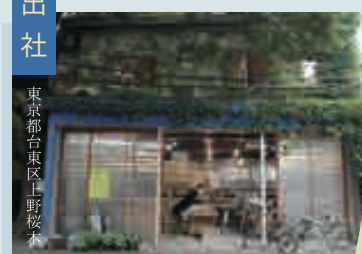


退勤

ありがとうございました！

9:45

事務所に到着



上野公園を抜けて、閑静な住宅街の先
に突如として現れた緑溢れるその外観
に、驚き！開放的な大きな扉が私たち
を招き入れる。

ポツと緑豊かな事務所が現れた！

10:00

中川運河堀留開発



プロジェクト

名古屋市の中心に位置する中川運河堀留に新しい交流
拠点計画、内外をおおらかに包むルーフとランドスケ
ープによって新しい水辺空間をつくるプロジェクト。
さっそく、模型からお仕事スタート。

S=1:50模型



高天井模型置場

13:00

部材作成



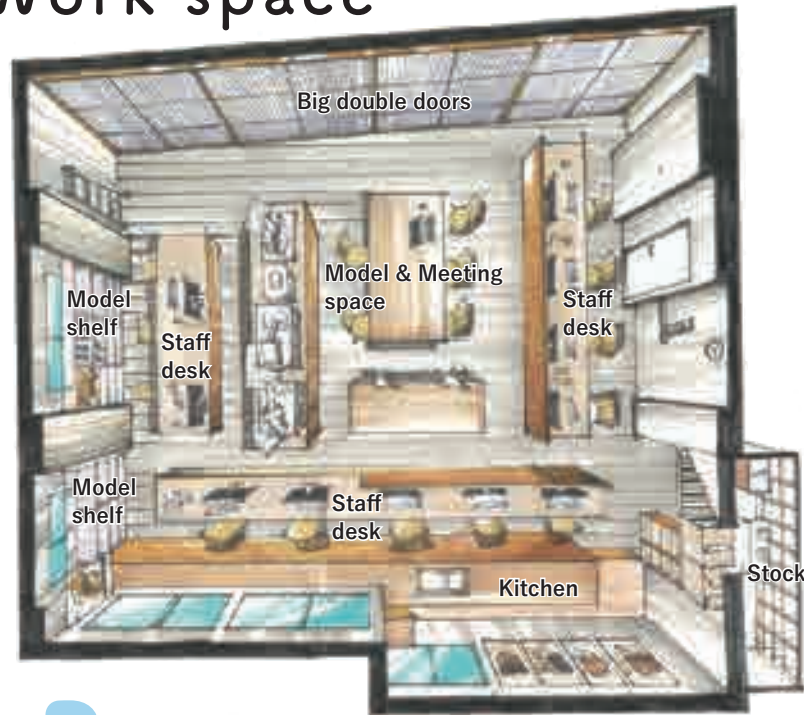
S=1:20 屋根の部分模型



材料置場

小さなスペースでも有効
に使われた模型材料や機
材置場。使いやすく、見
つけやすい。

Work space



1 ground floor

まちとつながり、人と繋がる

大きな木、閑静な住宅街からふと現れるカフェのようでもあり、倉庫のようでもある建物。それが、MARU. architecture の事務所である。1 階は、4m の高い天井に、赤い鉄骨の梁がアクセントになったインダストリアル倉庫のような雰囲気が漂う。入り口の大きな木製戸は素材がポリカーボネートで光を通し、中の様子が、まちにも滲み出している。季節の良い日は常に開かれ、まちとつながっている。そこには、地域の住民や芸大生がふと覗きに訪れ、ちょっとした会話が日常的に生まれている。内部の什器の配置により、どこにいても見渡せるレイアウトがそれを可能にしているのかもしれない。1 階は、まちとつながり、人と繋がる仕事場である。



溢れる多彩な模型

事務所には、たくさんのプロジェクトの模型。高い天井を利用したロフト上のスペースを有効に活用している。模型を見ながら作業できる職場。



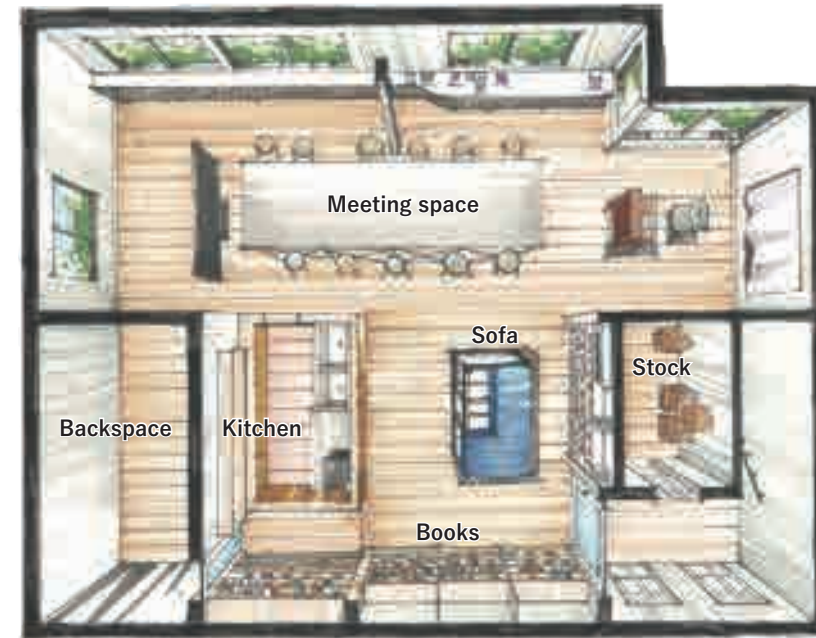
夏は虫との戦い

開放的で緑のある事務所は、常に大きな扉が開かれていて気持ちの良いが、やはり夏は虫が入ってきてしまう。仕事に集中するためには対策も大事である。



見える配置、見渡す居場所

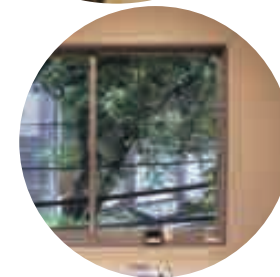
コの字状のスタッフエリア、中央には大きな作業デスクが配置されており、仕事でどこにいても互いの活動が感じられるようになっている。また 2 段ほど上がっているキッチンは事務所全体を見渡することができる。



2 first floor

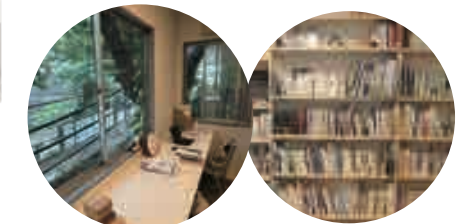
多彩な居場所、緑の世界

階段を上がるとそこには落ち着いたカフェ。ではなくスタッフスペースがある。建築事務所とは思えない大きなキッチンにカラフルな什器たちが並んでいる。棚は、建築雑誌、窓際にはアートのパンフレットや可愛い置物が置かれている。一際目立つのは、窓に溢れる緑。静かで豊かな空間は、都内にいるのを忘れさせてくれる。2 階は、打ち合わせも仕事も自由にスタッフが過ごせる居場所である。MARU. architecture の遊び心も要所に散りばめられている。



オリジナルのカラフルな什器

丸みのあるカラフルなスツール、ステンレスの天板の長テーブル、吹抜けソファなど事務所を彩るオリジナル什器たち。



ほんと、一息できる場

窓際のカウンターは、豊かな緑を眺めながらひと息できる。本棚の資料や、アートの作品集などを読みながらコーヒーを。そんな心地の良い居場所になる。



楽しむ、仕組みを。

床設置ソファは、2 階入り口中央に設置されているがなんと床に開口があり、吹抜けとして下とつながっている。どこにいても、互いを感じれる面白い仕組みだ。



MARU. architecture

森田祥子

高野洋平

interview

中井研究室 横山凱一
中井研究室 顔凡迪
六角研究室 西岡理子
六角研究室 張
曾我部研究室 渡邊終吾

開かれたドアが地域をつなぐ

西岡：初めて訪れた際に、大きな木が突然あらわれて、そこに大きなドアが解放されているのがとても印象的でした。大きなドアをつくった意図はなんですか？

高野：建築家は、はじめに自宅などを事務所としますが、僕の場合はマンションに住んでいて、その時に感じたのが人との隔たりでした。そのため、自宅ではできないような人との繋がりを考えていました。そしたら、東京藝術大学の学生とか、地域の住民の方はよく事務所を通るので、私たちの事務所を認知してくれています。

森田：みんな何となく歩いていると出入口が開放されているので、設計事務所があるぞと知ってくれて、周辺の住民ともコミュニケーションが円滑にできますね。

高野：東京だけど、ここは地縁社会もあると思います。花重（創業 150 年の歴史を持つ花屋「花重」の改修計画）のお仕事もこれがきっかけ。大きなドアを開放することによって地域とのつながりが持ちやすくなりました。

建築というものを知る（学生時代）

張：学生時代に一番影響を受けたプロジェクトを教えてください。

高野：僕が学生だった頃は 2000 年代初頭だったので、伊東豊雄さんの「せんだいメディアテーク」ですかね。「せんだいメディアテーク」から始まる一連の伊東さんの活動に当時はとても影響を受けました。建築というのはその時代に生きる人の自由を広げていくような側面があると思っていて、「せんだいメディアテーク」というのはその時代において新しい人のふるまいとを受容するような新しいスタイルだと思ったからです。

森田：私も伊東さんにすごく影響を受けていて、修士の 1 年生のときに東京オペラシティアートギャラリーで「新しいリアル」という展覧会を伊東さんがやったのがすごく面白くて、「瞑想の森」（岐阜県各務原市に建つ齋場）の模型があったり、様々な新しいプロジェクトを見ることができました。それまで自分が大学での課題という抽象度の高いものに対して設計しているものが実際に建築としてどのように結びついているのか全然想像がつかなかったのが、この展示会を機に、伊東さんの思想を知り、建築が楽しそうだというのが改めて感じてそこに影響を受けました。

他にも、私の恩師の古谷誠章さんが設立した NASCA という設計事務所です。「桜山小学校」（群馬県高崎市にある小学校）のプロポーザルを修士の 1 年生の時に当時所属していた古谷研と合同で参加し、勝ちとった経験がありました。そこから一年間「桜山小学校」の実施を NASCA でおこなって、実際のプロジェクトに携われたというのも自分の中ではすごく影響が大きくて、目の前で古谷さんが階段のスケッチを描いていたり、寸法をどのように決めていくのか、自分の中のリアリティみたいなものを初めて手に入れることができたのかなと思います。



「せんだいメディアテーク」※1



「高崎市立桜山小学校」※2

歴史に紐づいている文化とかがあって、 その流れの中で今何をするか

横山：学生たちへ、お二人が学んでおくべきだったと思うことを教えてください。

森田：建築家になったら研究がなかなかできない。古谷研にいたときは中国の集落研究をしていて、実際にそこで見た、人の暮らし方だったりとか社会のありようなどがすごく今の設計には活かしているが、研究という目線でもう一度見直すほど時間が今はなくて、研究みたいなことは学生時代の特権だったのかなと思いますね。

あとは、建築周辺のアートやインテリア、文化人類学的なことだったり、分野的に建築寄りだった周りにある面白さは設計を始めてから大切さに気付きました。なので、学生に戻ってというだけでなく、今も知りたいなと思いますね。だから、そのような知識を持っている人には感銘を受けますね。

高野：特に歴史的なこと文化的なことを今でも学びたいと思っているし、学生時代にももっと勉強できたのかなと思いますね。学生の頃は考えが浅かったなと思います（笑）。今だから興味があることとか結構ありますからね。

横山：私の研究室（中井研究室）の教授にも、学生の間にいろんなアートを見ていたほうが良いと言われていたので、大人になって気づくことがあるということですね。

森田：先日シンポジウムに参加した際に、一緒に登壇した湯浅良介（内藤廣事務所出身）がアートや文化にとっても詳しく、彼はシュールレアリスム（超現実主義）の話が得意で、結局芸術運動との文化は建築も一緒に起こっていると思うのですよ。どうして建築がこのような歴史をたどってきたのだろうと考えると大きな経済の流れとか文化の流れと連動しているから、そこには美術でも起こっていることがあり、全部絡んでいる。だから展覧会に行くのってすごく勉強になるなって思います湯浅さんは、解説してくれたりもするの

で、その解説中に急に建築家の名前だったりとか有名な文化人類学者の名前が出てきたりして、そこで改めてつながっているのだなと感銘を受けます。
高野：いろんなことにすごく理由があると思いますね。今だけで建築を考えることはたぶんできないと思います。それはやっぱり過去から続いてきている歴史とか時代感とかそれに紐づいている文化とかがあって、その流れの中で今何をするかを考えるしかないと思いますね。それがないと建築は考えられないものだなと今すごく感じますね。

建築家の言葉に触れる

横山：建築家になるために学生に向けてアドバイスありますか？

高野：建築をやめないことが一番だと思いますね。一緒に建築を学んだ人ももう建築をやめてしまった人がほんとに多いですね。

森田：私もそう思いますね。とても優秀だった同級生とかが違う業界に行く場合もありますね。知らない間に建築家が少なくなってしまうですね（笑）。続けたら意外と何とかなりますね。

高野：昔、原広司さんが建築家になりたかったら建築家のそばにいろという言葉を残したと聞いていてその意見にも確かなと思いますね。建築という一つの文化があって、自分の好きな建築家の言葉に触れるなど、そういうことは大事なのではないかと。ルーツみたいなものをみんな持っていると思うんですよ。建築家それぞれが。みんな影響を受けてきていると思うし、それが大事なことはないかな。

横山：お二人は、建築家の考えで今も大切にしていることはありますか？

森田：私が大切にしているのは、初めて個展を開いたときに自分たちのこれからの建築における表現の表明がなくて、そのことを伊東さんに相談したところ、自分のスタイルを自分で作ってはだめだよと言われたんですよ。確かに伊東さんは自身の確立したスタイルだったりとかがなくて、震災とか社会情勢などに影響を受けながら、自分自身の考えが更新していった、前までやっていたことが正しいと思わず、全然違った作り方になることがたまにあるらしく、伊東さんの人生の中で何度か起こっていて、その在り方の柔軟さはすごいと思いました。確かにスタイルを自分で決めちゃわないからこそできることだとしたら、我々もそっちを目指したいなと思いますね。

高野：変わり続けないと建築はつくれないうのは、すごくあることだと思います。

森田：社会状況が違うと思うので、その時のベストを尽くすのが一番ですかね。

※1 写真提供：宮城県観光課

※2 写真提供：有限会社ナスカ一級建築士事務所

修士論文

宮島 里帆
穂屋下 直輝
西村 和将
池田 直也
兼田 聖人
池原 なつ子



撮影：塩脇祥

事務所2階にて、インタビュー後の記念撮影

編集後記

中井研究室 横山凱一

今回の企画にて、ご協力いただいた MARU。Architecture の皆様、誠にありがとうございます。インタビューで、高野さんと森田さんにお話を伺った中で、設計をやめなければいつか有名になる日が来る！自分のスタイルを決めつけず、色々と変わってもよい！という言葉に私は感銘を受けました。「RAKU」探訪の企画で、これからの建築の見方、考え方を見直すきっかけとなったと思います。

六角研究室 西岡理子

1 日インターンの編集を行いました。現在注目されている事務所の元でインターン体験ができて、緊張しすぎてしまいましたが、とても貴重で新鮮な体験となりました！模型製作に携わせていただいた「中川運河堀留開発」のプロジェクトの完成を心待ちにしています。

曾我部研究室 渡邊柊吾

今回の探訪では MARU。architecture さん取材させていただきました。1 日インターンをさせて頂いたときには、こんなふうに建築をつくるのか。と建築を設計する過程を学び、インタビューで高野さんと森田さんに話を伺ったときは建築をつくることの面白さを学んだ。貴重な経験をさせて頂いた MARU。Architecture の皆様に心よりお礼申し上げます。

中井研究室 顔凡迪

MARU。architecture さんの森田さんと高野さんにインタビューさせていただき、事務所に訪問させていただく機会を得ました。お 2 人の学生時代の感想を伺い、私たち学生に対する貴重なアドバイスをいただきました。また、お 2 人が認識している建築設計の変化についても学びました。このインタビューを通じて、建築設計業界についてより深く理解することができました。お忙しい中、私たちに貴重な機会を与えてくださり、感謝申し上げます。

六角研究室 張逸村

MARU。architecture さんでのインタビューで、建築設計のプロセスやその奥深さを学びました。学生時代の考え方や建築家になるための道についても聞き、建築が文化や経済にどう影響するかを考えるきっかけになりました。建築家として成長するには、自由な発想と創造性が大切だと感じました。この経験を通じて、大学院での学びをもっと充実させたいと思います。

●ディプロマ賞



宮島 里帆

Riho MIYAJIMA

六角研究室
ROKKAKU lab.

- 内田

壁は固定化されて取れないのですか。それから
高さはどのくらいの高さを想定していますか。
- 宮島

高さは住宅内、住居毎に異なっても良いと思っていま
すが、想定では1200から1500くらいの少し高め

の壁にすることによってプライバシーも守れ
るような塀になるのではと考えています。塀自
体は固定化して、固定部が開閉することによっ
て変化が生む形にしたいです。

[スキマ]から考える居場所あるまち

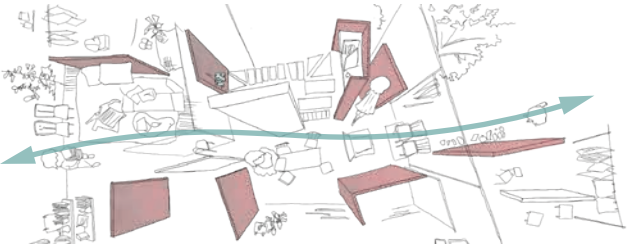
Think from "Sukima" about the city with whereabouts

閉じながらも開く住まい方の提案

Proposals for flexible living styles

1. 考察まとめと現代におけるスキマの課題点

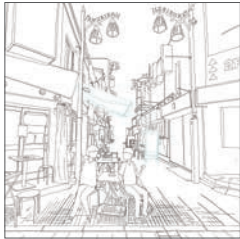
境界のあり方を見直すことで、スキマで営まれるなんでもない当たり
前の日常の中に、共有感覚を持つ commons を創出できないだろうか？



2. 分析 - スキマモノ

収集した 100 のスキマのうち活動の溢れ出し評価が最も高い5がつ
いたものについて、スケッチをしてその空間の再認識を行い特徴的なオ
ブジェクトをスキマモノと捉えて抽出した。

37 臨時居酒屋



撮影場所：東京都中央区千代5丁目56-15

新築形状：G型

2階建て店舗 / 2階建て店舗

特徴的なオブジェクト

可動屋根

立て看板

抜け	屋根	1階凹凸	1階凹凸	エントランス	開口	壁	幅	評価	
	左	右	左	右	小	中	大	左	右
○	△	×	×	×	△	○	×	×	×

75 風あいレストラン



撮影場所：東京都中央区千代5丁目56-15

新築形状：G型

2階建て店舗 / 2階建て店舗

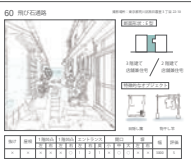
特徴的なオブジェクト

可動屋根

立て看板

抜け	屋根	1階凹凸	1階凹凸	エントランス	開口	壁	幅	評価	
	左	右	左	右	小	中	大	左	右
○	△	×	×	×	△	○	×	×	×

60 飛び込店舗



撮影場所：東京都中央区千代5丁目56-15

新築形状：G型

2階建て店舗 / 2階建て店舗

特徴的なオブジェクト

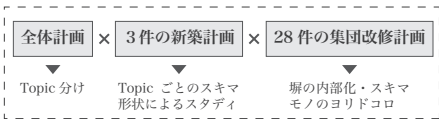
可動屋根

立て看板

抜け	屋根	1階凹凸	1階凹凸	エントランス	開口	壁	幅	評価	
	左	右	左	右	小	中	大	左	右
○	△	×	×	×	△	○	×	×	×

6. 連続してあらわれるスキマ

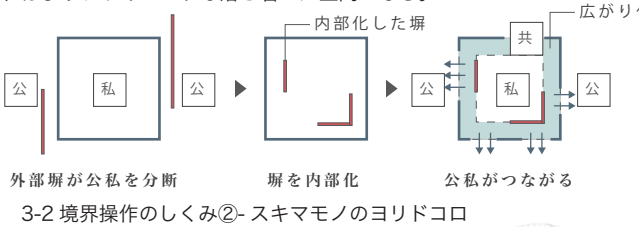
大通り沿いをたどって歩くと小さなスキマの
シークエンスが現れる。まちからスキマへ人々
が誘い込まれ、地域で暮らす人も初めて訪れた
人もそれぞれの背景にかかわらず交流を楽しむ。



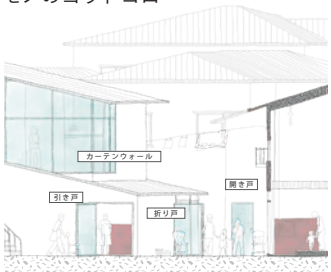
視線が奥まで抜けること
で連続して見渡すことの
できるスキマ。所々飛び
出すスキマモノに人々が
集い、交流が始まる。

3. 設計手法 - 内部化した塀

塀の内部化により可変性を持った境界のしくみを提案する。内部化し
た塀のさらに内側がプライベートを保たれた空間となることで外壁の開
閉の自由度が上がり、内部塀と外壁の間の空間はスキマが拡張する広が
り代としてのコモン空間となる。開くときはパブリック性を増し、閉じ
ればよりプライベートな落ち着いた空間となる。

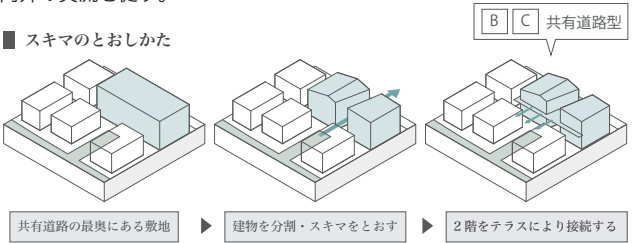


外壁の建具の開閉とともにス
キマモノが移動されることで、緩
やかに外に滲み出す人々の生活を
可視化する境界のしくみを提案す
る。建具が開くことで内部での生
活が外に溢れ出し、内外連続した
スキマモノのヨリドコロとなる。

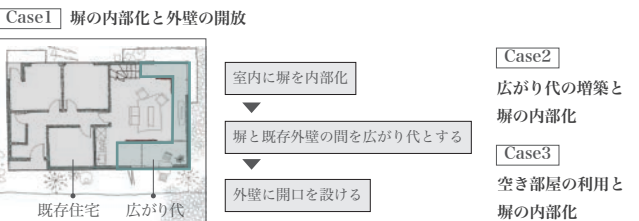


4. 新築建物とスキマ

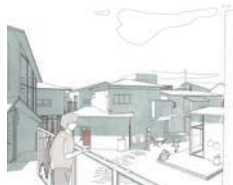
スキマ分類に関連してスキマを「とおす・ひらく・つなぐ」ことで
新たな建築とスキマの関係性を構築する。さらにこれらが都市・地域・
個人それぞれの間をつなぐ境界としてのスキマ空間となることで地域
内外の交流を促す。



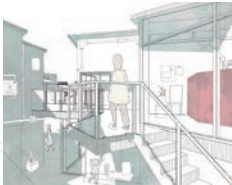
5. 改修による塀の内部化



建物に囲まれ、プライバ
ーと感と落ち着きのあるス
キマ。より生活感の出る
環境で隣人同士が共に生
活する。



細いスキマから一気に視
線が抜け、2階高さから
地域を俯瞰できるテラス。
建物に囲まれた小さな広
場が人々の集いの中心と
なっていく。



アパートの空き部屋など
とテラスを一体化させ、
立体的に繋がったスキ
マ。人々の動線が交差し、
さまざまな場所に人々の
溜まりができる。





●優秀賞



穂屋下 直輝
Naoki HOYASHITA

内田研究室
UCHIDA lab.

近代土木遺産としての新たな保存活用手法の提案

*Proposal of new of preservation and utilization
method for modern civil engineering heritage*

ー旧住吉浄水場施設群(1931年竣工)の地域産業博物館としての活用計画ー
- Utilization of the former Sumiyoshi Water Purification Plant facilities
(completed in 1931) as a regional industrial museum -

1. 研究背景・目的

土木構造物は本来、人が生活することを想定した空間ではないため、見学施設としての活用が主流であり、放置されている例も多い。よって、改めて、近代土木遺産の活用方法を議論することが必要と考える。

本研究では、旧住吉浄水場を対象とし、近代土木遺産の博物館へのコンバージョンを行う。諸施設における歴史的価値の所在や土木構造物としての潜在的な価値を明らかにし、「体験」をテーマとした新しい保存活用手法を提案する。

2. 住吉浄水場について

2-1. 成立と沿革 浜松市は、大正期から昭和初期にかけて人口が増加しており、都市化が急激に進行した。大正 13（1924）年に発生した異常渇水の影響で市民から水道敷設の要望が高まり、翌年から水道敷設計画が開始された。工事は昭和 4（1929）年 4 月に開始され、昭和 6（1931）年 3 月に竣工・稼働した¹⁾。以後、大原浄水場に役割が移管されるまで約 40 年間稼働し、工業都市浜松の産業発展、住宅地開発を支えてきた。現在では、上下水道部庁舎建設の影響で濾過池が失われているものの、その他の遺構や機械類はおおむね残されている。平成 24（2012）年には歴史的価値が認められ、場内の 6 施設（着水井・接合井・配水池・直送ポンプ井・ポンプ室・正門）と常光水源ポンプ室が国の登録有形文化財に登録された。ポンプ室は日本の近代土木遺産にも指定されている。昭和初期の浄水システムを伝える土木遺産として貴重な施設だと考える。



図 1 竣工時全景²⁾

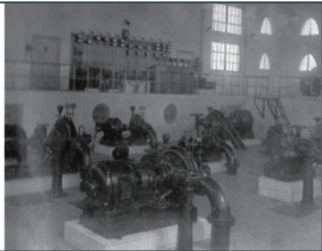


図 2 ポンプ室内観³⁾

須崎 浄水場という、スケールの大きいケースを丁寧に改修していいなと思いました。この頃の浄水場で結構開口部がガラスで大きかったりして、その明るい空間をうまくいかせているなと思いました。逆にこの浄水場特有の建築の特徴をどんな感じで生かしたのか聞かせてください。

穂屋下 配水池とポンプ室のトップが特徴にある場になっているんですけど、ここでは床面から天板までが 5000 程度の高があるので、その全体を見せるということと、一部床を与えてあげることでマッシュルーム構造部分を見学できる場所と、流動壁を取り除いてしまって全体の広い空間として表現するというような形で計画しました。

2-2. 現状と課題 計画地は静岡県浜松市中区の高台地区に位置する。から近いことが特徴で周辺には、住宅地・学校・商業施設等があり、住民がアクセスしやすい位置関係にある。また、住吉バイパス・姫街道等の市内南北を結ぶ主要道路が近く、自動車での訪問が容易である。敷地内には、土木遺産の他に上下水道部庁舎及び新設された配水池などの現在も稼働中の施設がある。

現在、場内の土木遺産は一般開放されていない状況で敷地外周部より建造物の外観の一部が確認できるものの、歴史的価値を適正に示しているとはいえない。



図 3 住吉浄水場敷地図

3. 施設の歴史的価値

表 1 施設の機能

施設名	構造	規模	用途	登録
①着水井	RC造	内径6.9m、水深6.8m	旧常光水源ポンプ室から送られてくる水の勢いを止め濾過池へ水を送水する	○
②濾過池	RC造	南北35.5m×東西29m	3池の濾過池に運ばれた水はここで濾過される	－
③接合井	RC造	内径13m、水深2.7m	濾過池できれいになった水の水質を均等に	○
④配水池	RC造	南北34m×東西25.4m 有効水深4.25m	接合井を経た水を貯蔵する 2つの池があり貯水量は7,000t	○
⑤直送ポンプ井	RC造	内径6m、水深6.9m	配水池の水を高区用・低区用に分類する 低区用はここから自然流加される	○
⑥ポンプ室 (配電盤室)	RC造 鉄骨屋根	東西23.0m、南北17.6m (東西9.8m、南北3m)	①配水池に浄水をポンプ圧送する ②高区用水・消火用水をポンプ圧送する	○

①着水井 表面は八角形に分割され洗出し仕上げで装飾されている。角に柱型がつつけられているほか上下に 3 分割された古典的な建築構成がみられる。

②濾過池 西端の一部が残されているのみで形状・機能共に失われている。濾過池は、3 池からなり、唯一浄水過程（構造物）を見ることが出来る施設であった。

③接合井 内部に導流壁を設け、上部は平板床の上に土を載せ、芝が張られている。表面は洗出し仕上げで柱型が付き、柱間の目地は石積みを模している。

④配水池 貯水量 7000t の池が 2 つあり、池内は 7 個の導流壁で水を流動させる。池の中には柱が立ち柱頭マッシュルーム構造の無梁板上部を支えている。2 つの池の間には監視通路が通り南北両端に入口となる塔屋が立つ。壁面は洗出し仕上げで目地を入れて石積みを模している。

⑤直送ポンプ井 表面は洗出し仕上げで上下に 3 分割され構成である。基壇部には石積みを模した目地が、頂部にはメアンダー模様が付けられている。

⑥ポンプ室 平屋だが、外観は 3 階程度になる大空間を擁する。内部に構造的な支えは持たず外周の柱のみで維持しトラス屋根で覆われている。意匠（レリーフ・ステンドグラス）や機械類（ポンプ・配電盤）が残されている。



図 4 施設の現状

明らかにした価値ある部位（外部・内部）に対し、登録文化財としての「維持の措置の範囲」⁴⁾の条件下での価値継承と活用・改変方針について検討した。

4. 新たな設計手法の提案

土木構造物の価値は、施設の用途によって決定される大小さまざまな規模や特殊形状である。本計画では、土木遺産としての新たな保存活用手法を提案する。

4-1. 土木構造物の可視化 「①施設本来の状態」、「②隠れた構造物」の両側面を見せることで土木遺産としての価値を示す。2つの境界は明確に分断する。

住吉浄水場においては、地盤面下や建造物（装飾）に覆われている施設が大半である。そこで一部エリアを掘り起こし、土木構造物の底板までを見せる。

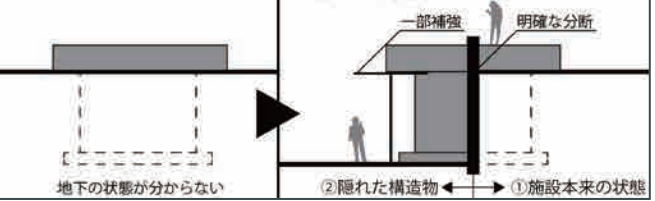


図 5 土木的価値の可視化

4-2. 潜在的価値の体験化 浄水場施設に水を流すと、着水井「止める」、濾過池「留まる」、接合井「混ぜる」、配水池「集める」、直送ポンプ井「分ける」ポンプ室「送る」という用途が現れる。しかし、現在は水の流れはなく各施設の「潜在的価値」は見えない。そこで、水に代わり人が動きかつ「体験」できる内部空間へ置換える。



図 6 潜在的価値の体験化

4-3. 視点場の構築 浄水場施設の魅力は大規模空間と特殊な構造物体である。これらを直接体験できる視点場を設け、施設の魅力を伝える。また、ヒューマンスケールに合わせた通路などを追加し大規模空間を強調する。

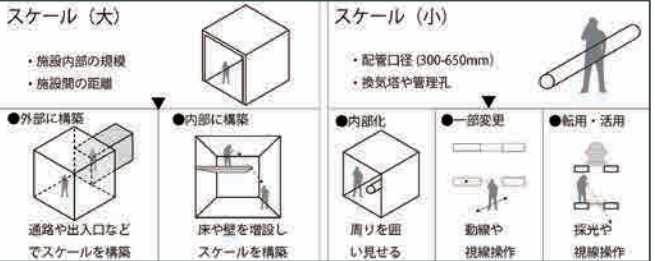
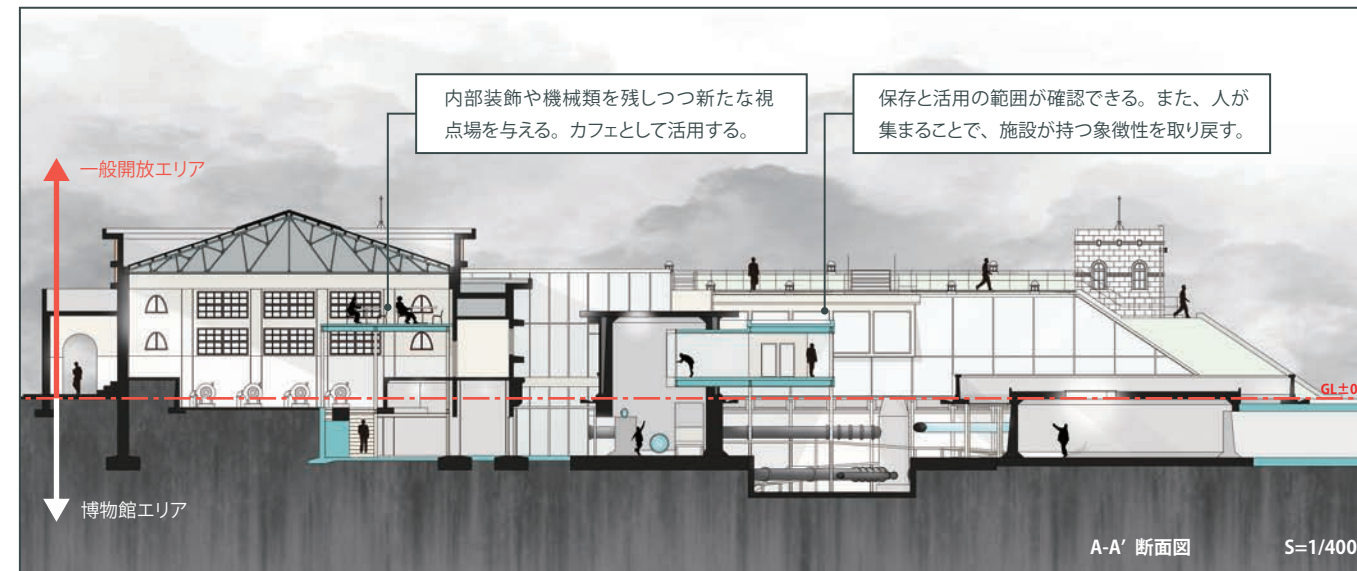
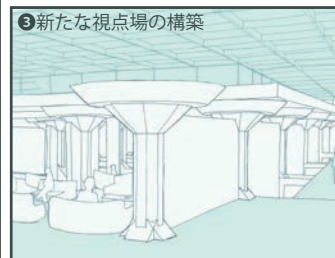
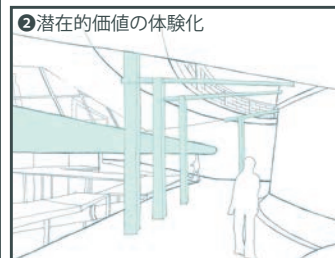
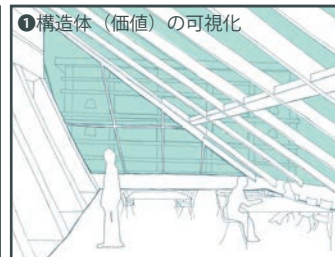
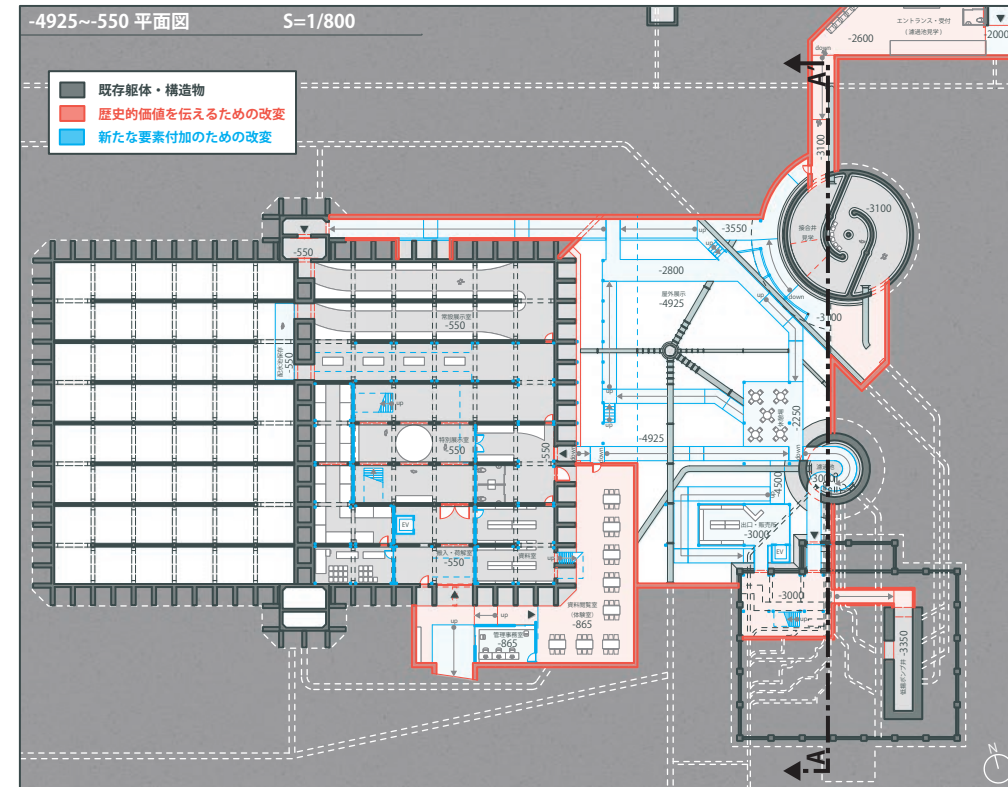
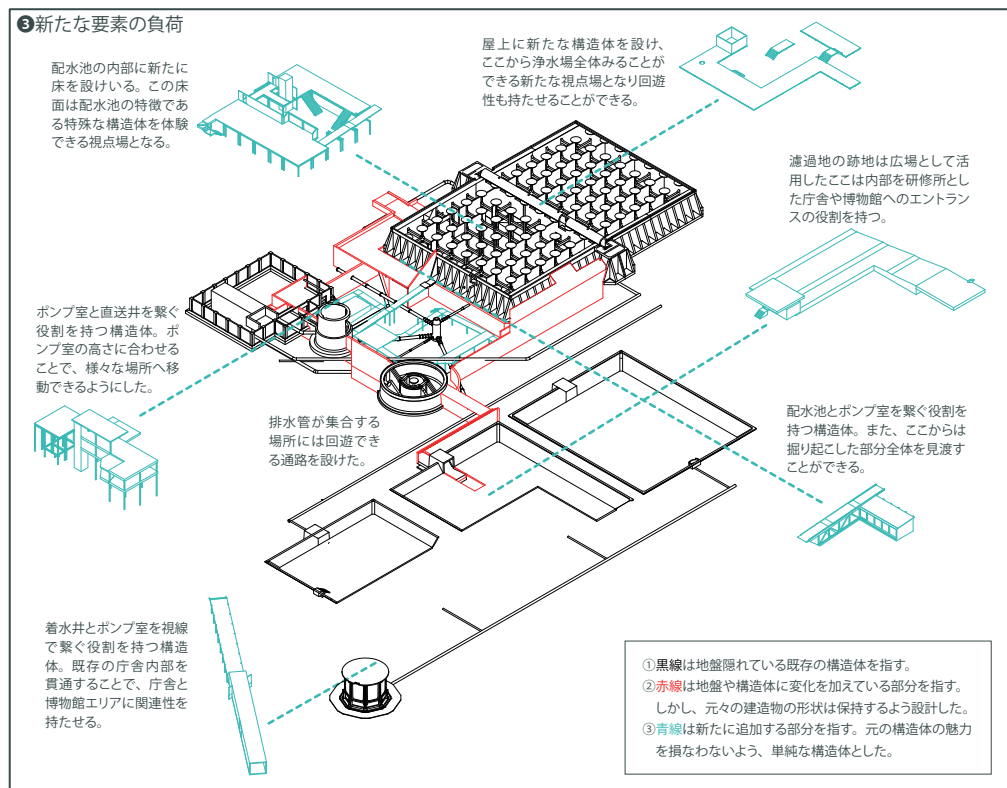
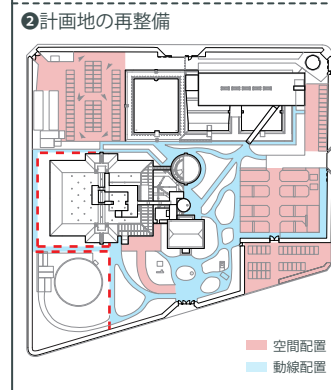
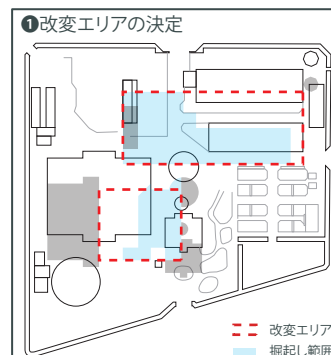
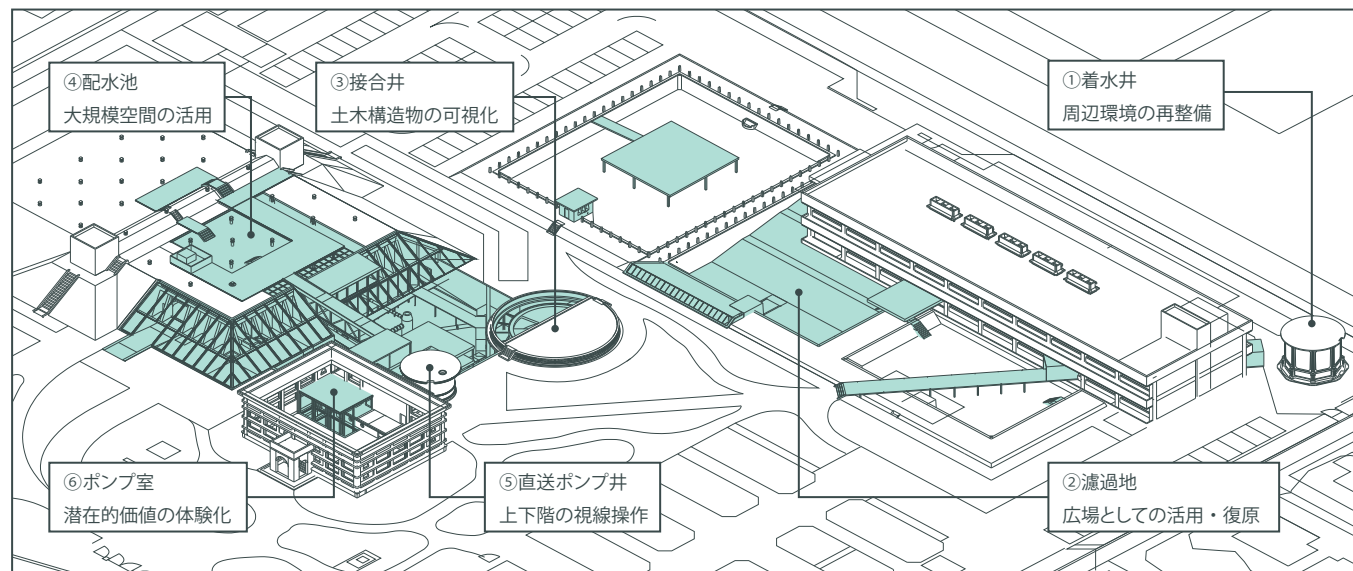


図 7 視点場の構築

【註釈】 1)静岡県建築士会『浜松市上下水道部旧住吉浄水場ポンプ室等調査業務報告書』、2010年、2)3)浜松市上下水道部所蔵、4)ー登録有形文化財が建造物であるときは、登録当時の原状（登録後において現状変更の届出を行ったものについては、当該現状変更後の原状）の通常望見できる外観を損なう範囲が当該外観の四分の一以下である場合（移築の場合を除く。）（文化庁「登録有形文化財に係る登録手続及び届出書等に関する規則第十七条」平成八年文部省令第二十九号、1996 年、https://elaws.e-gov.go.jp/document?law-id=408M50000080029、2023年10月30日閲覧



● 優秀賞



西村 和将

Kazumasa NISHIMURA

六角研究室
ROKKAKU lab.

- 中井

ヴァナキュラー・オブジェクトは家としての全体性という部分もあると思うのですが、全て取っ払ってしまうのはなぜですか。また、なぜこの様な複雑な形にしなければいけないのですか。
- 西村

生活スタイルの変化により住みにくい環境になっていることや、新たなスタイルにあったけどお屋敷のような空間スタイルを内包している建築を提案し

たかったためこのような構成にしました。また、複雑にしようと思い取り組んだのではなく、ヴァナキュラー・オブジェクトの集積によって風景になるかという実証実験の様なことをしたら、意外と複雑になりました。

作品の詳細はこちらへ



蘇ル故郷の風景

Scenery of my hometown revived

-富山県山王地区矢部を対象としたヴァナキュラー・オブジェクトの提案-

Proposal of a vernacular object targeting Yabe, Sarro distict, Toyama prefecture



“地域性ある風景”の再考

提案する建築たちが地域へと普及することで、地域全体で一連の地中水脈環境を有する環境が現れます。
その環境下でカイニョと養鯉池が育まれ、提案するヴァナキュラー・オブジェクトが街へと普及し、
自然環境の変化を享受した人々の振る舞いが現れ、“地域性のある風景”が蘇ります。

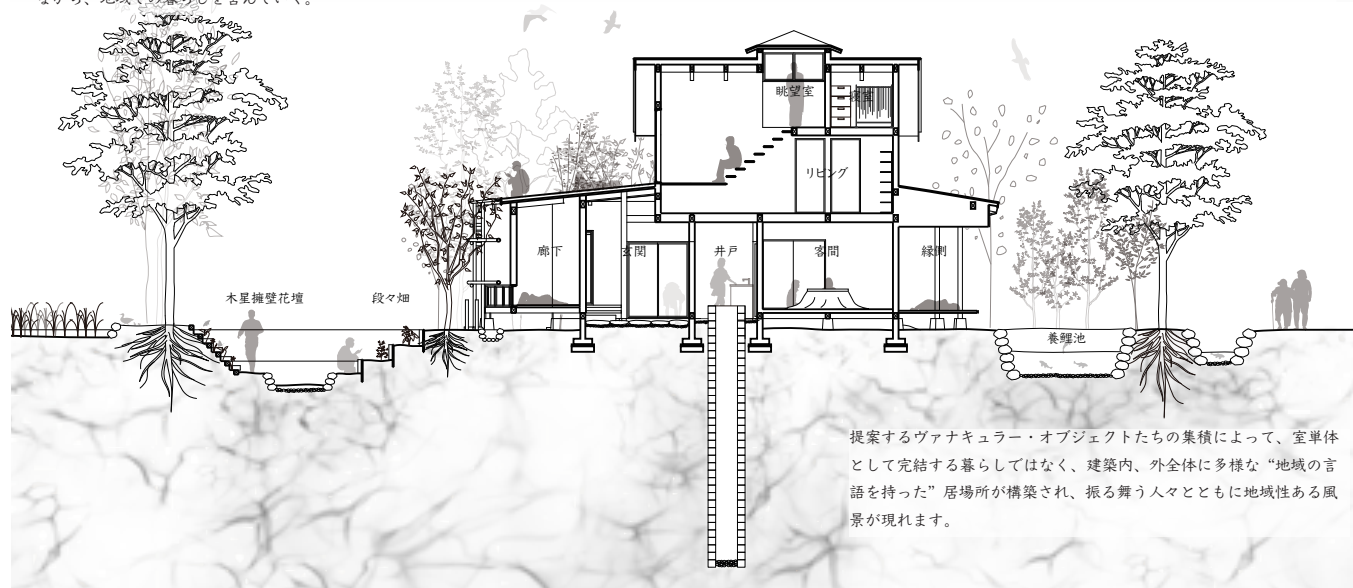


かつての人々の暮らしは限定された環境下で豊かに生きようとする様が”地域性ある風景”として現れています。
それと同時に変化を享受した自ら適した居場所を構築することは、一見すると不便な暮らしなのかもしれません。
しかしその環境下であるからこそ、適した環境を構築した時に暮らしの豊かさを得て、それが魅力ある風景として現れます。
現代において一律な環境下を求める私たちにとって忘れ去られてきている、
居場所の構築方及び”地域に暮らす”ことを再考した提案です。



地域に『暮らす』矢部の家

段階的な地域経験を経て、地域で働きながら暮らすことを決意した夫婦が
住まう住宅。
既存の大屋敷所有者が持つ田んぼを敷地として提供してもらい、互いに連
携し合いながら田んぼの管理をしていく。
農業従事者や通りかかる人にとってのサードプレイスとしての役割を担い
ながら、地域での暮らしを営んでいく。



提案するヴァナキュラー・オブジェクトたちの集積によって、室単体
として完結する暮らしではなく、建築内、外全体に多様な“地域の言
語を持った”居場所が構築され、振る舞う人々とともに地域性ある風
景が現れます。



周囲色の変化を映し出す外壁



季節で色移りする屋根



雪を集める大屋根雪で壁化し公私を分ける開戸



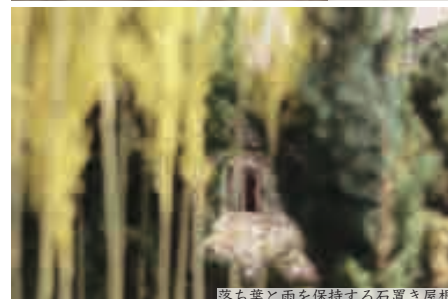
日光を浴びる緑側



作物を採る手がかりとなる草屋根



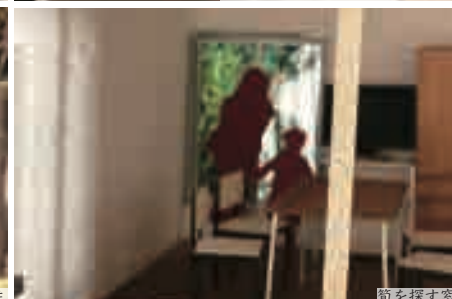
夏風を浴びる掃き出し窓付き階段



落ち葉と雨を保持する石置き屋根



干場となる組柱



前を採す窓



雪あかりを取り込む出窓



音を奏でる竹垣



冷感装置としての廊下 あいの風を廊下に取り込む地窓

変化を享受したふるまいを導くヴァナキュラー・オブジェクト



池田 直也
Naoya IKEDA

内田研究室
UCHIDA lab.

明治天皇の行幸が行われた住宅 とその行幸時の使われ方に関する研究

The study on the houses where the royal visit of the mperor Meiji was carries out and how to use it

-近代日本の上流層の住宅における洋館の導入過程について-

-About the process of introduction Western-style houses in prewar Japan, as a example of upper class's houses-

1. 研究背景 · 目的

日本の住宅は、幕末以降の西洋文化流入の影響を受け、洋館建設の開始などの変化を迎えた。洋館は、明治初期には上流層の日本人の住宅として建設され、その最初期の事例とされているのが、明治 4 (1871) 年起工の黒田長溥邸洋館である。洋館は和館に並ぶ形で建設されており、この形式は「和洋館並列型住宅」と称されている。また、同時期に毛利元徳も「和洋館並列型住宅」を建設した。内田青蔵は、明治最初期の洋館建設事例である両者がともに竣工時期付近に明治天皇の行幸という行為を迎えたことに着目し、天皇を迎えるための建物（以下、「行幸御殿」とする）として洋館建設が行われた可能性を指摘している¹⁾。

本研究では、この指摘について、明治天皇の上流層の住宅に対する行幸を対象に、「行幸御殿」の建築様式・建設時期を整理し、その使われ方を分析することで、近代日本の上流層の住宅における洋館の導入過程を明らかにしようとするものである。

2. 既往研究

行幸と上流層住宅における洋館建設の關係については、山本昌宏、平山育男による研究²⁾が存在する。山本は建物に関する資料が存在する 30 例の行幸を対象に、建築年代と行幸時期の關係から内田と同様に両者には強い關係があることを指摘している。平山は『明治天皇紀』から抽出した 43 例の行幸を対象に、その内 11 例で行幸に際した建物の新築が行われていたことから、行幸と上流層住宅の關係を考察している。

行幸時の建物の使われ方については、山本、平山、奥富利幸による研究³⁾が存在する。山本は大隈重信邸、大久保利通邸、山内豊信邸を対象に、行幸時に拝謁、陪食、遊興などの行為が行われたことを報告し、平山は西郷従道邸を対象に、山本同様に行幸時に行われた行為および、天皇の玉座が設けられた室について報告している。また、奥富は前田利為邸を対象に、行幸時に行われた行為、使用された室を整理し、洋館に設けられた玉座では拝謁や献上、和館では能楽などの遊興行為が行われたことを報告している。

山家

行幸というものに対して、何か特別な部屋の
建築的にも影響する様なことが必要だったの
か、それとも設えて対応できるようなもの
だったのでしょうか。

池田

特別な室は無かったものの、和室であっても敷物や椅子を持ち込むことで椅子座敷にするということは、特別な設えとしてあったと考えられます。

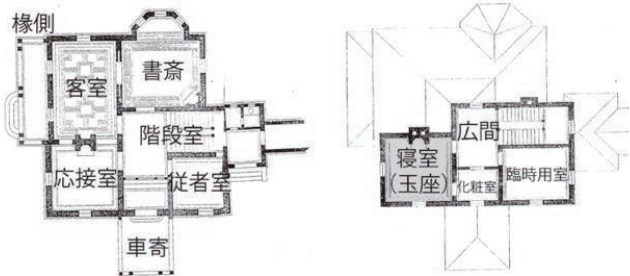


図1 山田顯義邸洋館1・2階平面(室名・色筆者)⁹⁾

玉座は洋館 2 階の「寝室」が使用されたと考えられ、晩餐会場の「日本室広座敷」は『建築雑誌』の「和様の家屋…洋館中会食室の設置なきは該家屋中和洋兼備の同室あるを以ての故」¹⁰⁾との記述から、和館に存在し、「和洋兼備」との表現から、何らかの椅子座式に対応した室であったことが推察される。

・池田章政邸行幸について

『明治天皇紀』¹¹⁾には、玉座は「楼上」とあり、池田家所蔵資料「明治天皇行幸書類」¹²⁾では、玉座は「車寄」を通過して訪れたとあることから、車寄のある洋館の2階のうち、客室である「御客間」が使用されたと考えられる。また、講談は和館の「表座敷」で行われていたと考えられる。

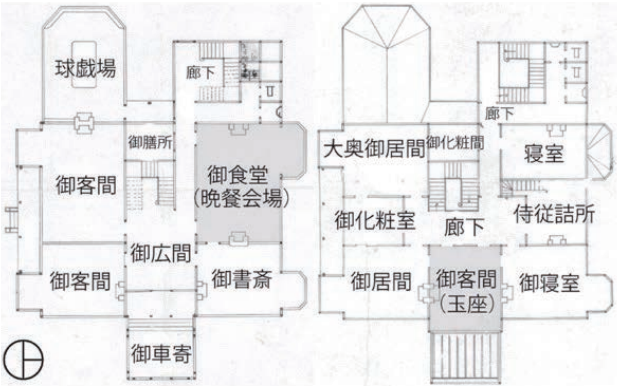


図2 池田章政邸洋館1・2階平面(室名・色筆者)¹³⁾

・鍋島直大邸行幸について

『明治天皇紀』¹⁴⁾、鍋島家資料「御臨幸之記」¹⁵⁾から、玉座は洋館2階「客室」に設けられ、洋館1階「日本風座敷」で撃剣天覧が行われている。「日本風座敷」には座敷飾りがあったことから、和室であった可能性が考えられ、『読売新聞』に「玉座…には…敷物…御椅子」¹⁶⁾とあり、敷物と椅子を使用して椅子座式の玉座が設けられたと考えられる。

その後、晩餐会や手品天覧はそれぞれ洋館 2 階の「会食室」、「踏舞室」が使用されたことから、天皇は洋館のみを使用したことが推察される。

表1 明治天皇の行幸を迎えた事例一覧

[illegible]

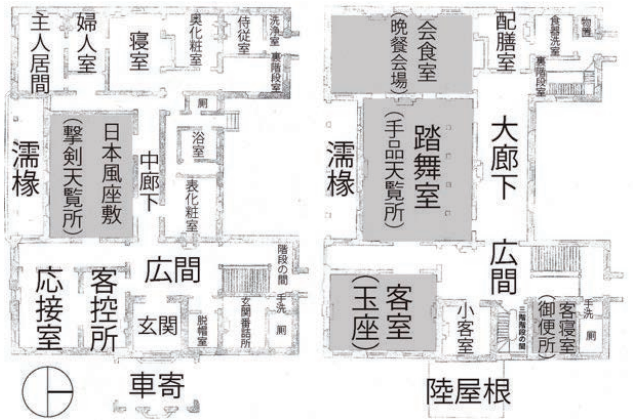


図3 鍋島直太郎洋館平面図(室名・色筆者) 17)

・前田利為邸行幸について

『明治天皇紀』¹⁸⁾の記述には、玉座は「洋館階下客室」および「次室」に設けたとあり、これは洋館1階の「客室」と「小客室」を指すと考えられる。また、「食堂」は「余興室」に充てられており、晩餐会は玉座で行われている。洋館2階の諸室は家什の天覧所として使用され、和館の「奥座敷」も洋館2階同様に家什の天覧所として使用されている。

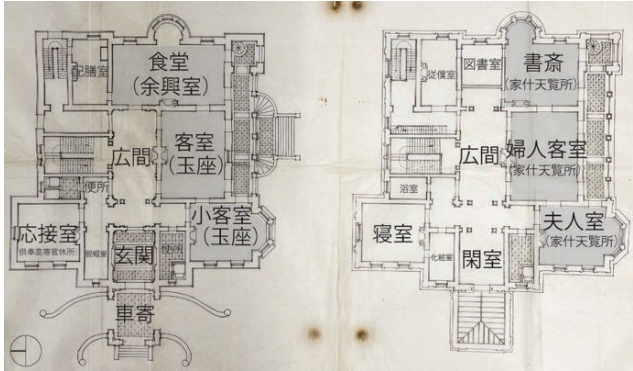


図4 前田利為邸洋館1・2階平面(室名・色筆者) 19)

図面が存在する「和洋館並列型住宅」で迎えた事例の使われ方の分析から、洋館に天皇の玉座と晩餐会場が設けられる傾向があることが考えられる。この傾向に着目し、4例に加え、その他の図面が存在しない事例についても、『明治天皇紀』、伝記、新聞を使用し、玉座の位置についての分析を行った。その結果を以下の表に示す（表2）。

表2より、玉座は13例中10例で洋館2階に設けられていたことがわかる。一方、和館は後藤邸以外では余興会場として使用されている。これらのことから、「和洋館並列型住宅」において、洋館が天皇の使用する建物と認識されていたと推察される。

表2 行幸時に天皇が使用した室と玉座の位置

事例	洋館（行幸時の使われ方）	和館（行幸時の使われ方）
毛利元徳邸（明治6年）		
黒田長博邸（明治8年）	2階（玉座）	
大隈重信邸（明治11年）	2階（玉座）	
三条実美邸（明治12年）	2階（玉座）	
山縣有朋邸（明治18年）	2階（玉座）	
徳川家達邸（明治20年）		
西郷従道邸（明治22年）	2階（玉座）	
山田顕義邸（明治23年）	2階座敷（玉座）	日本室広座敷（晩餐会場）
大山巖邸（明治23年）	2階（玉座）	
池田幸政邸（明治24年）	1階御食堂（晩餐会場） 2階御客間（玉座）	表座敷（講談天覧所）
後藤象二郎邸（明治25年）	仮玉座（奇術天覧所）	玉座 ・二の関（講談天覧所）
鍋島直太郎（明治25年）	1階日本風座敷（撃剣天覧所） 2階御客室（玉座） ・2階踏舞室（手品天覧所）・2階会食室（晩餐会場）	
前田利為邸（明治43年）	1階客室・小客室（玉座） ・1階食堂（余興室） 2階書斎・客室・婦人室（家什天覧所）	奥座敷（家什天覧所）

（網掛は図面が存在する事例、太字は玉座を指す）

6. 「洋館単独型住宅」の使われ方

「洋館単独型住宅」では図面が存在する事例は確認できない。大久保邸については「利通の前導にて玉座に著御」²⁰⁾とあり玉座の位置は明らかではない。川村邸については「樓上便殿に著御」²¹⁾との記述から、玉座は洋館2階に設けられ、土方邸についても「樓上便殿に著御」²²⁾とあり、洋館2階に設けられていたと推察される。以上から、「洋館単独型住宅」も、「和洋館並列型住宅」と同様に洋館2階に玉座が設けられていたと推察される。

7. 「和館単独型住宅」の使われ方

「和館単独型住宅」のうち、図面の存在する池田輝知邸、徳川慶勝邸について分析を行う。

・池田輝知邸行幸について

池田邸は文久2（1862）年に亀井隠岐守青山抱屋敷を譲り受けたもの²³⁾である。「小礼服にて…拝迎…御座所に着御」²⁴⁾との記述から、池田家の人々は洋服で天皇を迎え、御座所へ先導している。

御座所の図面には「トコ」の記載があり床の間のある室と考えられる。玉座は「二畳台」に設けられ、台上には「シェウタン」が敷かれた。また、「御椅子」が宮内省より御持込」との記述から、敷物の上に椅子を置き、椅子座式の玉座を設けたと推察される。

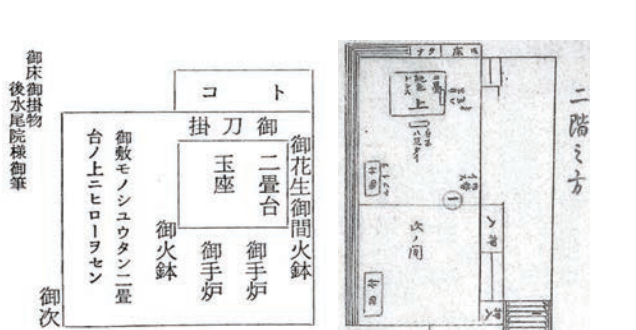


図5 池田輝知邸御座所 25)

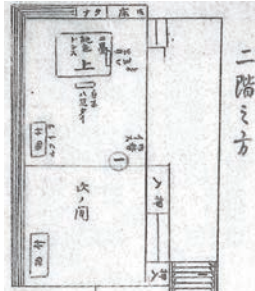


図6 徳川慶勝邸和館 26)

・徳川慶勝邸行幸について

徳川邸は信濃上田城主松平家上屋敷である²⁷⁾。行幸時には「小礼服」²⁸⁾を着用して天皇を迎え、和館2階に玉座が設けられた。図面(図6)には「床」、「タナ」の記載があり、座敷飾りのある室であることがわかる。「上」と記された部分が玉座と考えられ、「二畳」、「桃色ドンス」の記載から、二畳の台の上に敷物を敷き、玉座としたことが推察される。また、室内には「ティフル」、「イス」が配置されており、椅子座式で使用されていたことが考えられる。

以上2例では、和館内部に机、椅子、敷物を持ち込み、椅子座式の玉座が設けられている。

8. 松方正義邸行幸について

「和館単独型住宅」である松方正義邸については、図面は確認できないものの、松方家寄託資料「明治天皇臨幸之記」²⁹⁾に行幸に関する一連の内容が記されており、詳細な行幸の迎え方が把握できる。本章では「明治天皇臨幸之記」を資料として、松方邸行幸時における建物の使われ方の分析を行う。

・松方邸「旧館」・「新館」について

行幸は主に松方邸「旧館」と「新館」を使用して迎えられた。松方邸はもと松平定信の邸地であったが、明治11（1878）年頃に松方の所有となり、新たに建物を建設し本邸とした³⁰⁾。この時に建設されたのが松方邸「旧館」であり、「2階奥座敷」、「書院」との記述から、2階建ての和館であったと考えられる。そして、松方邸への行幸が通知された直後に起工し、行幸直前に竣工した和館が松方邸「新館」である。「旧館」と「新館」は新設された廊下で接続されていた。なお、「新館」建設と同時に「旧館書院」の廊下西側に「御車寄」の増築も行われている。

・松方邸「旧館」・「新館」の使われ方

「旧館」の「奥座敷」、「応接室」は皇族や大臣の控所として、「書院」は晩餐会場として使用された。「新館」には「書院」、「茶室」、「水屋」、「浴室」が存在した。「書院」は「玉座」、「茶室」は「侍従控所」、「水屋」は「供進所」、「浴室」は「御便所」として使用され、「新館」には天皇のための室が用意されており、「行幸御殿」として建設されたことがうかがえる。

・行幸に際して用意された調度と室礼について

行幸の際、宮内省は天皇の調度である「御椅子」などを持ち込み、「新館」に椅子座式の「玉座」を設えた。他の調度は大蔵省などから主に椅子や机が拝借され、これらは「旧館書院」の晩餐会場などに設えられたと考えられる。また、宮内省からの拝借品である「赤毛布」は「旧館」と「新館」の間の廊下および「旧館御車寄」の床面に敷かれている。

・行幸時の起居様式について

行幸当日、天皇は、「旧館」の「御車寄」から松方邸に入り、「旧館」と「新

館」間の廊下を通り、「新館書院」の「玉座」へ移動した。これら天皇が通過した箇所は全て「赤毛布」が敷かれており、「玉座」は椅子座式で設えられている。これらのことから、天皇は椅子座式で松方邸を使用していたと考えられる。

・「行幸御殿」として和館を建設した理由について

松方邸では「行幸御殿」として和館が建設され、宮内省によって椅子や机が持ち込まれ、天皇は椅子座式で建物を使用した。しかし、何故松方が「行幸御殿」として和館を建設したのかは一考を要する。この疑問について、『明治天皇紀』内に関連する記述が確認できた³¹⁾。それは明治11（1878）年5月に発された「聖慮（天皇の考え）」である。内容は皇居竣工まで洋館建設を控えるようにという指示で、皇居は同21（1888）年竣工したことから、「聖慮」期間は同11（1878）年・同21（1888）年の間と仮定した。

・「聖慮」と「行幸御殿」の関係について

表1より、「和洋館並列型住宅」、「洋館単独型住宅」は「聖慮」期間中は9例中3例、期間後は10例中9例で、建築年代に着目すると、期間中は行幸と竣工時期が離れているが、期間後は10例中5例が行幸直前に竣工している。このことから、「聖慮」が「行幸御殿」に影響を与えた可能性が考えられる。

結論

・建築様式が確認できた29例中13例が「和洋館並列型住宅」、3例が「洋館単独型住宅」、13例が「和館単独型住宅」で、明治20（1887）年以降「和洋館並列型住宅」で迎える形式が主流となった。
・「和洋館並列型住宅」で迎えた13例中10例では洋館に玉座が設けられていたと考えられる。
・「和館単独型住宅」で迎えた事例では、椅子等の調度を持ち込み、椅子座式の玉座が設けられた。
・松方邸では「行幸御殿」として和館が建設された。その背景には、天皇の「聖慮」の影響が考えられ、「聖慮」は「行幸御殿」の建築様式・年代に影響を与えていた可能性が考えられる。

以上のことから、「行幸御殿」としては洋館や椅子座の空間が志向されていたことが推察され、このことが行幸を迎える上流層住宅における洋館建設の要因の一つとなったことが考えられる。

【注釈】
1)内田青藏「日本の近代住宅」鹿島出版会、1992年
2)山本昌宏「明治天皇の行幸が行われた住宅における和洋各館の所在と施工年について、『日本建築学会関東支部研究報告書』pp.441-444、2002年、平山育男「旧西郷従道住宅の建築年代と住宅の整備について、『日本建築学会計画系論文集』第81巻第728号」,pp.2289-2296、2016年
3)山本昌宏「大隈重信邸、大久保利通邸、山内豊信邸について
和館・洋館・庭の来歴とそれらの明治天皇行幸時の使われ方」『日本建築学会東海支部研究報告集
第41号』,pp.853-856、2003年、奥島利幸「明治天皇行幸における華族邸宅の建築家・匠所について、『日本建築学会計画系論文集
第620号』,pp.193-197、2007年
4)小沢朝江、水沼淑子「明治天皇巡幸施設の建築様式と内部空間-明治期における巡幸施設の建築史的研究(1)-」『日本建築学会大会学術講演梗概集(北陸)』,pp.331-332、2002年
水沼淑子、小沢朝江「明治天皇巡幸施設の調度と室礼-明治期における巡幸施設の建築史的研究(2)-」『日本建築学会大会学術講演梗概集(北陸)』,pp.333-334、2002年
5)明治天皇聖蹟保存会編「明治天皇行幸年表」、1933年
6)「明治天皇行幸年表」にて氏名が明記されている事例。
7)「和洋館並列型住宅」、「洋館単独型住宅」、「和館単独型住宅」と定義した。
8)宮内庁編「明治天皇紀
第七吉川弘文館、pp.579-580、1972年
9)造家学会「建築雑誌
第30号」、pp.106-107、1889年
10)同上
11)宮内庁編「明治天皇紀
第六吉川弘文館、pp.927-928、1971年12)岡山大学付属図書館「池田家文庫」『C6-433』(13)
12)「T5-156-28-3」、「T5-156-28-2
14)宮内庁編「明治天皇紀
第八吉川弘文館、pp.103-104、1973年
15)佐賀県立図書館「鍋島家文庫」『御臨幸之記』
16)「読花新聞」朝刊、1892年7月10日
17)造家学会「建築雑誌
第59号」、1891年
18)宮内庁編「明治天皇紀
第十二吉川弘文館、pp.432-435、1975年
19)「侯爵前田邸洋館新築平面図、内田洋三関係資料」、1925年
20)宮内庁編「明治天皇紀
第十四吉川弘文館、pp.590-591、1970年
21)宮内庁編「明治天皇紀
第七吉川弘文館、pp.788-789、1972年
22)宮内庁編「明治天皇紀
第八吉川弘文館、pp.257-258、1973年
23)鳥取県立博物館「贈従一位池田巖徳公御傳記
第五巻」、1990年
24)「25」同上
26)公益財団法人徳川史料研究会徳川林政史研究所「明治八年四月聖上凡町御臨邸へ臨幸之記」、『御臨幸記事』、1875年
27)岩下哲典「尾張徳川家の江戸屋敷から東京邸への変遷について」、『徳川林政史研究所研究紀要
27巻』,pp.295-334、1993年
28)注26)に同じ
29)国立国会図書館「明治天皇臨幸之記」
30)徳富新二郎「公爵松方正義伝
中巻」,公爵松方正義伝記発行所、pp.1154、1935年
31)宮内庁編「明治天皇紀第四吉川弘文館、pp.413-414、1970年

● 優秀賞



兼田 聖人

Masato KANEDA

山家研究室
YAMAGA lab.

松隈 木密地域の改善のためにいろんなものが要求されるし、建て替えるためにはモチベーションが必要ですね。建て替えることのメリットなど、何か根拠となるものはある程度確認できるのか。

兼田 建て替えの際はその周辺の境界地区を取り込んで設計をすることで行政からのバックアップがあったり、補助があったりすることで建て替えも促進させられます。

松隈 今木密地域は、防災関係で危なくなっていると思いますよね。それに対してこの計画をやることはいいと思うけど、消防士が中には入れるのかなど、きちんと議論された中での計画ですか。

兼田 どの敷地も拡張予定道路に面する敷地になっているんですけど、拡張予定道路の 4,000mm 以上を守りつつ共同建て替えをする計画になっています。

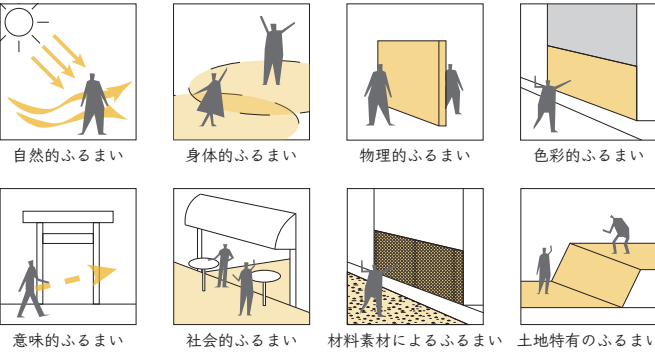
東京を歩いていると、しばしば昔ながらのまち並みが残る**木造住宅密集地域**（以降、「木密地域」とする）に遭遇する。木密地域では、狭い路地や高密度な建物の隙間、壁や塀、たくさんの植木鉢や植栽など**多様で多重な「境界」**が存在し、それらを取り巻くように人々の活動や交流が見られることに気づく。

そのような境界はただ隔たりを生むだけでなく、そのあり様によって周囲にさまざまな影響を及ぼしている。本研究では、**周囲の人や自然などに何かしらの効果や影響を与える境界のあり様**のことを「**境界のふるまい**」とし、**境界のふるまいを軸とした木密地域の更新法**を提案する。



ポートフォリオWEBサイトにて公開中 ▶▶▶

＜境界のふるまいの効果や影響、現れ方＞
事例調査から、その特性について整理を行った。
境界のふるまいにより生まれる効果や影響と境界のふるまいの現れ方の特性がみられた。

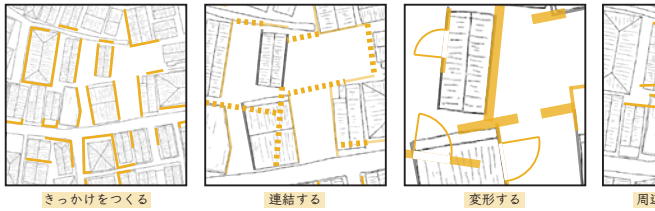


＜境界のふるまいの効果や影響、現れ方＞
以下の5つの特徴により、境界のふるまいが生まれる。

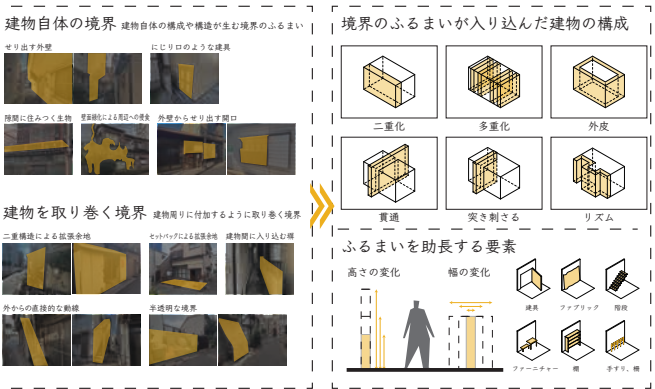
＜計画エリアと更新手法＞



【共通する3つの設計ルール】
調査で得られた内容をもとに、①きっかけをつくる②連結する③変形する、という3つのルールのもと設計を行う。
この3つのルールをもととすることで、京島らしさを継承しつつ新たな境界のふるまいが繋がっていく。



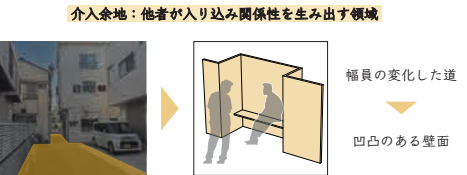
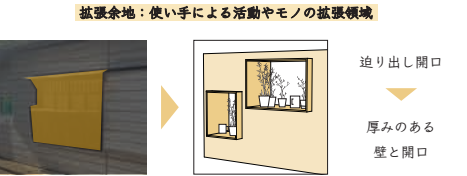
＜東京都墨田区京島地域のふるまい＞
境界のふるまいの空間構成要素として抽出し、まちの更新手法として組み込む。



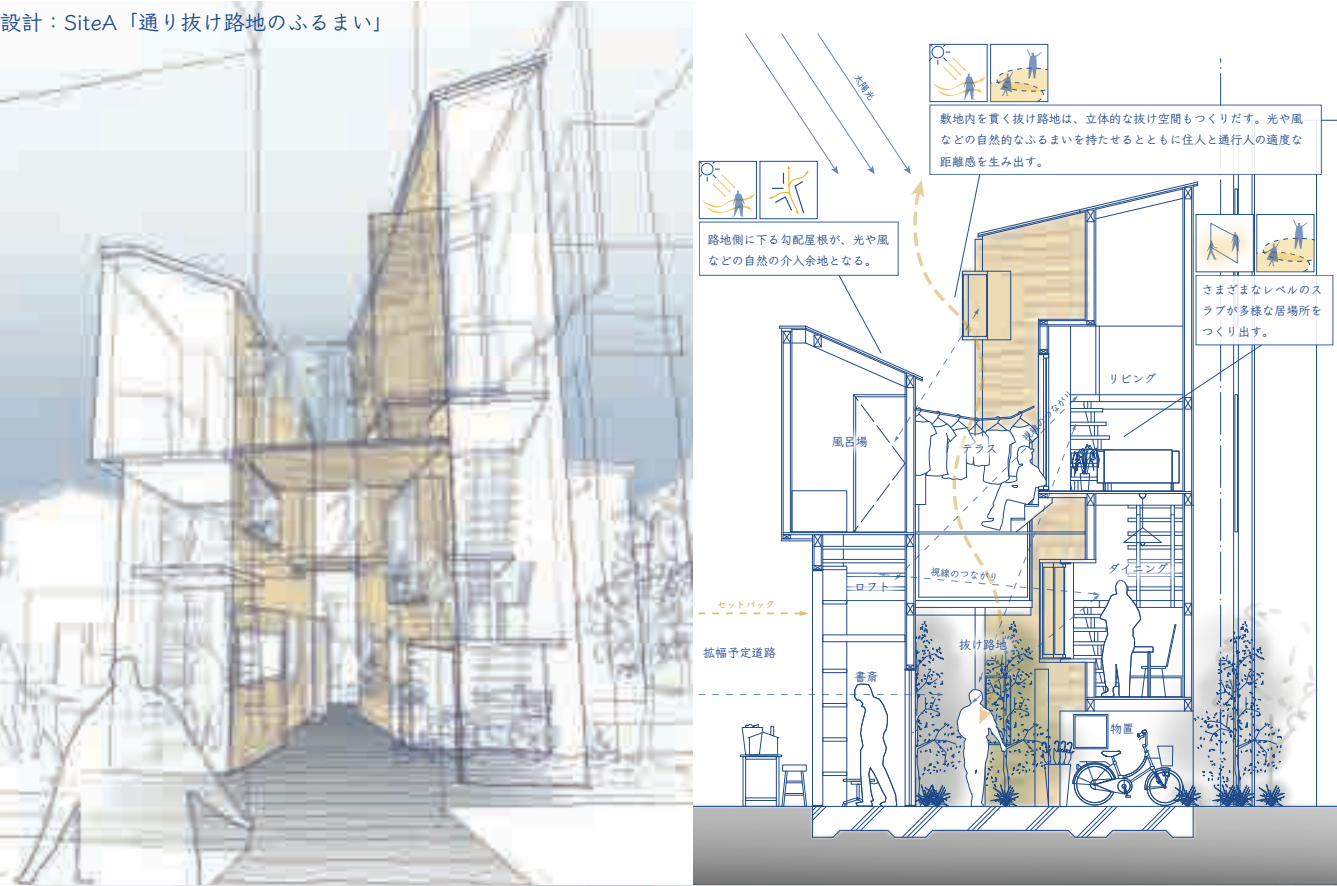
【拡張余地と介入余地】

あらゆる環境の間に存在する境界に**拡張余地**と**介入余地**になるふるまいを組み込んでいく。そうすることで、建物（住戸や商店、工場など）、路地、拡張道路、空地や広場などあらゆる環境に対して、形状の違うふるまいが現れる。

調査で収集した京島の境界のふるまいを
新たなふるまいとして再解釈し、拡張と介入の余地として組み込む。



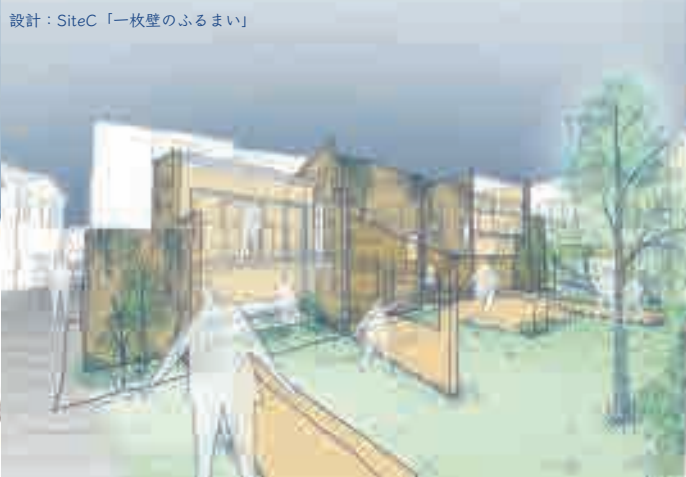
設計：SiteA「通り抜け路地のふるまい」



設計：SiteB「曲面屋根のふるまい」



設計：SiteC「一枚壁のふるまい」



●優秀賞



池原 なつ子
Natsuko IKEHARA

中井研究室
NAKAI lab.

戦後沖縄におけるコンクリートラーメン構造の住宅の外形構成
External composition in reinforced concrete frame structure houses
in post-war Okinawa.

1. 研究背景・目的

全住宅戸数の90%が戦火により焼失した那覇市域では、戦後新たにコンクリート住宅が建ち並び街並みが形成された(写真1)。特に1970年代前半以降からはRCラーメン構造が主流となった結果注1)、現在ではそれらの住宅群が沖縄のありふれた街並みを形成している。沖縄の住宅建築については、伝統的な赤瓦の木造住宅への関心が高い一方、こうした戦後のRC住宅の意匠についての研究はほとんど見られないが、そこにはラーメン構造フレームの内外に様々な半外部空間や要素が設けられることによる、多様なデザインがみられる。そこで本研究では、現在的那覇市内でも戦後いち早く米軍からの解放と市街地化が進んだ地域に現存し、建物に付随する外部空間や要素を有するRCラーメン構造の住宅を対象とし注2)、外部空間の種類やその位置、および付加的な要素などに基づくタイプを見出し、それらの特徴を比較することを通して、戦後沖縄で主流となったRCラーメン構造の住宅における、外形構成の多様性とその変遷を捉えることを目的とする。



写真1 コンクリート住宅が連なる街並み

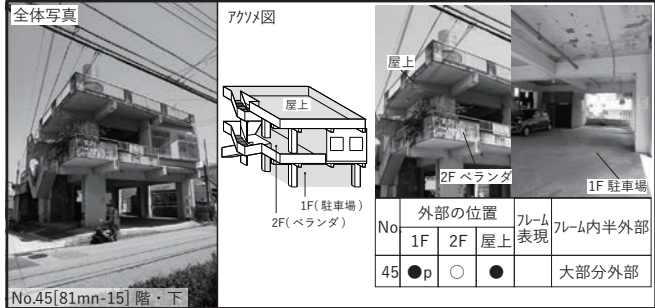


図1 フレーム内外部の分析例

表1 フレーム内外部の位置

		過半		一部分	
		1F	2F以上	1F	2F以上
階	1F				
	2F以上				
	屋上				
	その他				

表3 フレーム表現の有無

		あり(○)		なし(壁表現(k))	
		1F	2F以上	1F	2F以上
階	1F				
	2F以上				
	屋上				
	その他				

表2 フレーム内外部の組合せパターン

No.	外部の位置			フレーム表現	※外部の割合 ●: 過半 ○: 一部分
	1F	2F以上	屋上		
45	●p	○v	●	1F, 2F以上とも	41
6	●p	○v			
12	●p	○v			
65	●p	○v			
33	●p	○v			
50	●p	○v			
79	●p	○v			
39	●p		●	1Fのみ	12
54	●p		●		
73	●p		●		
63	○p	○v			
28	○p	○v	●		
25	○p	○v			
3	○	○v			
42	○p	○v		1F, 2F以上とも	11
35	○p		●		
44	○p		●		
27	○p		●		
52	○p		●		
46	○p		●		
8	○				
23	○				
9		○v	●		
14		○	●		
21		○v	●		
26		○v	●		
84		○v	●		
66		○v	●		
71		○v	●		
10		○v			
13		○v			
18		○v			
67		○v			
74		○			
31		○v			
62		○v			
70		○v			
15			●	屋上のみ	ハ
17			●		
20			●		
24			●		
29			●		
32			●		
34			●		
47			●		
51			●		
53			●		
55			●		
72			●		
他13戸					
1					
2					
4					
7					
11					
37					
41					
他18戸					

2. フレーム内の外部

沖縄におけるRCラーメン構造の住宅(以下、RC住宅)には、柱梁によるフレーム注3)の内側に、地上の駐車スペースや2階のベランダなどといった外部空間をもつものが多くみられる。例えば分析例(図1)では、1階の駐車場、2階のベランダ、屋上といった外部空間をもつ。そこでまず本章では、フレームの内側に設けられた外部空間(以下、フレーム内外部)について、その位置(表1)と各階における外部の割合(過半か一部分か)について検討し、それらの組合せが近いものをパターンとした(表2)。また併せて、フレーム表現の有無(表3)の傾向についても調べた。その結果、全事例のうち約7割(62/87)がフレーム内外部を持つ住宅であり、そのうちの約6割(イ、ロ、37/62)は、屋上以外の階に外部を含むものであった。その中で約7割(27/37)を占めた、一部分が外部の階のみをもつもの(ロ)では、2階以上の階にベランダなどの屋根付きの外部をもつものが最も多くみられた(ロ3、15/27)。また、過半が外部の階をもつもの(イ、10/87)はすべて1階がピロティの駐車場であり、これらのうち2階にも外部をもつものが多くみられた(イ1)。またフレーム表現については、柱や梁を外形に表現しないものが約2割(17/87)みられた。

3. フレーム外要素

分析例(図2)では、RCのフレームの外側に、手すり付のスラブのはね出し(以下はね出し)に加え、外階段と内部空間が張り出した下屋が取り付けられている。このように資料としたRC住宅には、どの事例にもほぼ共通してみられるはね出しのほかに、フレームの外に様々な要素が取りつく事例が多くみられる。そこで各事例について、外階段やバルコニー等(外部要素)、スクリーン(半外部要素)、下屋(内部要素)といったフレーム外要素(表4)の組合せを調べ、同様の傾向をもつグループに整理した(表5)。その結果、全事例のうち約7割(A~D、62/87)に、はね出し以外の要素が見られた。そのうち、外階段に加えてバルコニーや下屋等の複数の要素が組合わされたもの(A、17/87)、および外階段のみをもつもの(B1、15/87)が、いずれも全体の約2割と比較的多くみられた。その他バルコニー(B2、9/87)、スクリーン・独立庇(C、11/87)、下屋(D、10/87)をもつものがそれぞれ約1割程度みられた。以上、フレームの外側に様々な要素が取りつく事例が多数を占めることがわかった。

4. 外形構成タイプおよびその変遷

4-1. 外形構成タイプ RC住宅の外形構成の特徴を明らかにするために、2章で得たフレーム内外部の組合せパターンを横軸、3章で得たフレーム外要素の組合せパターンを縦軸とした表6に事例をプロットし、該当数が比較的多いマス目を外形構成タイプ(I~IX)とした。まずIは、過半が外部の階をもち、かつ複数のフレーム外要素をもつタイプである。主に駐車場として使われる1階のピロティに加えて、2階にもフレーム内外部をもつものが多い。そこに外階段や下屋などの複数の要素が取りつくことで、多様な外部空間を含む複雑な外形構成となっている(ピロティ・複数要素型)。次に、フレーム内外部が階の一部のみにみられるタイプ(II~IV)のうち、Iと同様に複数のフレーム外要素をもつIIは、2階にベランダをもつもの

表5 フレーム外要素の組合せパターン

No.	要素 (はね出し以外)				※●: 主要要素 ○: 副要素		
	階	下	ハ	ス			
50	●	●		○		外階段	A1
39	●	●		○		下屋	A
45	●	●					
6	●	●					
21	●	●					
14	●	●					
52	●	●					
17	●	●					
72	●	●					
86	●	●					
41	○	○				外階段	A2
31	●	●				ナバルコニー	9
54	●	●					複数
13	●	●					
32	●	●					
1	●	●					
68	●	●					
51	●	○				外階段	B1
81	●	○					B
12	●						
73	●						
27	●						
84	●						
26	●						
59	●						
20	●						
47	●						
55	●						
75	●						
83	●						
85	●						
76	●						
3	○					バルコニー	B2
45	●	●					
65	●	●					
2	●	●					
74	●	●					
11	●	●					
60	●	●					
49	●	●					
36	○	○			●※	スクリーン	C
19	○				●※	(※独立庇)	
62					○		
5					○		
37					○		
79					○		
35					○		
8					○		
58					○		
38					○		
40					○		
16	○	●			●		
56	○	●			●		
18		●			●		
9		●			●		
67		●			●		
71		●			●		
66		●			●		
10		●			●		
57		●			●		
61		●			●		
33							
28							
25							
46							
42							
63							
44							
70							
23							
24							
29							
34							
82							
53							
43							
22							
他8戸 (No. 4, 7, 15, 30, 48, 64, 69, 78, 87)							

がほとんどであった（一部外部・複数要素型）。一方Ⅲは、洗濯物干し場等として利用される2階のベランダと、玄関や倉庫として利用されている1階の下屋をもつタイプである（一部外部・下屋型）。またフレーム外の要素をもたないⅣは、複数のフレーム内外部をもつものが多いタイプである（フレーム内一部外部のみ型）。

屋上のみ外部空間をもつタイプ（Ⅴ、Ⅵ）のうち、Ⅴは屋上へと続く外階段を併せもつタイプである（屋上のみ・外階段型）。またⅥは、フレーム外の要素がなく、屋上へは塔屋からアクセスするものである（屋上のみ型）。また、フレーム内外部をもたないタイプ（Ⅶ～Ⅸ）のうち、Ⅶは屋根のないバルコニーが2階に取りつくタイプであり（バルコニー型）、Ⅷは、看板や花ブロックによるスクリーンや庇をもつもので、はね出しスラブ部分や窓の目隠しとなると同時に特徴的な立面をつくるタイプである（スクリーン型）。最後にⅨは、スラブのはね出し以外にはフレーム内外部もフレーム外要素もたず、フレームがそのまま箱状の外形となる単純な構成のタ

イプであり（フレーム・ボックス型）、上述のⅧとともに、外形に柱や梁を表現しない事例が比較的多くみられた。

4-2. 各タイプの建設年代と変遷 市役所に残る資料注4) 等から対象事例の建設年代を推定し（表6中に表記）、各タイプごとの年代分布（図3）を調べ、それに基づいてタイプの年代的な変遷を整理した（図4）。まず各年代の建設数をみると、1970年代に建設されたものが全体の3割弱を占めていた（25/87）。タイプごとの傾向をみると、表6右下に位置する比較的単純な外形構成のⅥ及びⅨは、1950年代の建設と推定されるものが多いことから、初期からのタイプといえる。その後1970年代に入ると、ベランダやピロティなどのフレーム内外部や外階段などの要素をもつタイプ（Ⅲ、Ⅴ、Ⅶ、Ⅷ）が増え、RC住宅の多様なデザインが広がったことが分かる。さらに1970年後半以降、フレーム内外部の面積や数が増えたり、フレーム外要素の数が多くなったⅠ、Ⅱや、フレーム外要素はないものの、フレーム

表 コンクリートラーメン構造の住宅の外形構成タイプ（表中の記号は他の図表に準じる。）

		Ⅰ 過半が外部の階をもつ			10	Ⅱ 一部分が外部の階をもつ			28	Ⅲ 屋上のみ		25	Ⅳ フレーム内外部なし		24	
		Ⅰ1 1F,2F以上とも	Ⅰ2 1Fのみ	Ⅰ3 2F以上のみ		Ⅱ1 1F,2F以上とも	Ⅱ2 1Fのみ	Ⅱ3 2F以上のみ								
A		複数														
		6[77s-5] 階下p 45[81mn-15] 階下p 50[84mn-20] 階下p				52[00mn-22] 階下 14[5xa-8] 階下 21[76mn-5] 階下 31[77a-15] 階下				17[76mn-2] 階下 32[5xm-1] 階下 72[75ms-9] 階下 86[77mn-30] 階下			V. 屋上のみ・外階段型 No.47[80mn-6]			1[68s-1] 階下 41[67mn-11] 階下 68[76ms-5] 階下
17		I. ピロティ・複数要素型				II. 一部外部・複数要素型				V						
B		B1 外階段 外階段 駐車場 No.45[81mn-10] 階下p				27[71a-11] 84[63mn-28]				20[81mn-4] 47[80mn-17] 51[80mn-21] 55[58t-5] 59[5xm-8]k 75[5xt-12] 83[75mn-27] 85[71mn-29]			VII. バルコニー型 No.2[76s-2]k			76[73ms-11] 81[5xt-15]
15		B2 バルコニー 65[81ms-3]p				3[70s-3]				58[5xt-8]k 80[5xmn-25]						
24		C スクリーン 79[94t-14]p				8[79a-2] 35[77m-3]				16[71t-2]k 56[70t-6]k 57[71t-7]k			VIII. スクリーン型 No.38[73m-5]k			5[70a-1]k 19[79a-9]k 37[5xmn-10] 38[73m-5]k 40[80m-7]k
11		D 下屋 No.18[5xmn-2]				9[76a-3] 10[74a-4] 18[5xmn-3] 66[77mn-24] 67[70ms-4] 71[75ms-8]				IX. フレーム・ボックス型 No.64[5xmn-9]			IX			4[5xs-4] 7[65mn-1] 22[77mn-6]k 30[72a-14]k 43[5xmn-13]k 48[70mn-18]k 64[5xmn-23]k 69[73ms-6]
45		E 要素なし (はね出しのみ)				33[5xs-6]p				15[5xt-1] 24[5xmn-8] 29[5xa-13] 34[5xm-2] 53[77t-3] 78[5xt-13] 82[83mn-26] 87[67mn-31]			VI			
		IV. フレーム内 一部外部のみ型 No.25[91mn-8]				63[85ms-2] 25[91mn-9] 42[90mn-12] 28[77a-12]				23[82mn-7] 44[82mn-14] 46[75mn-16]			VII			
		VI. 屋上のみ型 No.82[83mn-4]				70[85ms-7]				17[76mn-2] 階下 32[5xm-1] 階下 72[75ms-9] 階下 86[77mn-30] 階下			VIII			
		IX. フレーム・ボックス型 No.64[5xmn-9]											IX			

表 注)・表記例 [45[81mn-10] 階下p]…45:通し番号 [81:建設年1981年/mn-15:真和志北地域・地域内通し番号] 階下:フレーム外要素(外階段・下屋)/p:駐車場・[5x]は、50年代の建設と推定されるものの、年が確定できないものを示す。

内外部を複数もつ傾向がみられたⅣといった、より複雑な構成のタイプへと展開していったことが分かった。

5. おわりに

本研究では、戦後沖縄で主流となったRCラーメン構造の住宅事例を対象に、まずフレーム内の外部、次にフレーム外の要素の組合せそれぞれについて検討した。さらにそれらの重ね合わせによるいくつかの外形構成タイプを導き、それらの特徴や相違点を明らかにした。また資料に基づいて各事例の建設年代を推定し、各タイプの年代的な傾向を調べた。その結果として、当初単純な箱状のものが多かったRC住宅が1970年代にフレーム内の外部空間や様々な要素が付加されたデザインの展開がみられ始めた後、1970年後半以降、それらが重ね合わされた複雑な構成へと移り変わっていったことを明らかにした。本研究の成果は、年代、地域共に限定的なものではあるが、戦後以降沖縄の市街地の街並みを形成してきたRC住宅の多様性を捉え、そのデザイン的な価値を評価する上で有効な知見のひとつになると考える。

6. 謝辞

本論文を執筆するにあたり、ご指導いただいた中井邦夫先生並びにご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

※注1) 2000年頃にRC壁式構造へ変化するまでの約30年間、RCラーメン構造が住宅の主流であったと考えられる（文献1）参照。

注2) 早期に米軍から解放された旧真和志村地域および1974年時点で市街地化されている地域において、筆者による現地調査（2020年5月～7月に実施）によって確認された住宅87事例を対象とした（注2図）。

注3) RC住宅のフレームは1列2スパン型が多く、これらは文献3）によると、4.1m×6.5m程度を平均とするグリッドに基づくとされる。

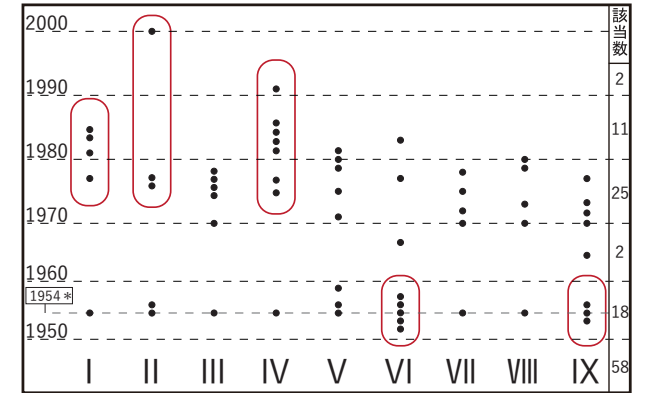


図1 外形構成タイプ別年代分布（タイプに該当しない29事例は除く）

注4) 主に確認申請関係書類。なお確認申請資料がない住宅は、那覇市の建築確認申請制度が施行された1954年以前のもので取り扱っている。

【参考文献】

- 1) 呉屋さゆり、小倉暢之「沖縄県におけるコンクリート住宅の展開に関する研究」日本建築学会九州支部研究報告、2005
- 2) 金城春野、小倉暢之「沖縄のコンクリート住宅普及黎明期における仲座久雄の建築活動」日本建築学会計画系論文集、2018
- 3) 小倉暢之「戦後沖縄のコンクリート建築普及における設計技術の特質：その2設計の背景と平面計画」日本建築学会九州支部研究報告、2003
- 4) 加島鈴乃、小野尋子「戦後に形成された沖縄の密集市街地の課題と特徴に関する研究 - 沖縄県那覇市真和志地域を対象にして -」日本建築学会計画系論文集、2003
- 5) 池島敬子、小松幸夫、堤洋樹「沖縄の戦後における住宅の変遷について - 伝統的木造住宅からRC造住宅へ -」日本建築学会九州支部研究報告、2000
- 6) 那覇市役所確認申請データ

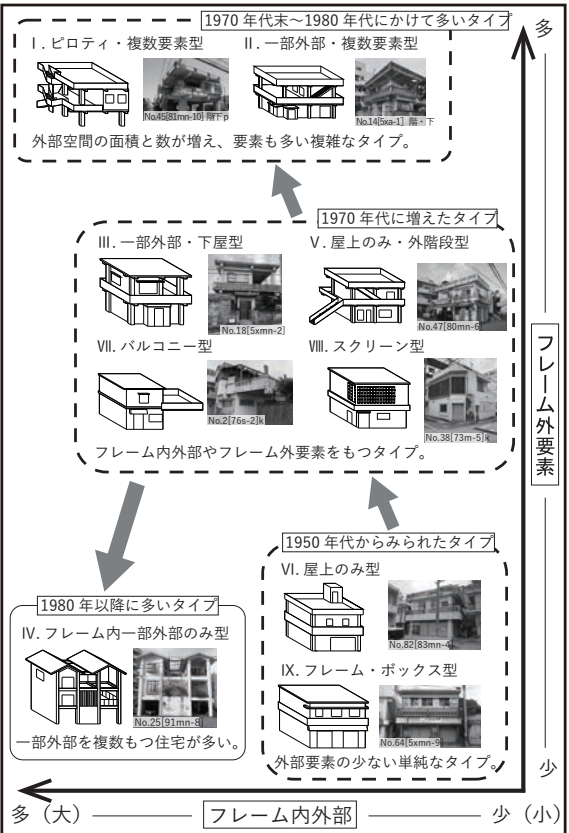


図2 外形構成タイプの変遷

修士論文

繋がりを生み出す街 ーBus-HUBから生まれる街のコミュニティ形成の提案ー	安達 萌子
漁村を支える見えない壁 日和佐漁港周辺における防潮堤を利用した新たな親水空間の提案	猪狩 勇人
◎ 明治天皇の行幸が行われた住宅とその行幸時の使われ方に関する研究 近代日本の上流層の住宅における洋館の導入過程について	池田 直也
島を憶える 沖縄県与那国島の風土に呼応する建築の提案	稲川 大吾
マレーシア・ペナマ島ジョージタウンにおけるショップハウス街区の 外部空間を生かした観光交流施設の提案 ショップハウス以外の建物の滞在と外部空間からみた街区構成を踏まえて	オイン シャン ゲン
◎ 境界のふるまいによる木造密集地域の更新法 東京都墨田区京島地域を対象して	兼田 聖人
個から集へ 新宿若葉地区における住宅密集地の更新法の提案	上條響
中国成都市都心の大規模街区における住棟が形成する外部空間の構成 太昇地区を対象として	黄 冀
高度経済成長期の再開発を手がかりとした都市の更新手法 鶴見駅東口地区を対象として	篠原 光汰
スポーツチームちまちを共鳴させる井戸端的建築 川崎市等々力陸上競技場周辺を対象として	関川 吹雪
精神を癒せる環境がある道路空間プロジェクト 徳島県美波町を題材として	孫 銘遠

少子高齢化中の子どもたちを学校から解放 「旧」ヒラヤマセンターの「新」利用	鄭 偉
城中村における公共空間のあり方についての研究 深圳市鶴洲旧村を対象として	トウ ハ
◎ 蘇る故郷の風景 富山県山王地区矢部を対象としたヴァナキュラー・オブジェクトの提案	西村 和将
土を建材として用いた建築 中国における土を用いた循環型建築設計	范 楨
◎ 近代土木遺産としての新たな保存活用手法の提案 旧住吉浄水場施設群(1931年竣功)の地域産業博物館としての活用計画	穂屋下 直輝
★ [スキマ]から考える居場所あるまち 閉じながらも開く住まい方の提案	宮島 里帆
水辺街並み地域の魅力の復活について 観光と住民の暮らしが共生する環境の研究	劉 芳彤
◎ 戦後沖縄におけるコンクリートラーメン構造の住宅の外形構成	池原 なつ子

★ディプロマ賞 ◎優秀賞

2023年度学生優秀作品紹介

卒業研究

仁昌寺 天心

棚橋 美槻

石井 心

西岡 理子

中里 美海



卒業設計 ゲスト審査員



山本 基揮
Motoki YAMAMOTO

山本基揮建築設計



アリソン 理恵
Rie Allison

一級建築士事務所ara

●ディプロマ賞



仁昌寺 天心
Tenshin NISHOUJI
六角研究室
ROKKAKU lab.

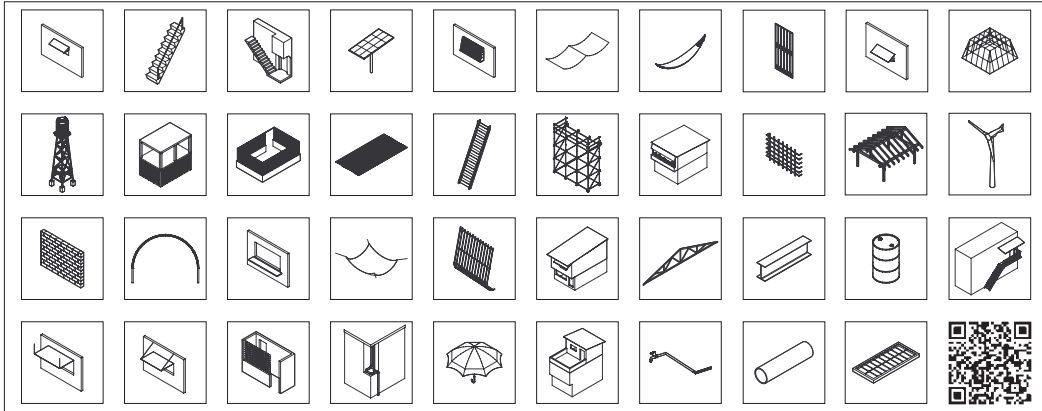
CAVE STREET 線上の余白
Cave Street Margins on the line

スラム街の日常に根付く避難タワー及び避難経路の提案
Proposal for evacuation towers and evacuation routes that take root in the take root in the daily life of slums

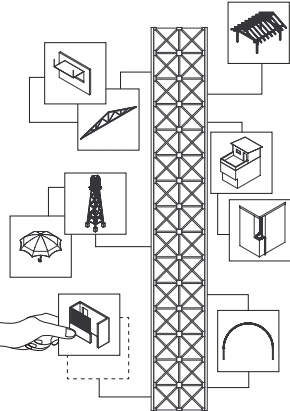


設計手法：避難タワー

要素をモデルに変換：モデルへの変換により、本来ある目的から逸脱し、これまでとは別の目的や意味を連想させる。



ストラクチャへ付随。



アリソン なぜ新たにつくるものに”スラムらしさ”を演出する必要があるのでしょうか。

仁昌寺 もし実際に災害が起きた場合、街の記憶を残したタワーを手がかりに、復興を進められるようになったら良いと考えました。

山本 シンボルとしてタワーをもっと高くしても良かったのではないのでしょうか。

仁昌寺 街に溶け込むことを意識して作っていて、これも高すぎるのではないかと考えています。

フィリピンにおけるスラム街の課題

■過密空間



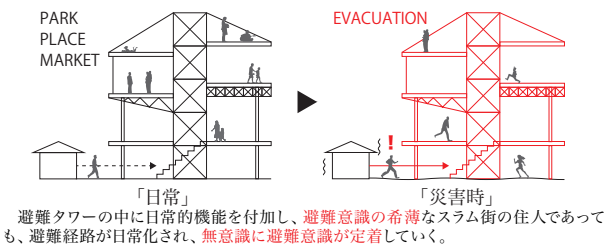
スラム街は物や生活の溢れ出しが
集積され過密化したことにより、住民
らの**余白**の場が失われつつある。

■自然災害とスラム



災害時、主に甚大な被害を受けるの
は、貧弱な構造で構成された**貧困地
域の住宅群**である。

定着される避難意識



TOWER DESIGN METHODOLOGY

避難タワー×日常

site1：避難タワー × 子供の溜まり場



機能



子供達は遊び場を求めている。スラム
街の要素が新たな**遊具的機能**へと変
換され、日常的に居場所を見つけられ
る場となる。

site2：避難タワー × 集会所



機能



スラム街の人々は仕方なく道端でたむ
ろう。スラム街に必要な**教会や集会で
きる場**の提供は、日常の格好の溜まり
場となる。

site3：避難タワー × マーケット

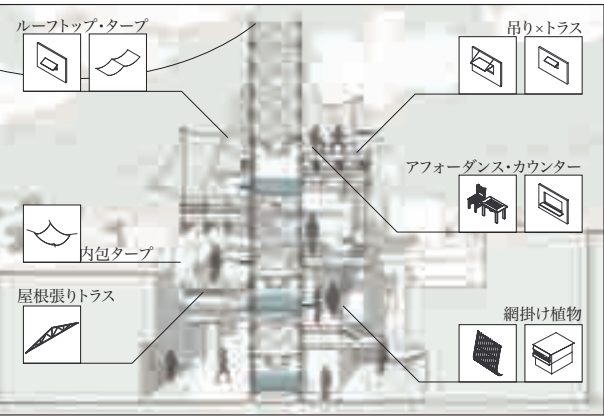
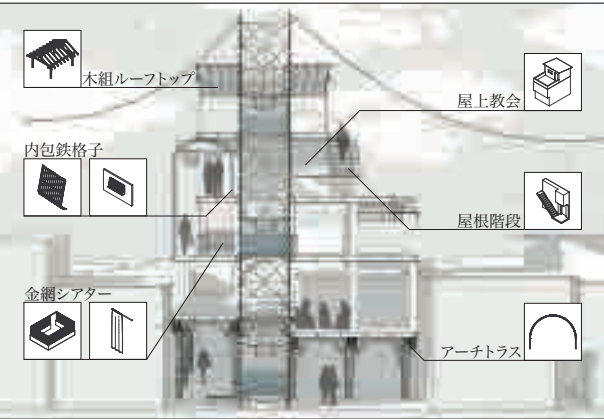
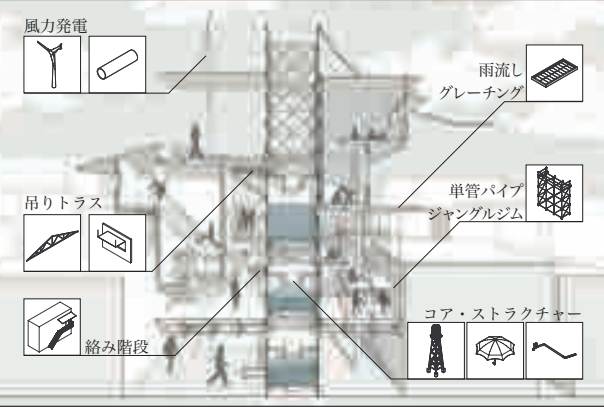


機能



道には小店舗が連続するが、購入品を
楽しむ場が無い。連続に沿うように**食を
生業**とする新たな日常の賑わいの場を創
出する。

EVACUATION TOWER × EVERYDAY

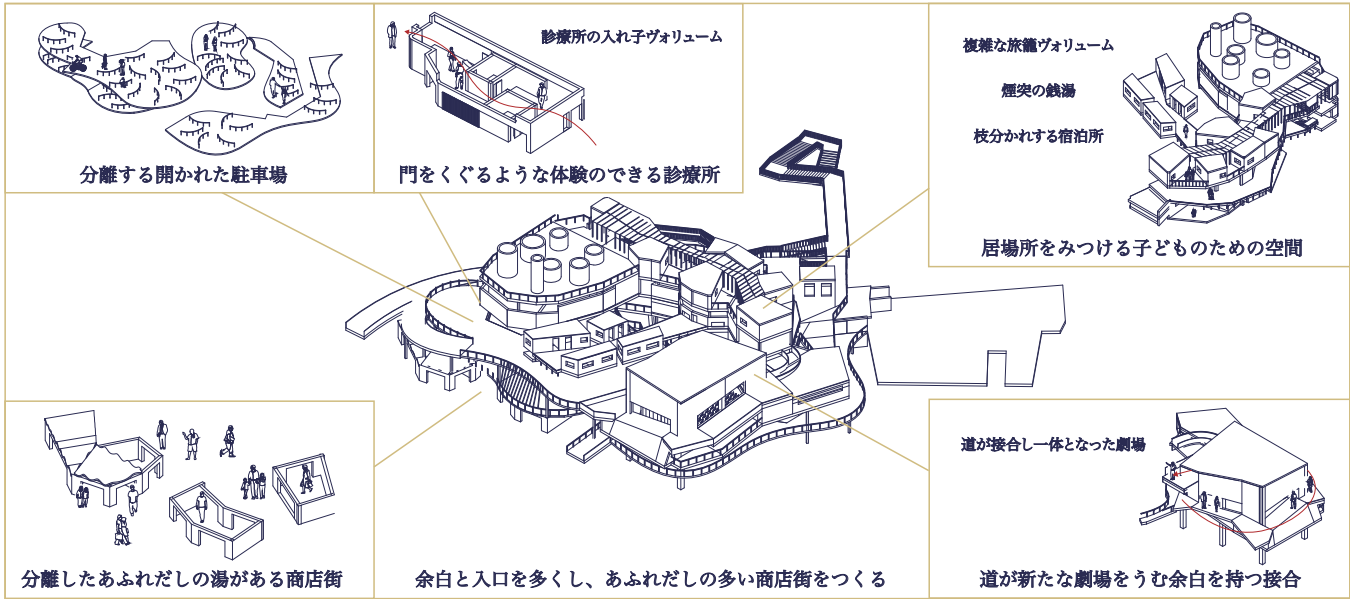
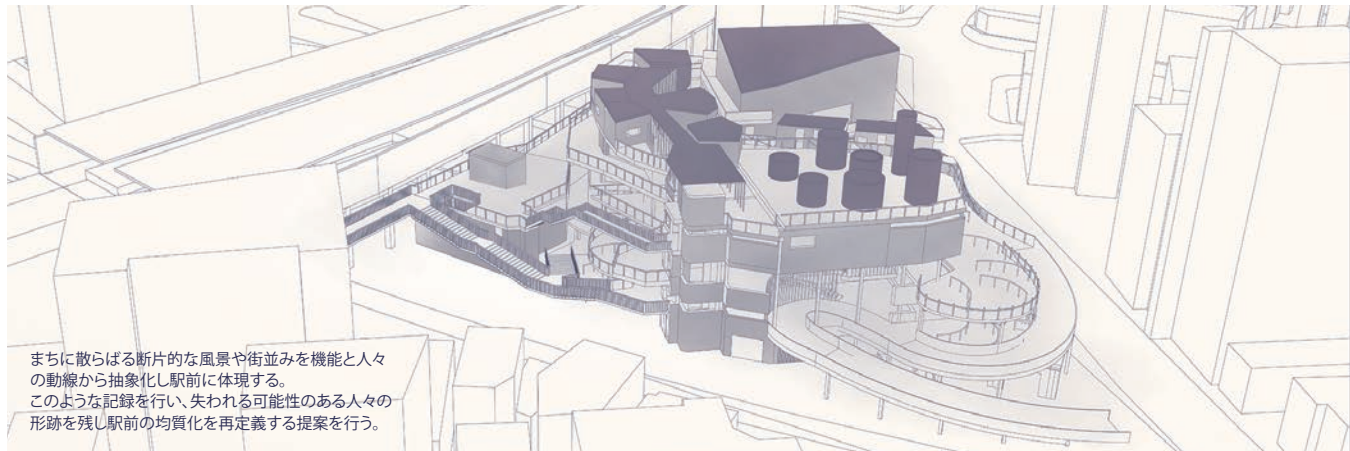


● 優秀賞



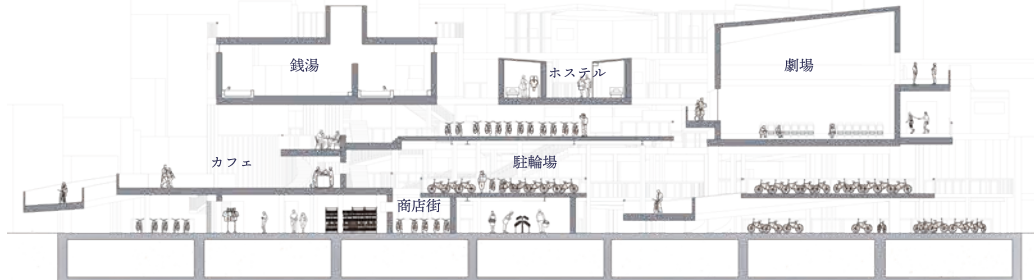
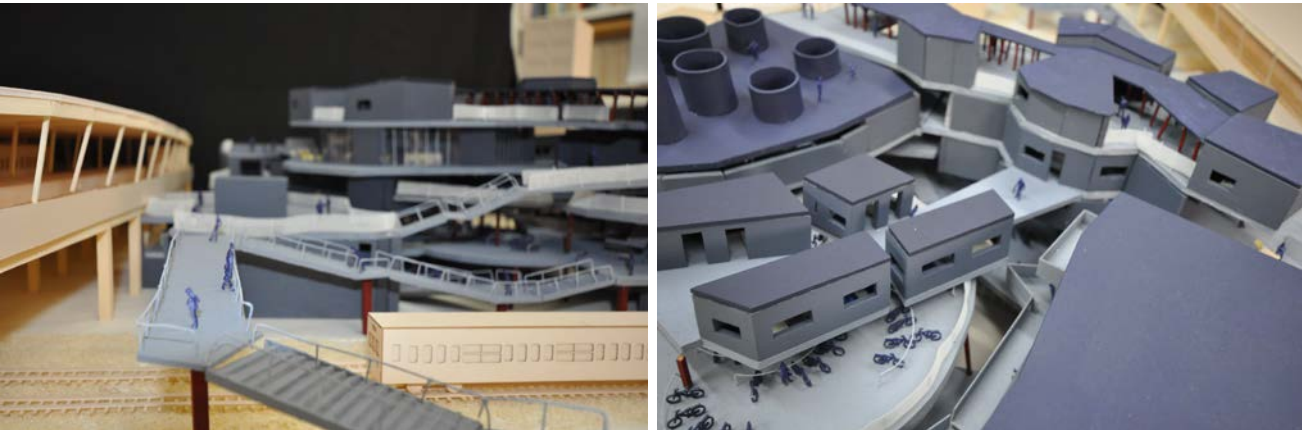
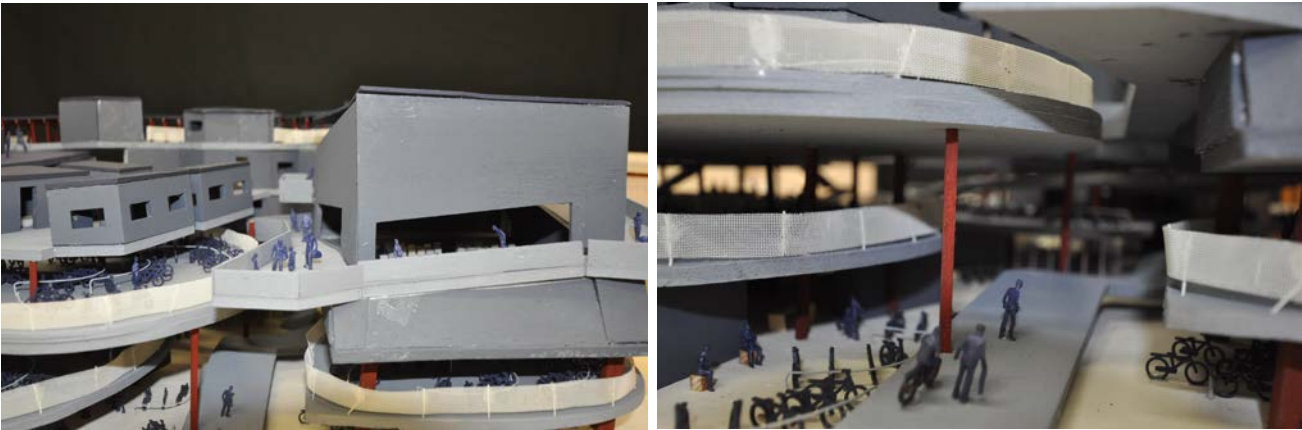
棚橋 美槻
Mituki TANAHASHI
中井研究室
NAKAI lab.

記録される街並み-駅前再開発を再考する-
Composition of contemporary Japanese houses with one volume
一室ヴォリュームを含む現状住宅作品の構成研究を踏まえて



野村 記憶される街並みという意図だが、ここまで読み替えると記憶が成り立つのだろうか。

棚橋 建築そのものの記憶としてではなく、人々の形跡の記録を残したいという考えで、あえて抽象化した建築にすることで、人が際立つ計画としました。

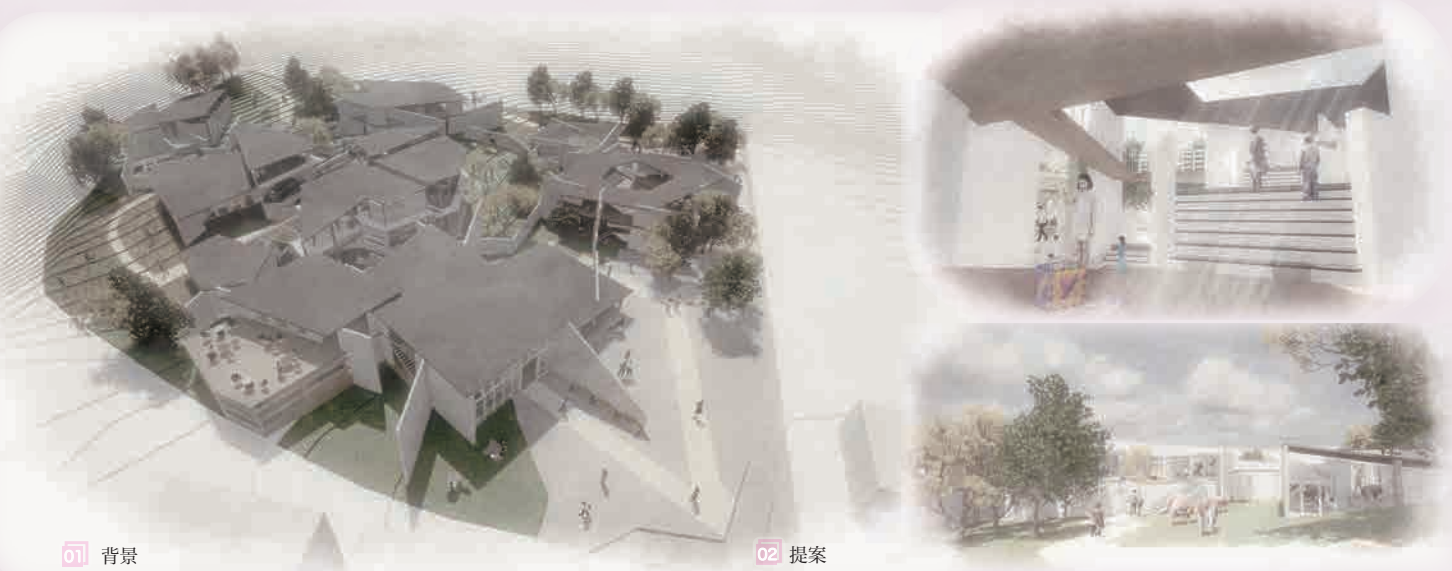


● 優秀賞



石井 心
Kokoro ISHII
六角研究室
ROKKAKU lab.

お手伝いから広がるコミュニティの構築
Building a community that expands from helping
心と知識を育み、地域との繋がるこども園の提案
Proposal for a children's school that nurtures the mind and knowledge and connects with the community



01 背景

01-a 家庭と地域の結びつき



現在、幼稚園・保育園は感染症等の影響もあり、**家庭や地域との結びつきが希薄**になっており、地域住民と関わることで生まれる社会性や、幼稚園・保育園におけるこども達の**日々の変化や成長を親たちが目にする機会**が減少してしまっている。

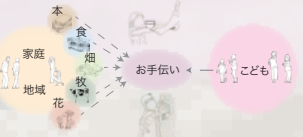
01-b 社会環境型こども園



そこでより家庭や地域社会と密接に関わり、具体的な体験を通し、楽しくこども達が**情緒的・知的な発達**や社会性を涵養できる様な、**社会環境型こども園**を提案し、大人とこどもが交流し、共に過ごせる場所として考える。

02 提案

02-a 3つの行為と5つの要素

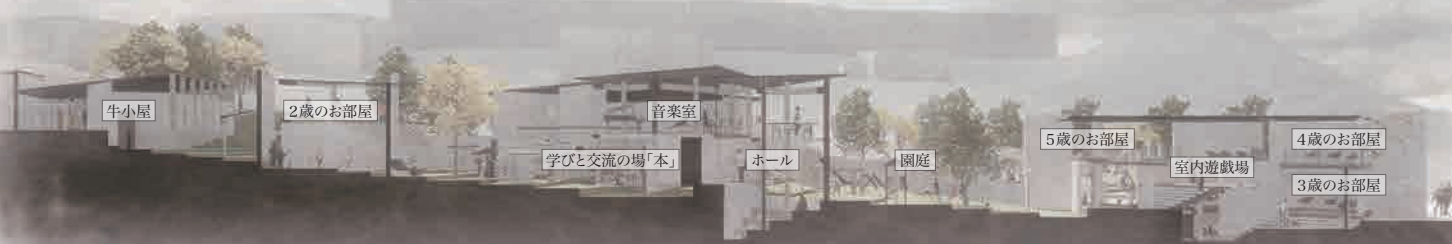


こども園を中心に、「食」、「読」、「育」の3つの行為を取り出し、「食」、「本」、「畑」、「花」、「牧」の5つの要素に分類し複合した地域拠点を併設することで、こどもたちの日常が地域社会とより密接になる計画とする。

02-b こども達が育まれていく場

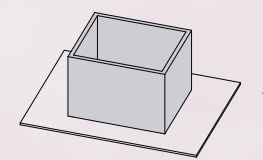


地域住民と家庭がこどもと常にコミュニケーション出来る場であると同時に、「お手伝いプログラム」を通して繋げていくことで、こどもたちの個性、考える力、探求心が育まれていく場を構築して考える。

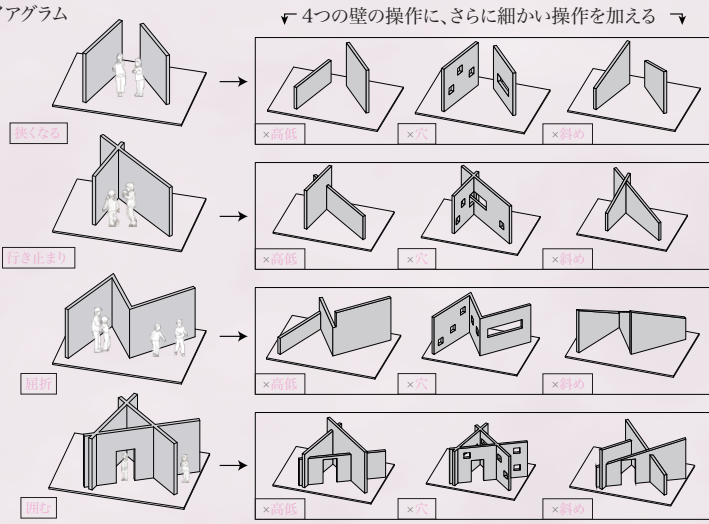


03-a 地域社会と接点が生まれる壁ダイアグラム

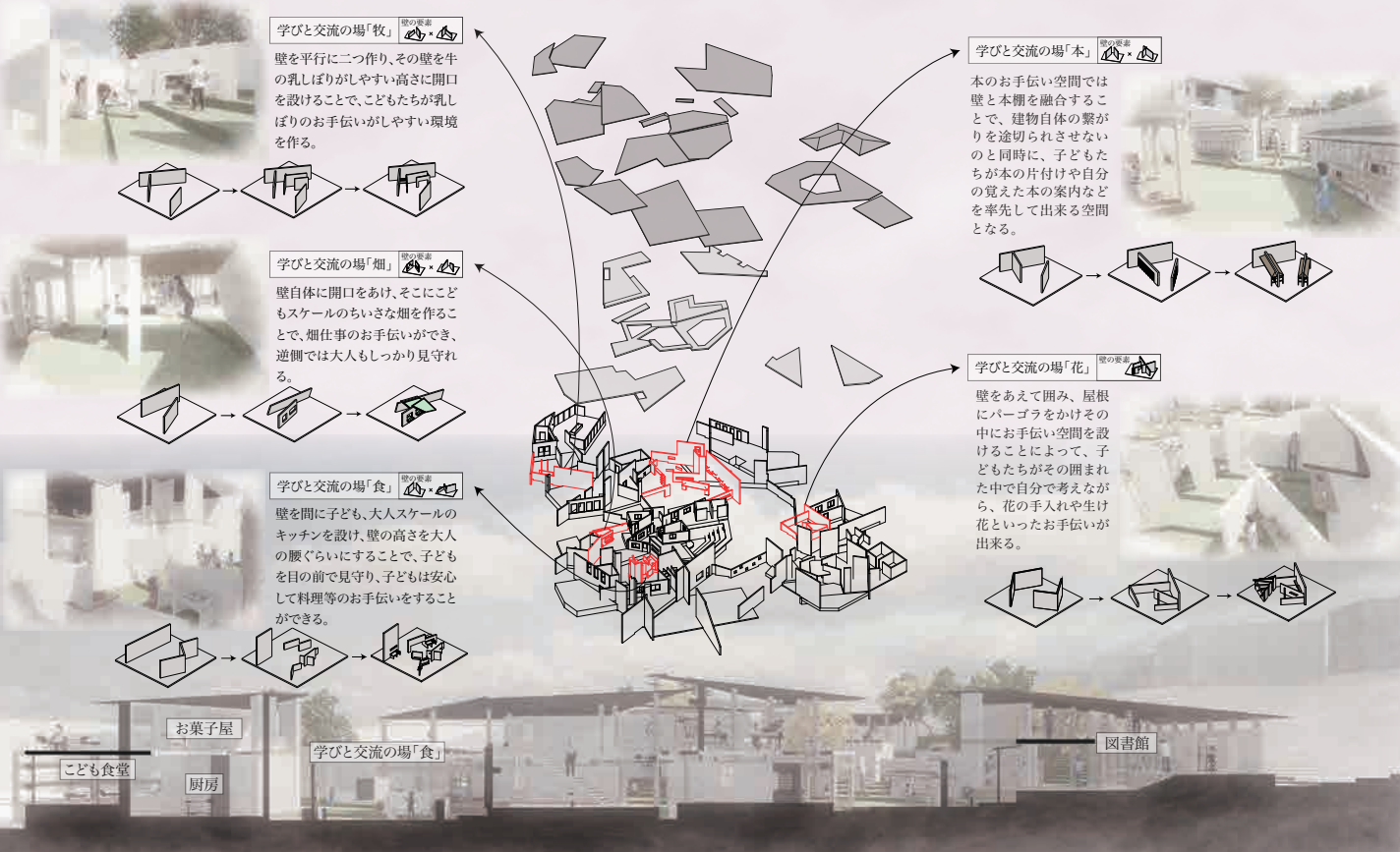
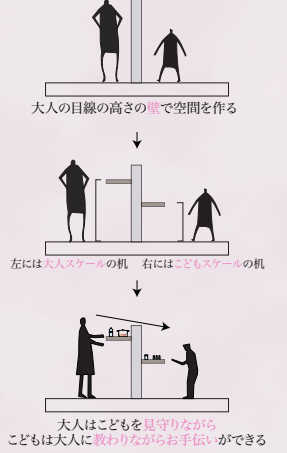
子供園と地域拠点に繋がりを持たせるために、あらゆる角度や組み合わせで構成しながら、人の溜まり場や交流出来る空間をつくる。その大人と子供が関わりを持つ暖かな空間に、「お手伝いプログラム」を取り入れ、壁の空間構成により、学びの場と交流の場をカタチづくる。



四角で囲まれた空間は閉ざされた空間であり、地域社会から遮断された空間である。



03-b 大人に見守られながらこどもが
お手伝いする空間



●優秀賞



西岡 理子
Riko NISHIOKA
六角研究室
ROKKAKU lab.

閑日月
Calm time

瀬戸内海に馳せる自己意識創出の旅のはじまり
The Beginning of a Journey of Self-Conciousness Creation in the Seto Inland Sea

0. 提案

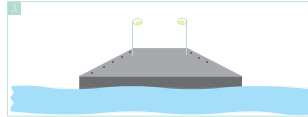
00-a 新しい船着き場をつくる



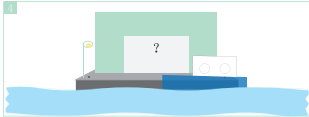
その昔、各島が孤立して存在していた



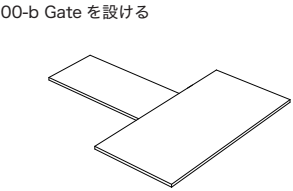
技術の発達により各島に橋が架かり、簡単に島を行き来できるようになった



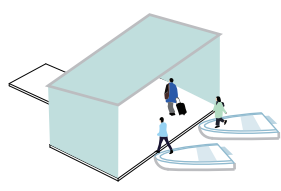
その影響によって「船」の利用が急激に減少
船乗り場だけが島に残された



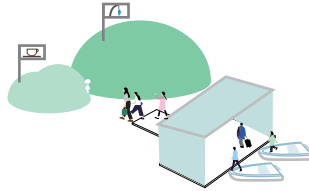
取り残された船着き場に新しく建築し、地域の拠点であった姿を取り戻す



取り残された既存船着き場



船着き場にGate となる建築を新しく設け
人の出入りがある場所を作り出す



Gateを通して島へ入島し
様々な体験に出会い自己意識創出の時間を創造する

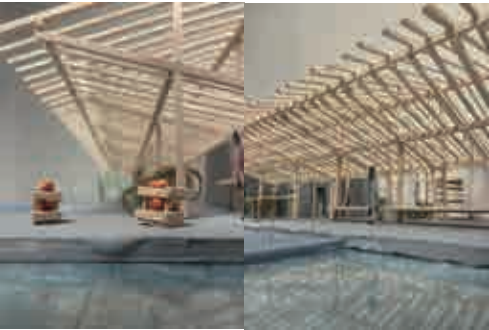
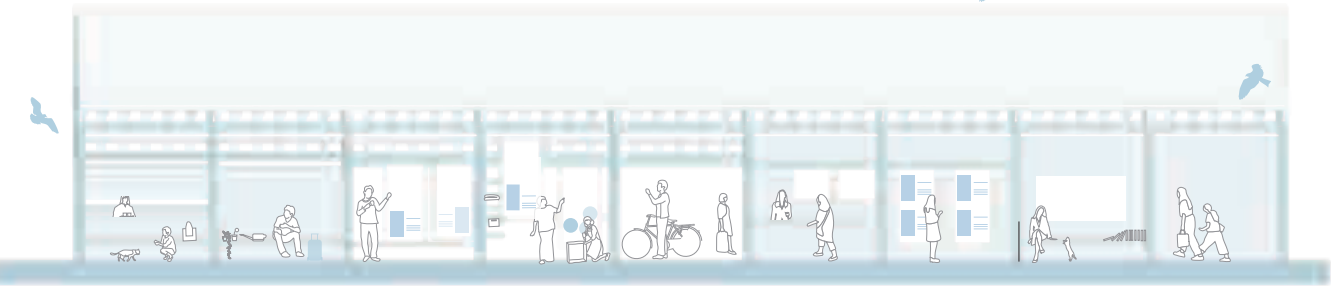


とびしま海道全体計画マップ

1. Site1 レセプション島 見戸代港



ランダムに配置したカーテンがゆらゆらと動き、自然環境と呼应する建築となる。



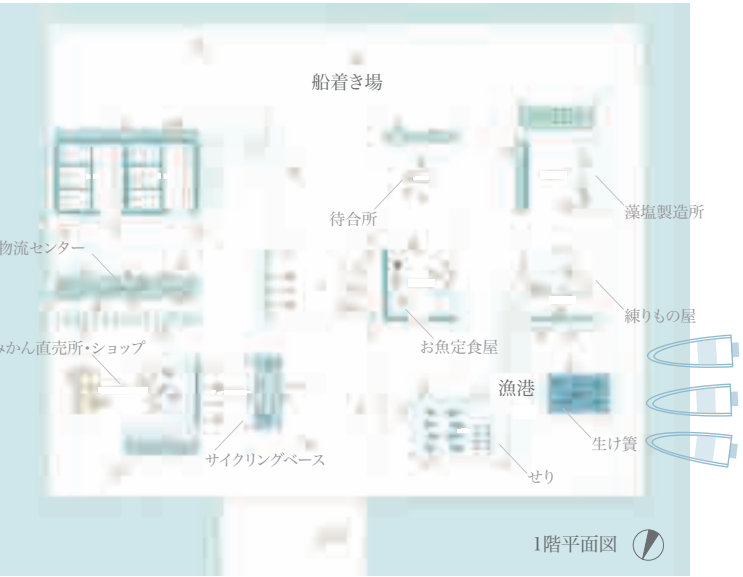
右：旅人を包み込むような軸組みの大屋根
左：特産品のみかんと大屋根

2. Site6 漁島 岡村港

思い思いに島々を駆け抜け自己意識創出の旅を過ごした旅人は、終着島 漁島で旅を振り返りお土産として瀬戸内海らしい体験を体感する。この先も続く瀬戸内海の旅へと出発するターミナル。



海から望む漁島 Gate



●ディプロマ賞



中里 美海
Miumi NAKASATO
内田研究室
UCHIDA lab.

中井 一匡社が目指していた理想郷の生活スタイルはどういったものだったのですか。

中里 当時明治時代に入って資本主義が定着する中で、共産主義や資本主義も目的に創設され、一匡社

だけではなく一緒に生活している子供にも開催しており、そういう理念というものを提唱したかったのではないかと推察しております。

中井 じゃあ、結構本気でやろうとしていたんですね。

大正時代に「一匡社」が創設した「理想郷」一匡邑についての研究

The study of the utopia 「ikkyoumura」, which was founded by Ikkyousha in Taisho period

西村伊作の目指した住宅の建築的特徴と邑内の生活の状況の分析を中心に

1. 研究背景・目的

わが国は明治維新によって近代化の政策が進む一方、貧富の差の拡大といった問題が生じるなど国家体制に疑問を持つ者が現れ始めた。この中で理想的な住まい、すなわち、理想郷を求める動きも登場する。大正 12 (1923) 年群馬県吾妻郡長野原町北軽井沢に創設された「一匡邑」は、大正 2 (1913) 年に旧制第一高等学校の同窓生また東京帝国大学卒業生により結成された「一匡社」という、「治国平天下」という考えのもと組織され¹⁾、女性への教養を題した啓蒙的な活動も行っていた集団の「理想郷」を実現した邑である。邑内山荘は生活改善を主張していた西村伊作の設計によるもので現在も一部現存しており、初代邑長であった大村正夫の三男の大村春夫が残した邑内のスケッチ²⁾ や写真からは当時の生活像も読み取れる。

本研究では、現在も避暑地として使用されている一匡邑について、創設の際に一匡社がめざした「理想郷」像および実現された邑での生活状況とその変遷を分析することで、実現された「理想郷」の一例について明らかにすることを目的としている。

2. 既往研究

本研究は、一匡社の機関誌『社会及国家』³⁾ (1913 年 9 月 -1941 年 4 月) と朝日新聞社が出版した雑誌『アサヒグラフ』⁴⁾ を主資料とし、一匡邑に関する記事を中心に一匡社のめざした「理想郷」像を分析した。また、2023 (令和 5) 年 8 月 10 日に行った現存する山荘 3 軒の実測調査の結果と、理想的な住まいについて書かれている『楽しき住家』⁵⁾ (1919) の記述を比較分析し、最後に一匡邑の居住者が執筆した『落葉松 第一集第二集第三集』⁶⁾ (1941-1970 年頃) から実際に営まれた邑内の生活状況について分析した。

3. 一匡邑の概要

3-1. 一匡社について

一匡社は大正 2 (1913) 年に遠藤始郎、大村正夫、岸巖、君島一郎、津島寿一、額田晋、藤井啓之助、宮澤源吉、の旧制第一高等学校の同窓生により「天下を一匡する」といった理念のもと創立された⁷⁾。創設当初は 8 名の社員でスタートしたが、社員の他にも社友という制度を設け、昭和 2 (1927) 年には社員約 90 名、社友約 200 名が活動していたという⁸⁾。

創立直後の大正 2 (1913) 年 9 月からは『社会及国家』⁹⁾ という機関誌を発行し、総会や研究会等の報告や、社員による寄稿文を掲載し活動を記録していた。この『社会及国家』は昭和 16 (1941) 年 4 月の 297 号まで連載されたものの、それ以降は発行されず、一匡社の活動は不明である。



図1 令和5 (2023) 年12月の一匡邑のスケッチ (筆者作成)

3-2. 一匡社の目指した一匡邑について

一匡邑は一匡社社員の避暑とともに、夫人の教養及び子供達に個人主義的な所有欲のある社会ではなく、一匡社の考える、相互扶助のもと組織される新しい社会の適応性を身に付けることを目的に創設された¹⁰⁾。『社会及国家 109 号』¹¹⁾ では、「一匡社の手に依つて開拓させられた一匡邑が、理想郷として我々のドリームを幾分でも実現し得ることとなつたのは、非常に愉快なこと。」¹²⁾ と記されており、一匡邑を一匡社の夢を実現させる「理想郷」と位置付けたことがわかる。

一匡邑の創設は、社員であり医者の大村正夫と保険会社常務の細貝正邦が中心となり、大正 11 (1922) 年に邑の土地を探し始め群馬県吾妻郡長

野原町北軽井沢の土地を選定し¹³⁾、土地は邑長の大村が購入した¹⁴⁾。邑内には、生活改善を求めて精力的に活動していた西村伊作に山荘 11 軒の設計を依頼したが、この経緯として、東京帝国大学出身で、西村とも交流のあった谷崎潤一郎が仲介したことが推察される¹⁵⁾。完成した山荘は、社員の大村正夫、太田正孝、黒須巳之吉、笹沼源之助、白井多士良、杉田直樹、鈴木八郎、田村憲三、細貝正邦、森村謙三、社友の正富照治の 11 名が利用していた¹⁶⁾。

3-3. 生活改善と理想の住まいの提唱者、西村伊作について

西村は、生活改善の中でも特に建築に関して関心を持っていた人物で¹⁷⁾、それまでの主人と客人を中心とした住宅から、家族本位に基づいた居間中心のアメリカバンガローに注目するなどを新しい住宅の在り方として提案し、必要最低限の実用的な住宅として無駄を省いた簡易生活のできる、独自の寸法を提唱した¹⁸⁾。また、理想の社会を作るためには小さくとも新しい集団を組織し、また、生活の改善を望む人たちが集まった美しい村をつくりたいと語っていた¹⁹⁾。

一匡邑に建てた山荘は、西村の提唱したバンガロー様式に基づいており (図 1) また、山荘は個人所有ではなく自由に利用できるように計画されていた²⁰⁾。この度、現存する 3 軒の山荘を実測調査し、いずれも居間中心のバンガローであること、西村の提唱した部屋の寸法を基準とし、3 軒の山荘それぞれの居間、ポーチ、台所、寝室の寸法の差が少ないことが確認できた。このことから、一匡邑は西村の考える理想の住宅が実現されたといえる。

4. 一匡邑の目指した理想郷の生活について

4-1. 実現された生活について

邑内には山荘の他に共用施設として会館が建てられ、集会、食糧品の売場、娯楽施設、来客用の宿舎、管理人居室のほか、細貝が主催した夏季大学の場として用いられた²¹⁾。夏季大学は、一匡社社員が講師として時事問題等に関する講義を行い、一匡社の活動内容や社員の研究結果などの発信とともに啓蒙活動の場として用いられていたと考えられる²²⁾。

なお、水道は未整備だったため、邑内に流れる川の水を利用して炊事、食器洗いや衣類の洗濯などを行い、共同浴場も運営していた。電気も送電されていなかったため、ランプや、夜は邑の中央で焚火を焚いて生活していた²³⁾。以上のことから、開邑当初の一匡邑では相互扶助の主義のもと共同生活が行われていたことが確認できた。

4-2. その後の生活について

1927 (昭和 2) 年頃には社員、社友でない者が 12 軒目の山荘を建設し、さらに夏季大学は、講師陣の多忙を理由に中止となった。さらに、第二次世界大戦の影響で、邑内は山荘の移築によって空地となった。空地となった場所には一匡社社員でない者の山荘が建ち、11 軒だった山荘は 1969 (昭和 45) 年頃には 17 軒にまで増え²⁴⁾、改めて大村の名義だった敷地を 17 人で分割共有にした。新築の山荘は創設当初の外観の特徴を取り入れており、開邑時の景観を継承しようとしていたと推察される。会館は、新たに平屋の管理人の住居として建て替えられた²⁵⁾。浴場は、1975 (昭和 50) 年に山荘内浴室の増築により廃止され、2004 (平成 16) 年に取り壊された²⁶⁾。水道は 1969 (昭和 44) 年に完備され²⁷⁾、電気も 1931 (昭和 6) 年頃には送電された²⁸⁾。

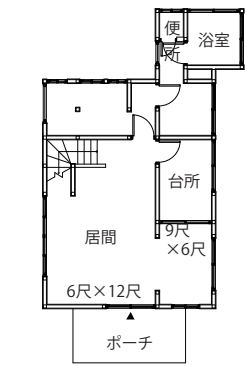


図2 S邸 1階平面図 S=1/250

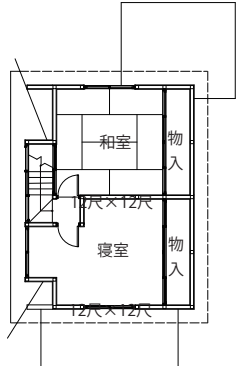


図3 S邸 2階平面図 S=1/250



図4 S邸の写真 (筆者撮影)

表1 西村の提唱した部屋の寸法²⁹⁾

部屋の用途	最小 (尺)	普通 (尺)
ポーチ	6×10	8×15
居間	12×15	14×20
台所	10×9	13×13
寝室	10×12	13×18

5. 結論

一匡邑は、近代化した都市から離れ、西村の提唱した簡易的かつ居間を中心としたバンガローを共有で利用しながら生活し、夫人や子供の教養が実現できる、家族本位及び相互扶助の新しい生活様式で過ごす「理想郷」であった。しかし戦後は新しい利用者による山荘の新築の増加や水道や電気が完備されたことにより共用施設の廃止が行われ、大正時代の近代批判からなる「理想郷」での住まいは社会の変化のなかで徐々に失われたと推察される。現在でも避暑地として利用する者もあり、分割共有という、土地の所有という部分で他者とモノを共有していることから、かつての「理想郷」での住まいを継承しようとしていることが推察される。

注釈

1) 君島一郎「洞察一番室：谷崎潤一郎と一高寮友たち」と時事通信社, pp.103-104, 1967 2) 大村春夫「大村春夫資料」2004 頃 3) 社会及国家 一匡社, 1913.9-1941.4 4) 朝日新聞社『アサヒグラフ』1923.8.1-1923.8.3 5) 西村伊作『楽しき住家』警醒社書店, pp.53-54, 1919 6) 一匡邑『邑報 落葉松 第一集 第二集 第三集』1941-1970 頃 7) 注1)と同じ 8) 『社会及国家 133号』一匡社, pp.4-7, 1927.2 9) 注3)と同じ 10) 吉岡圓次郎「一匡邑のことども」『社会及国家 109号』一匡社, p.613, 1923.7 11) 注10)と同じ 12) 注10)と同じ 13) 井上孝哉「井上孝哉先生の一匡邑に関する御遺文」『邑報 落葉松 第二集』一匡邑, pp.11-12 14) 黒須巳之吉「一匡邑の沿革 第二部」『邑報 落葉松 第二集』一匡邑, p.4, 1969 15) 「百萬長者の新計画」『読売新聞 朝刊』, p.5, 1920.5.2, 『愛と叛逆：文化学院の五十年誌』文化学院出版部, p.36, 1971 16) 前掲注10), p.614 17) 西村伊作『われ思う：人生語録』七曜社, p.93, 1963 18) 前掲注5), pp.53-54 19) 前掲注5), pp.252-254 20) 前掲注13), p.12 21) 大村春夫「一匡邑今昔物語」『邑報 落葉松 第二集』一匡邑, pp.18-19, 1969 22) 吉松滋「『社会及国家』が第二百号になるまで」『社会及国家 第二百号記念號』一匡社, p.224, 1932.11 23) 前掲注21), pp.16-18 24) 前掲注21), pp.24-25 25) 米田太司雄「一匡邑礼讃」『邑報 落葉松 第三集』一匡邑, p.12 26) 前掲注21), p.34 27) 注21)と同じ 28) 注24)と同じ 29) 注18)と同じ

山本 基揮

Motoki YAMAMOTO

福井県生まれ

2002年 京都大学 工学部 建築学科 卒業

2004年 京都大学 工学研究科 修士課程修了

2004-2008年 山本理顕設計工場 勤務

2008-2011年 ノイズアーキテクツ 勤務

2011年 東京芸大芸術情報センター 非常勤講師

2011-2014年 Shibukawa Eder architects 勤務

2014年- 山本基揮建築設計

2015-2019年 東京大学大学院 特任研究員

「質疑は基本的にゲストの二人にお任せします。」とのことでした。ですので、とりあえず、感じた何かを口に出す。発表者やアリソンさんの意見を聞く。考える。そしてまた、何かを口に出す。なんとなく自分の話していることがわかるような気がするが、もっとも要領を得ない。アリソンさんの的確な意見に比べ、支離滅裂な自分の言葉に学生の皆さんも困惑したかと思います。落ち込みました。でも、それでいいとも思っています。何故なら言葉とはそういうものだからです。しゃべってみなければわからない。そして、それは建築も同じです。

社会的な課題を見出し、その課題を建築で解決する。そのために、実際の敷地に行って手掛かりを探したり、本を読んだり、先行事例を研究したり、様々なことを考える。そして、なにかをつくろうとして手が止まる。僕にも経験があります。でも、とりあえず、線を引いて、模型を作って、考える。そして、また作る。それを繰り返した結果が卒業設計だと思います。

「建築には根拠などなく、建築が仮説を根拠づける。」 山本理顕さんの言葉です。

もちろん、社会的な課題を解決することは重要です。そして、それはとても難しいことです。しかし、おそらく、卒業設計で大切なことは、自分の作った建築がどんな仮説を証明しよ

うとしているのかを表現することにあると思います。そして、ここが難しいところなのだけど、その仮説は遊愛的に、つまり、作って初めて事後的にわかるものなのです。ですので、作りながら考えることを繰り返す中で、自分の作っているものはどんな仮説を証明しようとしているのかと、常に批判的に見る必要があります。また、最後の講評の場にあっても、設計の過程について語るよりも、自分の作ったものに耳を傾け、それが根拠づけようとしている仮説を明示することが何よりも大事なのです。

講評会の場で、「やりたかったことを説明してください。」という意見があります。それは「その建築の仮説について説明してください。」という意味です。今回の講評会のプレゼンテーションでは仮説についての言及に至らなかったものが多かったと思います。しかし、仮説を根拠づける力のことを建築の批評性だとするのならば、仁昌寺さんをはじめ石井さん、西岡さん、勝又さんの作品のように仮説を誤読させるのに十分な力を持った作品や、棚橋さん、東野さん、嶋岡さんの作品のようにハッとするような仮説を提示しているように見える設定の鮮やかな作品には批評性がありました。素晴らしいかと思えます。ありがとうございました。

建築が足りず、経済が成長する時代には、とにかく速く、効率的に、たくさん建築をつくることが求められました。それは豊かな生活を実現するために必要な事実だったと思います。それでは、現代の社会的背景の中で、豊かさを実現するために建築に何ができるのでしょうか？

建築をつくるということは、案外いろんなことを方向づけてしまうものです。シンボリックな建築による街の方向性や、大規模建築による人の集まり方、座れる場所を増やすことで散歩する人が増え、人の居場所を丁寧に考えることで挨拶の機会が増え住んでいる人たちが健康になることもあります。

現代の社会に必要な建築を考え、つくっていくことが、今切実に求められています。これからみなさんは様々な仕事や暮らしを営むことになると思いますが、大学での経験を活かして、自分の周りを観察し、建築的な知性を頼りに、様々なスキルの人とコラボレーションしながら、ものや出来事をつくることを続けていってください。そんな営みの連鎖が豊かな風景となるのではないかと思います。

松隈 洋

Hiroshi MATSUKUMA

2023 年度末に前任校の京都工芸繊維大学を 65 歳で停年退職し、本年度 4 月より本学に着任したばかりの高齢の新米教員なので、戸惑うことの方が多く、落ち着かない一年となった。卒業研究の指導にあたった学生は合計 3 名で、論文が 1 名、卒業設計 A が 1 名、B が 1 名である。コロナ禍によって、数年来、どこの大学でも卒業設計を下級生が手伝うというシステムが断ち切られていたことが影響したのか、設計を選択した 2 名は、下級生の手伝いのないまま、一人で黙々と取り組んでいたことには驚かされた。前任校でも、同じことが起きていたが、やはり、下級生が卒業設計を手伝い、4 年生が手伝われるという正規の設計実習では得られない伝達の機会を奪われてしまったことは、建築教育にとって憂慮すべき事態であると思う。また、リモートの講義やゼミが続いたことによって、顔を合わせて対話したり、発表したりする機会も失われたことで、学生たちの行動範囲が狭くなり、社会への眼差しによって建築の意味を考えていく回路を見出すことが出来にくくなっているのではないかと、とも思えた。こうした逆風の中で、学生たちがどのようにして卒業設計に向き合ったのか、そのことだけが気がかりだった。しかし、神奈川大学の卒業設計の展示を初めて見て、何人かの学生たちに話を聞いてみて、学生たちの若々しい精神と何かをつかみたいという気持ちを感じ取ることができて、正直ホッとした。むしろ問われているのは、彼らに対して、建築という世界のもつ変わらない可能性や、社会が建築に信頼を寄せ、建築が社会に受け入れるためにはどうしたら良いのか、ということへの手がかり、建築にしか実現できない価値や、建築に感動する心を、私たち教員が伝えているのか、ということだと思えた。これからの課題としたい。

山家 京子

Kyoko YAMAGA

2023 年度卒業生はコロナ禍初年度 2020 年 4 月に入学した学生たちである。入学してもキャンパスは閉鎖され、設計製図科目はじめすべての科目がオンラインだった。そんな状況が影響してか、今年度の卒業設計に指導は例年と様子が違った。例年、チェック日を設けても来ない学生が少なからずいる。特に締切が近い 1 月になると今更ダメ出しをされるのを嫌うのか、研究室でも私と目を合わさないようにして作業に動いむ学生も多い。ところが、今年度の学生は 1 月になってオフィスアワーにはば全員が顔を揃えていた。様子がわかってありがたかったし、仲が良いとも言えるのだが、反面、やや疑問も感じた。彼らには製図室で同級生と机を並べて作業したり、先輩たちを手伝ったりの経験が例年に比べて不足している。そうした経験が設計の進め方やプレゼンテーションスキルの習得、そして自ら考える力の醸成につながっていたのだろう。

さて、卒業設計の本審査は 2 号館地下演習室でのポスターセッション形式の発表と対面での優秀発表会が復活した。演習室に図面と模型が並ぶ光景は壮観であり、卒業設計にかけたエネルギーが感じられ良かった。足を運んでくださった保護者もちらほら見受けられたようである。

卒業設計では、横浜や東京の市街地に加えて、瀬戸内やマニラなど敷地のコンテクストが多様だった。優秀案には丁寧に解かれた提案も多かったが、その分ややインパクトに欠けていたか。タイトルを見返してみると「新たな神社」「行き来を豊かにする」「記憶される街並み」「新たな公共性」など、建築化手法やプレゼンテーションによってはさらに興味深い提案になりえたように思う。

修士設計は、単体の建築というよりまちスケールの提案がほとんどであった。卒業設計との差異化を図る中でスケールをあげるののは一つの方方向性だが、一方でひたすら単体の建築を突き詰めていく提案も見えていた。

曽我部 昌史

Masashi SOGABE

ここ数年、コロナ感染症への対応のために、ポスターセッション形式での本審査会を行うことができなかった。2023 年度は久しぶりにこの形式での審査会が開催でき、2 号館の地下の大きな空間で、今の学生たちの関心事や建築的な成果を一望することができた。あらためて気づかされたのは、全体に同じようなものが並んでいるという印象を受けるということである。提案の幅が思った以上に広くなく、思考や検討の密度も同じ程度に納まっているように感じられた。もちろん、規模は住宅から駅前開発などまでさまざまだけれど、大半の提案内容は想像の範囲をこえない。昨年度新設された、住生活創造コースやまち再生コースの教員の指導を受けた作品も含まれているので、もっと多様な視点にもとづいたものや表現があっても良さそうである(昨年度は、コース新設とのかかわりは定かではないけれど、多様性が増したと感じていた)。一部にそうした特有の視点や方法にもとづくものもあったのだけれど、卒業設計としての表現の水準が追いついていなかったことが、とても残念に思った。卒業設計は一生に一度の経験で、その後、建築設計に関わる仕事に就く場合などは特に、自分にとっての一つの出発点にもなるものである。この時点での関心事をありとあらゆる方法で深め、それを建築の提案としてまとめる。やり切ったと実感できるところまでやらなければ、それほど意義深いものにはならないだろう。そのプロセスの中には自分の中にある常識や思い込みが邪魔されることも少なくないはずである。周りの人からの意見などが、そのきっかけになる場合もあるだろう。むしろ、周りの人からの意見は、自分の中にある常識や思い込みを乗り越える手がかりにするべきものである。非常識であることを目指す必要はもちろん無いのだけれど、たいてい意味の無い常識や思い込みのために、自分のアイデアの可能性や表現を諦めてはいけない。今年度は、そうやって諦めたケースがとても多かったのではないかと。同じようなものが並んでいるという印象は、自分の中の常識に負けてしまって、新しく独創的な可能性が失われてしまった結果なのだと思う。一方で、十分にやり切った、いつもの自分を乗り越えられた、と思えるのであれば、大学内という限定的な世界での評価に一喜一憂する必要はない。必ず、建築設計に向けた自分自身の思想の出発点が得られたはずである。

アリソン 理恵

Rie ALLISON

宮崎県生まれ

2005年 東京工業大学 工学部建築学科 卒業

2010年 東京工業大学 大学院 博士課程 単位取得退学

オーストラリアNMBWでのインターンを経てルートエアートリエアンドアイ坂本一成研究室勤務。

2015年より一級建築士事務所teco開設、共同主宰。

2020年より一級建築士事務所ara主催、コーヒショッ プ MIAMIA、キオスクI AMを営む

2010年日本建築学会 作品選奨、2016年ヴェネチアビエンナーレ審査員特別表彰、2022年グッドデザイン賞ベスト100など。

中井 邦夫

Kunio NAKAI

例年そうだが、個人的には、独自の欲望が感じられ、それに正直でユニークな方法に挑戦しているものを評価した。卒業設計では、この冊子には紹介されていないが、通常あり得ない密度の壁面の連続による構成に都市神社を組み込んだ嶋岡さん、シンプルでありながらも巧みな空間構成のなかに、都市の公共空間と居住空間を暴力的に重ねた東野さんなどの案である。一方で、模型や図面の物量や密度が高い力作であっても、どこかで見たことがあるような手法に陥っているものは、あえて評価しなかった。個人名は挙げないが、方法としてとくにここ数年多くみかけるのは、調査と称して、どこか特定の地域にみられる土着の建物や風景から様々な環境要素や建築的特徴をピックアップしてメニューをつくり、それらを再構成するという手法である。こうした手法が、敷地が都市であれ地方であれ、あるいは海外のまちであれ、同じように展開されるので、要素の内容に多少の違いはあれども、結果としてできる建物は、様々な要素がプリコラージュされた似たような結果となる。テーマからみても、本来そのテーマを考えるなら、方法も全然違うはずなのに、なんでその方法になるの?ということすらある。つまり敷地もテーマも関係なしに、そういう手法がパッケージとして流通し、何やら卒業設計の正解かのように思われている感じすらある。しかし学生たちには、そういうパッケージ化さえした手法に陥ることなく、独自の方法にトライしてみてほしいと思う。なぜなら、そういうお決まりの手法や方法を疑わなければ、結局何も変わらないからである。どんなに立派なテーマを掲げても、実際の手法が変わらなければ、結局実際の空間や環境は変わらない。極端な例だが、自然を活かした豊かな環境などと銘打ちながら、やっていることは真逆な大規模なマンション開発などは巷にあふれている。卒業設計や修士設計は、一種の純粹建築サンクチュアリみたいな場である。実際に建たないからこそ、現実のすべてを否定しても構わないのだし、少なくともどこかでみたような方法に安易に乗っからず、独自の欲望と方法を貪欲に追求することが大切だと思う。

六角 美瑠

Miru ROKKAKU

今年の卒業制作の審査は、コロナの時から採用されたパワーポイント発表形式を辞めて、パネル展示形式の審査を再開した。約50名全員分の卒業設計の模型とパネルが一同に並んだ。1人A1パネル10枚という物量をズラリと並べて展示されている様は、見応えがあり、審査の折に制作者1人1人と対話できたことも良かった。学部化でコースや教員が増えたこともあり、卒業研究のテーマや視点もバリエーションが豊富だったと感じる。また、今年は、今の時代には珍しく全て手描き(ケント紙に直書き)の提出物もいくつか見られた。手描き作品は、3Dパースのようなビジュアルの派手さはないが、何を考え、試行錯誤し、どのような設計をしたのかということは、実直に伝わってきた。手が動く分、リサーチにも力が入っていたように思う。Cad化からさらに3DそしてBIM化に進んでいる時代背景からしても、その流れに逆らうようだが、神大の設計教育の特徴の一つは、手描き教育にあると思う。3年生後期まで、成果物を手描きで提出をさせる大学は、他にはほとんど無いだろう。着任初期は、その教育方針に不安を覚えたが、修士になればデジタルツールも使いこなしているので、学部は手描きでよし!とすっかり神大に染まってしまった。

今年の修士研究は、ある意味とても印象深い感じがあった。ちょうど私が着任3年目のため、初めて4年次に卒業設計を担当した学生が大学院へ進学し修了したからだ。私の研究室から修了したのは5名だが、故郷の地域のことを真剣に考え、また住宅地のコミュニティ形成の可能性を考え、地域の新たなネットワークについて考え、ユニークな提案に向かった学生たちだった。修士研究の成果物を見て改めてこの2年を振り返ると卒業制作から思考力も計画力もかなり成長が見られる。今後も成長著しい学生たちと大学院2年間で共に過ごすことを思うと、彼らと共に何を考え、どのように活動するか、私自身が問われているような気になってしまった。

鈴木 信弘

Nobuhiro SUZUKI

信頼すべき社会自体が揺らいでいる今日、減速していく私たちの社会をどう捉えて、いかなるテーマを選ぶのか。そしてどう建築化し提案するのだろうか。そんな期待を込めてディプロマの展示会場を拝見し、発表を聴きました。

全体的にグラフィックス表現については上級生から継承されており高いレベルですし、模型の密度も目を楽しませてくれる作品が多かったと思います。しかし、残念ながら既知感が否めませんでした。それぞれ違う対象なのですが、設計の方向性が類似しているので。最近の学生は造形をつくる時、湧き上がるイメージやパッションをあまり持てないのだろうか。デザインに対して自信がないのだろうか。論理や根拠の説明を求められることに萎縮するのだろうか。理由はわからないのですが、みなさんどこか冷静で、合理的な分析結果から形を自動生成していくようなデザイン手法を探しているような気がしてならなかったからです。まるで生成AIが条件入力に対して、自動的に絵を描いてくれるような進め方を目指しているのでは?と思ってしまいました。特に目についたのは要素の抽出とそのエレメントの再構成によるデザイン手法。調査対象に対して「素晴らしい」を抽出する段階は少なからずそれぞれ個性的であったのに、分類・分析の段階で平均化して、さらに形にする段階で抽象幾何に還元してしまい、普遍的な意味を持たせたはずの標準化パーツを再構成しても、豊かなイメージを想起することが難しく、結局どこにでもある凡庸な結果になりがちだからです。

わからないけど悶々と手を動かす。鉛筆を動かしている時の指の感触、強弱、紙との摩擦で擦れる音、描かれる線と見つめる眼、思い通りに描けないことへの苛立ちといった、身体の手触りや感覚・経験することで生まれてくる得体の知れない情感、今後のAI時代において、そんな地味な作業と思考が最も大切なことなのではないかと思っています。

最後に、作品レベルにかなりの格差が広がっていることを懸念しております。可否の判定基準が下がっていることも心配です。今後もそのような傾向にならないよう、真摯に取り組んでいたきたいと思います。

野村 和宣

Kazunori NOMURA

今年度で2年目、実務家教員として卒業・修士の研究・設計の指導評価に関わった。皆さんのテーマ設定の多様に関心するとともに、寝る時間を削って取り組んだ成果品にこもった熱量に圧倒させられる。一方で、気になることもある。私は実務家として長年、企画・実施設計業務に携わってきた者なので、コンセプトの明快さ、デザインのわかりやすさを求めてしまうところが強いのかもしれないが、たとえば「居場所」や「ふるまい」という言葉がやたらよく使われることに違和感があるというか、少々ムズガユク感じる。言葉や提案がフワッとしていて、設計者がはっきりしたメッセージを発するというより、受け手側がいいようにイメージすることに任せているというか、悪い方をするそんな印象を受ける。なぜ、もっとわかりやすくこういう場所にしたい」「こういう形や空間で感動を与えたい」という表現をしないのだろうか。

以降、いくつか注目した論文・設計について述べる。まず論文では、「明治天皇の行幸・・・」(池田)が行幸を受け入れた明治期の住宅を、「一匡邑・・・」(中里)が別荘地での大正期の理想郷の姿を明らかにしており、研究対象として興味深かった。設計では、「蘇州故郷の風景」(西村)が散居村集落に、「閑日月」(西村)が瀬戸内の橋でつながる離島群に着目し、いずれも場所との関係が魅力となる建築を提案しているが、いささか淡泊であった。その場所ならではの環境(自然や集落など)との関係を表現してほしかった。スラムを高層化した「CAVE STREET 線上の余白」(仁昌寺)は、わかりやすく迫力もあって心に響いた。自然発生的に意図せず出来上がったスラム街の構成要素を価値として抽出し、あえてシンボリックに組み上げることで価値を発信しようとする行為が面白い。なぜその要素を抽出したのかについても語ってほしかった。最も私の心に刺さったのが「記録される街並み」(棚橋)だった。「記憶される」ではなく「記録する」という能動的な言葉にギョッとした。かつての街並みを再開発されたにも関わらず体験できるなんて、なんと素敵なことだろう。結果的に建築表現の読み替えすぎが気になったが、コンセプトは共感できる。

冒頭に「もっとわかりやすく」なんて書いてはみたものの、そんな容易いことではない。大学を卒業するタイミングで、自分ならではの「問題意識」を持つ持てたことが最大の収穫である。皆さんが獲得した「問題意識」は、これから実社会を相手に仕事にしていく上での出発点として大切なものとなるだろう。是非、それを広げたり深めたりしながら、大いに社会で活躍してもらいたい。

高橋 寿太郎

Jutaro TAKAHASHI

神奈川大学の卒業設計・修士設計の優秀者は全国的に高いレベルに達している、と私は感じている。今回の個人的な評価フレームは以下である。「表現された建築物の造形内容と、その建築が成立する背景(企画やコンセプト)を併別して評価し、それらが両立していること」。そうすると、例えば建築の造形がダイナミックあるいは美的バランス感覚に富んでいるだけでは、またその企画が何らかの社会課題に触れていないものは、評価しない。逆に社会課題に高い視座で十二分に取り組みれていたとして、それが言葉ではなく建築表現として応えられていることで、評価に値する。そういう観点で、学部から幾つかの作品にコメントしたい。

春川さんの作品は、生物多様性のユートピア的でサステイナブルな世界観と裏腹に、こうした環境はともすれば裕福層のリゾート空間として実現するため、今後はいかに格差社会を是正しうる可能性を唆できるか、世界の事例を実体験で集めて欲しい。勝又さんの斜面に位置する一時滞在施設は、日本の致命傷となる地方衰退の抑止につながる関係人口増加を加速させ、また国が地域おこし協力隊に莫大なコストをかけていることに比較し桁違いにローコストな事業であるというストーリーは理解できる。しかし建築自体は複雑な形状に見えて、構造形式がおそらくは単純なラーメン構造であることについて、もう少し高いアウトプットがあり得たと思う。他には高梨さんと棚橋さんを評価した。

大学院生では上條さんによる新宿戸建群の建て替え計画は、不動産的な建て替えの不可能性に対して建築的に挑んだ点で強く興味を引いたが、独特な9本の束ね柱に執着しているように見えてしまうのは惜しかった。西村さんの富山県山王地区の住宅は、地方の切実さが模型に表現されている点が記憶に残っているが、ある種の具体性がありすぎるが故に、建築とは抽象化である(単純に要素を減らすということではなく)ことを思い出し、今後はそれらのバランスを磨いて欲しい。大学院生では他に、関川さん、穂屋下さん、宮島さんを評価した。

これは全国共通かもしれないが、卒業設計と修士設計のアウトプットの差があまり感じられない。卒業設計が初等設計技術の集大成として、アウトプット形式(いわゆる図面の種類や模型など)がある程度統一されているべきであるとすると、大学院生はより独自に表現してよいと思う。

須崎 文代

Fumiyo SUZAKI

本年度の卒業設計も力作が多く出揃った印象が強い。全体として、建築単体のアプローチというよりは、防災や地球環境保全のような社会課題を捉え、その解決のひとつとして建築をデザインする姿勢や、地域のポテンシャルを生かすための方策として建築デザインの視点をマクロ/ミクロに再設定しようとする設計作品が多かった傾向があったように思われる。歴史的背景や既存空間の質を丁寧に読み取りながら更新のデザインを展開する姿勢もタイ部分に共通しており好評であった。

あるいは、建築単体に注目した作品においても、心理や教育といった人文的視点や農業生産のような経済活動を包含する課題解決に取り組んだ作品も見られた。いずれも、概念的な水準の検討にとどまることなく、こまやかな場所性やエレメントの設計にまで提案の射程が至っており、非常に興味深く読み込むことができた。

とりわけ、優秀発表に残った作品や修士設計の提案においては、各自が見出した問題設定に対する検討に明瞭な一貫性があり、提案の密度やプレゼンテーション(ドローイング、模型等)の完成度が高かったことが共通している。都市スケールの模型とヒューマンスケールの営みやふるまいを示すドローイングが制作されており、それぞれの建築の表情を多面的に捉えることができた。また、手描きのドローイングもいくつか見られ、IoT全盛の時代に手仕事へのこだわりを貫いた労作もあった。

なお本稿において直接の対象ではないが、卒業論文、修士論文も意欲的な成果が多くみられた。指導教員のテーマにそった専門的かつ具体事例に踏み込んだ研究や、逆に学生主体の問題関心から悉皆的に調査を行い、一定程度の新規性をもつ知見をいずれの研究も呈示していた。さらに、設計と研究の双方を成果とする設計Bに取り組んだ学生が一定程度おり、そうした向学の姿勢は評価すべき対象と捉えるべきだろうと思われた。

立花 美緒

Mio TACHIBANA

本年度の試みとして、卒業設計優秀作品講評会の賞の選定において、ゲストクリティークの先生及び教員の投票先が公開された。審査の透明性やイベントとしての盛り上がりはもちろんのこと、個人的にはポジティブな気持ちで投票できたように思う。非公開であった前年度は単純に最優秀や優秀賞に値するかで選んでいたのも、無理に票を使い切る必要を感じなかったが、オープンになるとそこに応援するような気持ちが加わり、なるべく多くの作品を選ぶような気持ちになった。「xxの一つの在り方を提示している」「ドローイングや模型がとても良かった」といったように作品の良いところに対して投票した。講評で疑問を投げかけることは当然あるが、評価はそれとは切り離し、少なくとも自分は減点方式的な思考に比重を置き過ぎずに済んだように感じた。

賞や評価を過度に重視しているわけではないが、自分の審査の観点を以下に記す。1 つは、ある仮説を立ててそれをやり切っているかという点に着目した。ここでの仮説はリサーチによるものに限らず空間や設計の試みを含んでいる。そもそもチャレンジしなければやり切ることは容易になるので、その仮説の射程も評価した。ただし仮説自体のジャンルや内容はなるべく評価の対象から除外するように意識した。優秀賞の投票であり私の個人賞ではないので、完全に打ち消すことは不可能でも、イデオロギーの問題に自覚的でありたいと思った。また、優秀賞という賞の性格から、完成度と論理性も考慮した。学部集大成として通年で取り組み、提出からさらにブラッシュアップする期間が優秀作品講評会までにあったこともあり、完成度を問わず可能性のみで「優秀」と呼ぶのは難しいように感じた。

結果として、自分の投票と受賞作品は一致しているものもあれば、もちろんそうでないものもあった。審査基準が各教員で違うことは大事であるし、学生に必要以上に影響を与えることも望んでいないが、投票先が公表されたならばその理由も公表しようと考え、総評とは若干ずれるがここに記した。

上野 正也

Masaya UENO

2023 年度の卒業研究及び修士研究は、緻密に地域をリサーチし、そこから得られる情報から建築言語を抽出した上で建築化しているものが特に目についた（もちろんこれまでにもあったが）。どのようなビルディングタイプにおいても、どこかの場所に建つことから、そういったアプローチ・姿勢は重要だ。優秀作品発表に残った作品にはそれらアプローチの多様性がみられた。優秀作品として選ばれなかったが、敷地を連続的につなげていくことでエリアの更新を計る作品や住まいの共用部を大胆に開き共有する建築など、少し逸脱した感を持った作品が逆に魅力に思えた。一方、卒業論文においても興味深いものがいくつかあった。例えば、横須賀中央駅周辺地区における旧道と現在の街区・街路構造との関係をみた論文では、再開発ビルの中にまでその影響が及んでいる点などを明らかにした。また、横浜市の斜面地に建つマンションの構成を調べた論文では、横浜の特徴である地形に呼应した建築として斜面地マンションが(本人的には肯定的に)取り上げられており、横浜市の都市計画に対するある種の批判と取ることができ大変興味深かった。さらに、木造建築の基礎の変容過程についてみた論文はその着眼点が面白く、丁寧な調べに基づく論の展開がなされた。一匡邑に関する論文は、調査の密度やその完成度において素晴らしかった。これらは、まち再生コースにおける最終的なアプトプットのあり方に対して、示唆に富んだ研究であったように思う。

内田 青蔵

Seizou UCHIDA

今年度の卒業設計・卒業論文の発表会、さらには修士設計や修士論文は、個人的には大変楽しみに期待していた。その理由は、学部化に伴って新しく就任していただいた先生方にも卒業設計や卒業論文あるいは修士設計や修士論文の指導に当たっていただいていたこともあり、これまでにない先生方の個性や新しい領域を反映した新鮮で魅力的な設計や論文に出会えると期待していたからである。そんな思いもあって発表会に参加させていただいたが、興味深い研究テーマや個性豊かな提案といった点から見れば、残念ながら全体的には少し低調であったように思う。設計図面も模型もドキッとするものが少なく、また、迫力を感じるものも少なかったのは、期待していただけに残念であった。コロナ禍の影響が現在も続き、先生方も学生も大学で過ごす時間の制約を受けていることや、先生方にとっては初めての指導で遠慮があったのかもしれないと想像しているが、指導の難しさ乗り越え、ぜひ、来年は、先生方の専門性を存分に生かした指導が感じられる魅力的な設計や研究成果を大いに期待したいと思う。

卒業論文

旧道の痕跡から見る横須賀中央駅前の空間構成	上田 万葉
ソルフェージュスクールから見る吉村順三と音楽の関わり	守 哉月
幹枝と葉がつくる樹木空間の構成	中里 友香
シャルロット・ペリアンの棚のデザインに関する一考察 ー形態と言説の変遷に着目してー	稲葉 桂美
木造建築の「基礎」の変容過程についての研究 ー戦前期の建築書籍を主資料としてー	関野 大翔
建築家・浜口ミホの設計思想における「日本的」要素の変遷に関する研究	鶴田 玲香
★ 大正時代に「一匡社」が創設した「理想郷」一匡邑についての研究 ー西村伊作の目指した住宅の建築的特徴と邑内の生活状況の分析を中心にー	中里 美海
横浜市内の斜面地に建つマンションの構成	鈴木 優也
大森山王地区における敷地および建物の変遷	福田 奨
相模大野駅前における中規模集合住宅を含む街区	山田 樹飛

卒業設計〔設計A〕

江ノ島の町をつなぐ斜面上建築	石井 荘祐
人と文化と継承 ー古民家改修による地域資源の再生と地域コミュニティ拠点の提案ー	阿部 凌大
◎ お手伝いから広がるコミュニティの構築 ー心と知識を育み、地域との繋がることも園の提案ー	石井 心
立体化路地渋谷 ー路地と看板類でつくる商業空間の提案ー	熊谷 匠
水と森の回遊路 ー愛甲郡愛川町における産業を基盤とした体験型施設の提案ー	小坂井 唯月
○ 都市に溶け込む ー聖と俗が混在する新たな神社の提案ー	嶋岡 礼奈
人の居場所をつくる建築 ー廃校舎の改修で自給自足の拠点にー	鈴木 透弐
住まいを開き街区を繋ぐ ー大和市西鶴間における住み開きの提案ー	谷崎 智也
居心地の良い都市の実現 ー原町田における快適に過ごすことができる都市建築の提案ー	中澤 健
独没家（ひとりぼっち） ー独りが集まる新しい集形成成ー	早坂 恒成
○ 生物多様性を軸に取り戻すまちの風景 ー団地解体に伴って生まれる暮らしの共命地ー	春川 桃子
いきている山 ー山岳の性質を映し出す巡礼建築群の提案ー	平島 岳

居場所を見つける ー横浜市緑区十日市場町における複集合集合住宅の提案ー	堀江 祐希
○ 街の遊び心を描く ー子供の遊び場空間から導く街の新たな活動拠点の提案ー	前川 愛結
地域の家 ー森林と市街地の境域における地域拠点としての小学校の提案ー	村松 希瑞奈
地域に開かれた人々の居場所 ー川崎市中原図書館の建て替え計画ー	森 蒼馬
ここだけの風景 ー横浜市港北区日吉本町におけるこども園の提案ー	早田 鈴
農の景観とコミュニティを形成する集合住宅の提案 ー鎌倉市雪ノ下地区を対象としてー	石川 貴大
+Farm Life ー牛や鶏と共生するまちー	大石 純麗
人々をつなげる美術館	小川 麗司
○ 行き来を豊かにするハブ建築 ー高速道路と接続した多拠点生活を促す中継地ー	勝又 智代
体験を撮る ー城ヶ島における風景と過ごす美術館ー	金子 遥
TINY BASE in ODAIBA ー新しい暮らしや生き方のイメージを実現するためのファクトリーベースー	亀田 真瑳人
○ 変化と不変 ー方丈記から考える可動住居ー	菊村 直央
「居住×拠点」 ー横須賀市船越町仲通り商店街における新しい居場所の提案ー	佐々木 雅史
○ 心を紡ぐ ー精神的なケアを必要とするこどもの自立を促す場の提案ー	高梨 颯斗
○ 共鳴のアーキテクチャ ー環境音と音楽が織りなす環境に開かれた芸術鑑賞の場の提案ー	高橋 昇太郎
○ まざりあう対話 ー神宮前における新たな公共性の空間ー	東野 葉月
まちのかお ー地域住民と観光客に向けた新たな大磯駅周辺の整備計画の提案ー	土志田 佳蓮
★ CAVE STREET 線上の余白 ースラム街の日常に根付く避難タワー及び避難経路の提案ー	仁昌 寺天心
Farmland Community ー開成町における農地を有する住宅地計画ー	能州 歩
隣地建物から広げる公園の活性化 ー相模原市橋本近辺を対象としてー	平井 翼
○ VANILLA SKY ー自然が教え、自然が決める建築ー	古川 拓哉
∞ ○ ー都市公園における共生型社会の実現と防災拠点ー	堀田 和廷
住宅地と商店街をつなぐ近隣商店街施設の提案	村井 和樹
立ち寄る音の溜まり場 ー横浜市保土ヶ谷区星川における演奏施設の提案ー	相川 智美

★ディプロマ賞 ◎優秀賞 ○卒業設計優秀作品発表会発表者

◎ 閑日月 ー瀬戸内海に馳せる自己意識創出の旅のはじまりー	西岡 理子
卒業設計〔設計B〕	
丘ノ上農藝セツルメント ーセツルメント運動の代表的拠点「ハル・ハウス」(1889-1964)の建築群の変遷に関する史的研究をもとにー	井口 力哉
共用空間を中心とした集合住宅群の提案 ー神奈川県宮羽沢グリーンハイツを対象としてー	村山 夢剣
◎ 記録される街並み ー駅前再開発を再考するー ー室ヴォリュームを含む現代住宅作品の構成研究を踏まえてー	棚橋 美槻
共生 ー横浜郊外におけるエコビレッジの提案ー	萩原 脩斗
横須賀市汐入町の谷戸地形における、シーンの連なりからみる坂の構成	横山 凱一

★ディプロマ賞 ◎優秀賞 ○卒業設計優秀作品発表会発表者



学部設計課題 優秀作品

建築デザインⅢ

建築デザインⅡ

建築デザインⅠ

生活空間デザイン演習Ⅰ

まち再生演習Ⅰ

設計製図Ⅱ

設計製図Ⅰ

担当

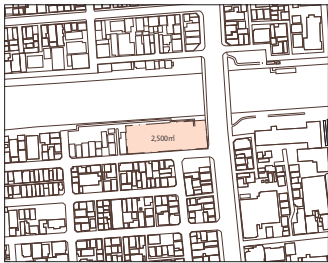
曾我部 昌史(教授)、吉岡 寛之(助教)、岡村 晶義(非常勤講師)、
佐々木 龍郎(非常勤講師)、渡瀬 正記(非常勤講師)

Masashi SOGABE (Professor), Hiroyuki YOSHIOKA (Assistant Professor), Akiyoshi OKAMURA (Guest Lecturer),
Tatsuro SASAKI (Guest Lecturer), Masanori WATASE (Guest Lecturer)

小野 美咲 (M1、TA)、蘇彦伯 (M1、TA)、熊谷 匠 (B4、SA)、嶋岡 礼奈 (B4、SA)、鈴木 迭忒 (B4、SA)
Misaki ONO (M1, TA), Yanabo SU (M1, TA), Sho KUMAGAI (B4,SA), Rena SHIMAOKA (B4,SA), Tetsuji SUZUKI (B4,SA)

第一課題 地域の拠点

地域に暮らす人たちの居場所(地域の居場所)と、観光などで訪れる人たちの拠点的な場(来訪者の拠点)の複合体である。「地域の居場所」では、地域調査をもとに課題や需要を抽出した上で、どのような場をつくるかを各人が構想すること。この先の公民館のあるべき姿を考えることにもなるだろう。「来訪者の拠点」はいわば観光案内所だが、事例調査などをもとに今日の役割を踏まえながら用途をまとめる必要がある。「地域の居場所」と「来訪者の拠点」が単に併設されているのではなく、相互補完的に計画することで、より多様で豊かな活動の受け皿となるよう検討し提案にまとめること。



【設計条件】

敷地：東京都江東区清澄3丁目

用途地域：準工業地域、商業地域

敷地面積：2,500㎡

延床面積は4,000㎡～6,000㎡

(地上部分は3層以上とする)

地下階を設け、地下鉄駅とつなぐこと

第二課題 六角橋地域社会圏

六角橋エリアを舞台に、建築家・山本理顕氏が提唱する「地域社会圏」の考え方にもとづいた居住エリアを設計することを求めた。エリア内に性格の異なる7つの敷地を選定しており、学生3～4人で構成されるグループがいずれかの敷地を担当する。それぞれの地域が有する特性を手がかりに、各敷地に数十人が暮らす個性的な暮らしの場を創出する。そこでの暮らしの仕組みを構想した上で、そのために必要な場を用意することで、自由で持続可能な自治都市が提案されることを期待した。具体的には、複数の戸建て住宅や小さな集合住宅、店舗や屋内外の共用スペースなどがあり、それらを関係づける路地などで構成されるだろう。課題提出時、中間・最終評価では山本理顕氏も参加した。



【設計条件】

敷地：神奈川区六角橋1～3丁目 ほか

用途地域：第一低層住居専用地域、
近隣商業地域 など

敷地面積：5770㎡～7700㎡

非常勤講師 経歴

岡村 晶義
Akiyoshi OKAMURA

1954年生まれ、早稲田大学産業技術専修学校(現早稲田大学芸術学校)卒業、teamzooアトリエモビル及び象設計集団を経て独立、アトリエ鯨を設立、東京理科大学非常勤講師及び法政大学兼任講師を経て現在に至る。日本建築学会作品選奨、土木学会デザイン賞など受賞

佐々木 龍郎
Tatsuro SASAKI

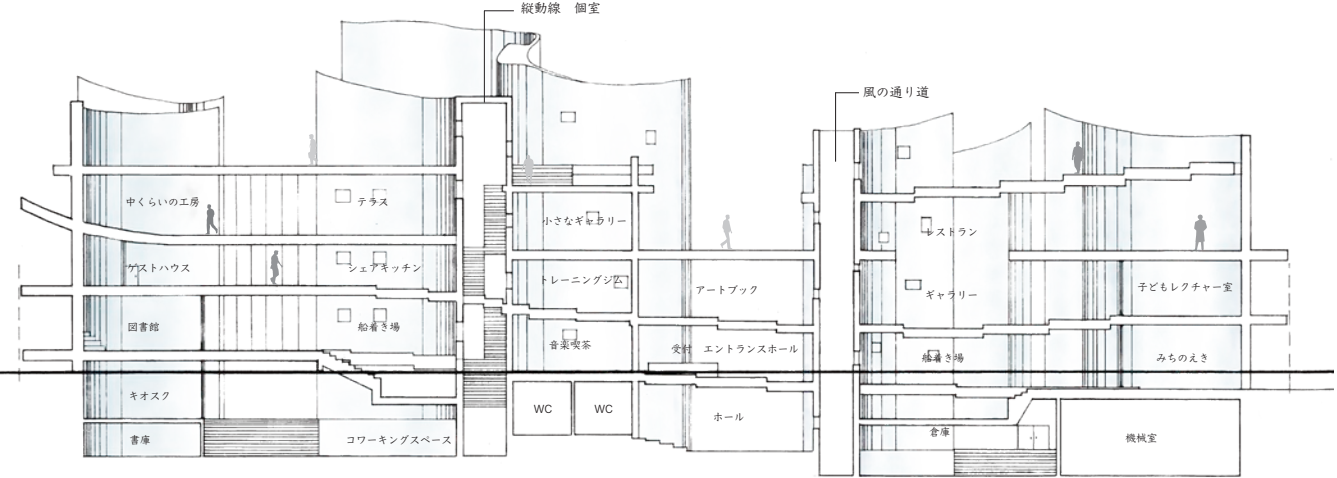
1964年生まれ、1987年東京都立大学工学部建築学科卒業、1989年同大学院修士課程修了、工学修士、1992年同博士課程単位取得満期退学、1992年(株)デザインスタジオ建築設計室、1994年株式会社佐々木設計事務所入社、現在同代表取締役

渡瀬 正記
Masanori WATASE

1968年生まれ、1992年東京工業大学工学部建築学科卒業、1992年妹島和世建築設計事務所勤務、1993年～1997年青木淳建築計画事務所勤務、1998年一級建築士事務所設計室設立

山本 紗也子
Sayako YAMAMOTO

風の道
Path of the wind



清澄白河には、芸術家の交流の場となっているギャラリーが点在している。そこで、この敷地にギャラリーに出展する人たちのための工房を設け、地域の人や訪問者に制作の様子を公開することにした。制作の様子を見てみると、芸術に興味が出てくる。完成していなくても、創作過程の芸術は、私たちに想像をもたらしてくれるだろう。そしてまた、風に乗って私たちの街に、新しい芸術がやってくる。制作をする人も、そうでない人にとっても、居心地がよくて、自然とコミュニティが生まれる。そんな空間が清澄白河にある。



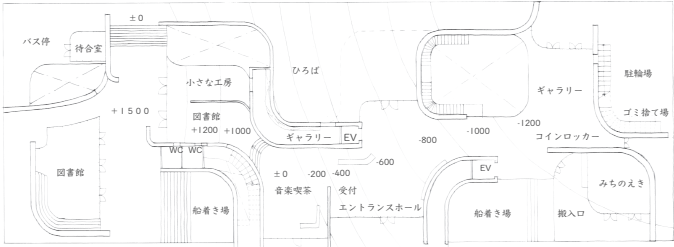
グリッド上にL字壁を配置



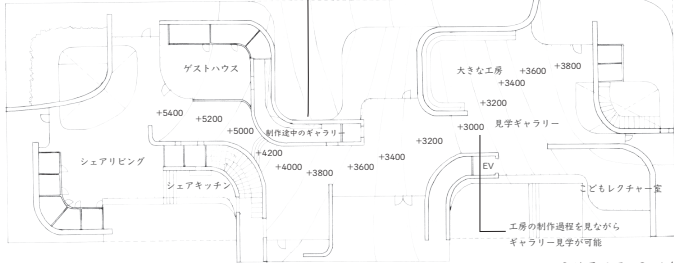
自由に動かす



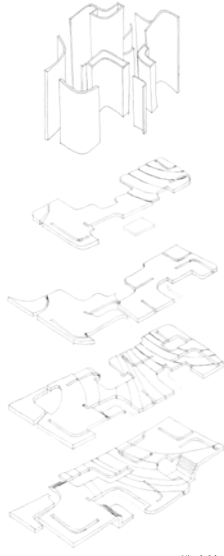
穴をあける、幅を持たせる



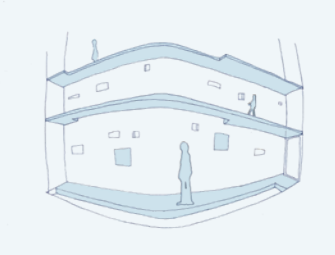
1階平面図 S=1/200



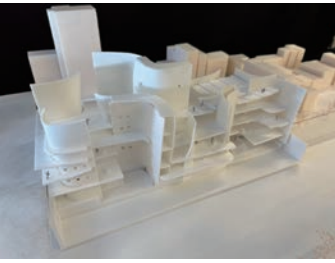
2階平面図 S=1/200



構造計画図

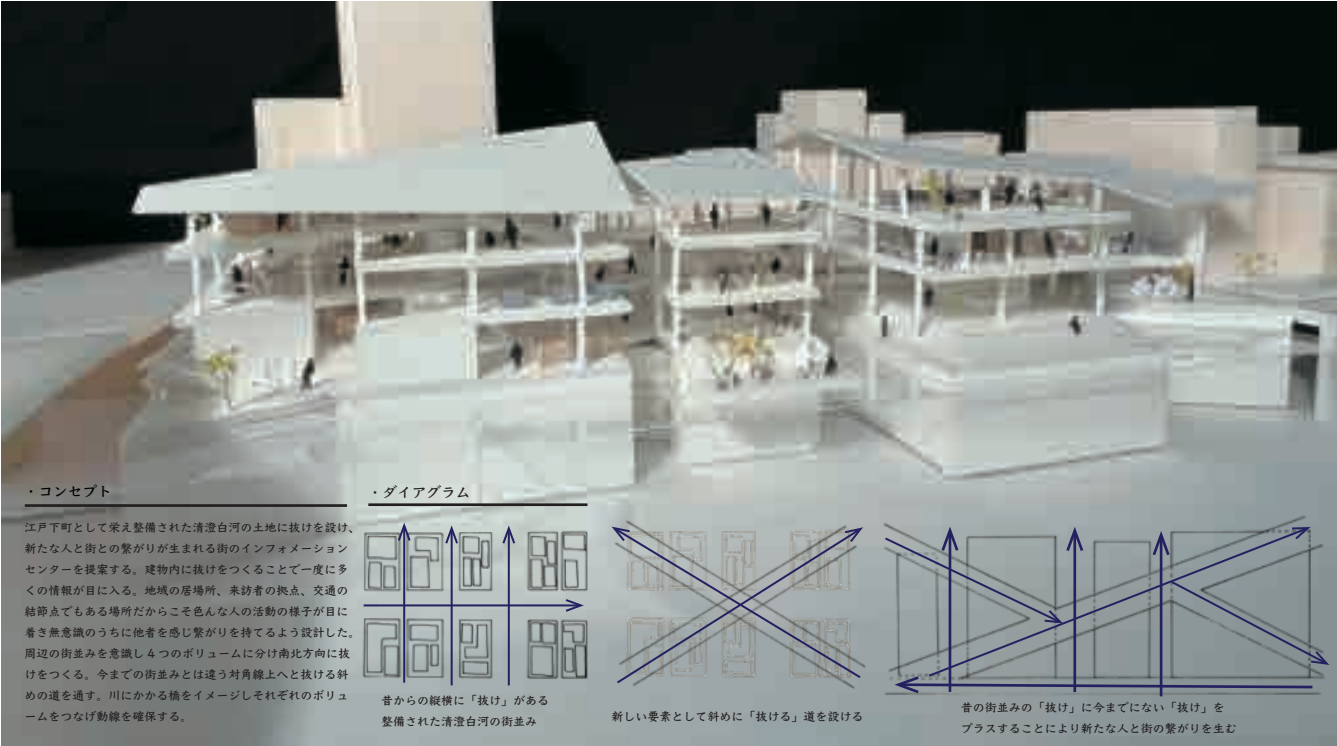


制作途中のギャラリー

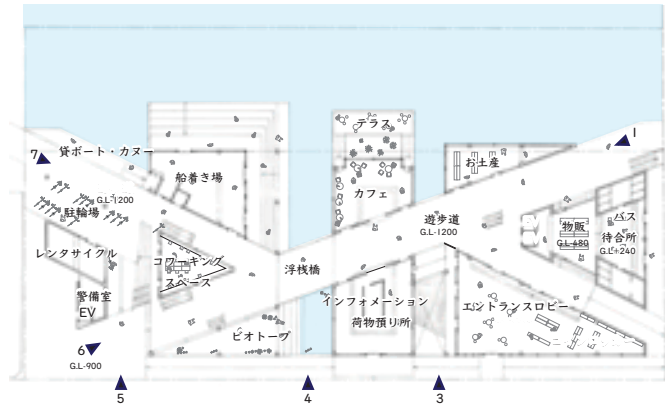


棚橋 愛夏
Aika TANAHASHI

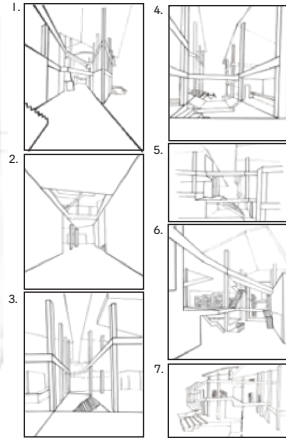
抜けがつなぐ人と街
People and towns connected by omission



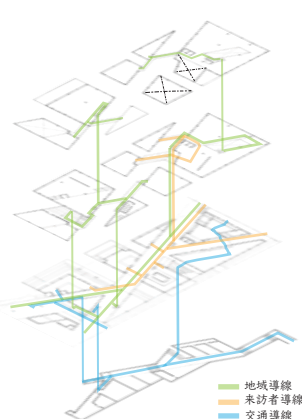
・1階平面図 1/1000



・抜けから見る建物内パース

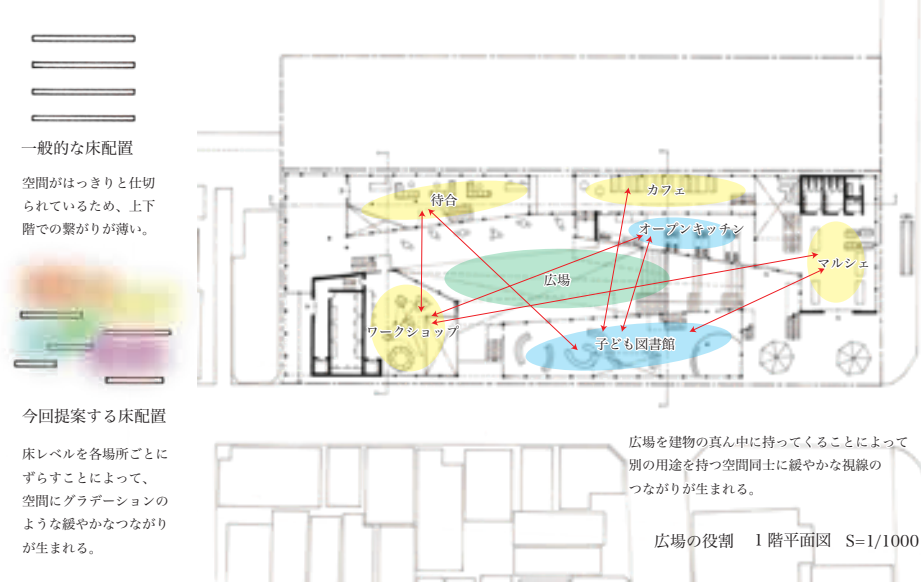


・導線計画図



平賀 奈月
Natsuki HIRAGA

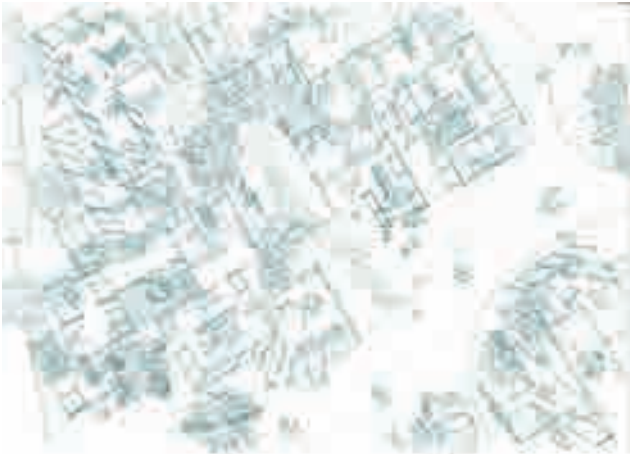
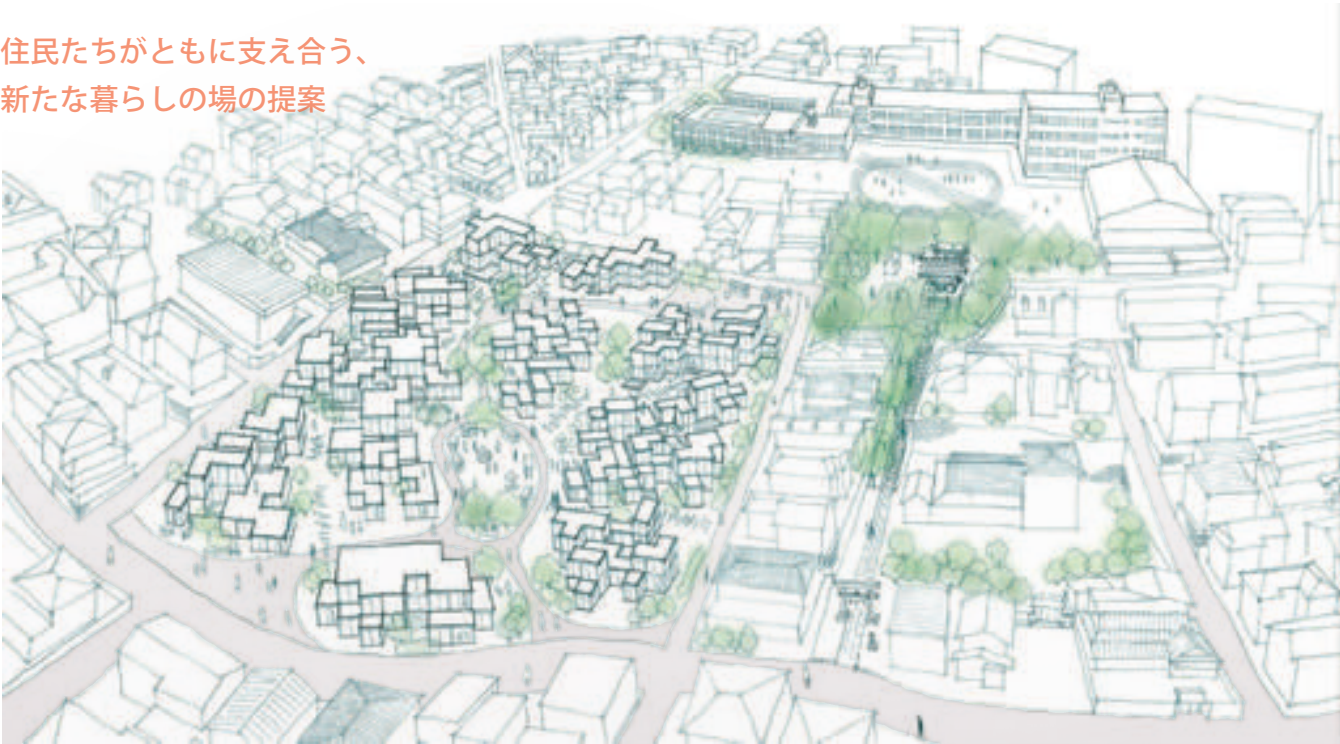
ずれがつくる地域のつながり
Regional connections created by misalignment



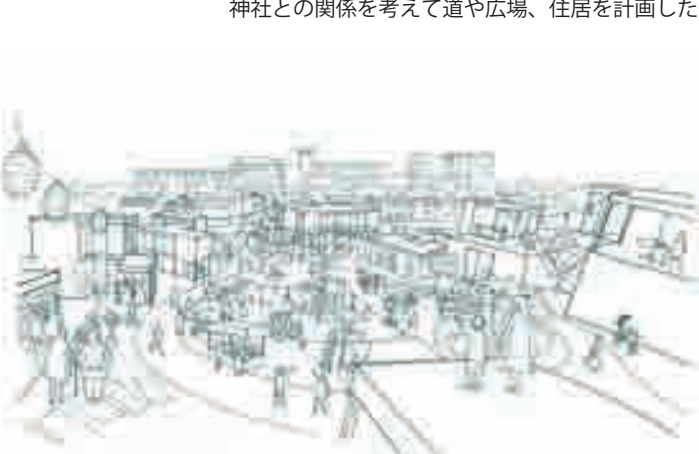
飯泉 逸太/太田 有哉/三村 優菜/宮外 遼太郎
Hayata IIZUMI/Yuya OTA/Yuna MIMURA/Ryotaro MIYAGAI

神社とともに育まれる暮らし
A life unrtured with shrines

住民たちがともに支え合う、
新たな暮らしの場の提案



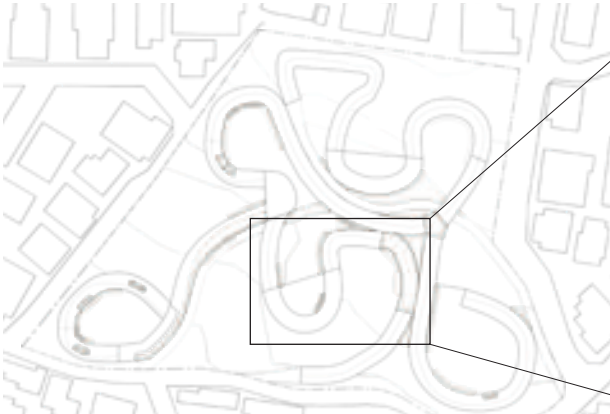
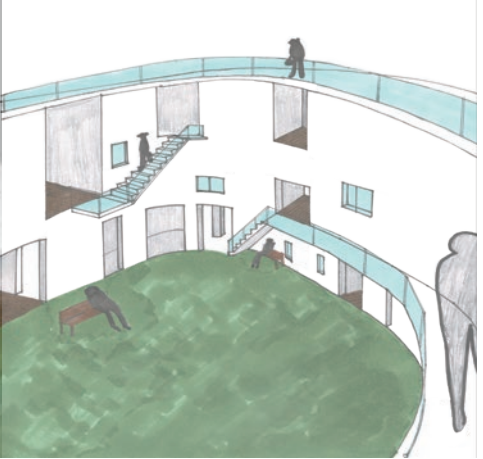
住居はただ住むだけでなく、お店などを開くことができる



広場はお祭りの会場にもなる

遠藤 優真/近藤 舞幸/杉山 来生/山田 来華
Yuma ENDO/Mayuki KONDO/Rao SUGIYAMA/Raika YAMADA

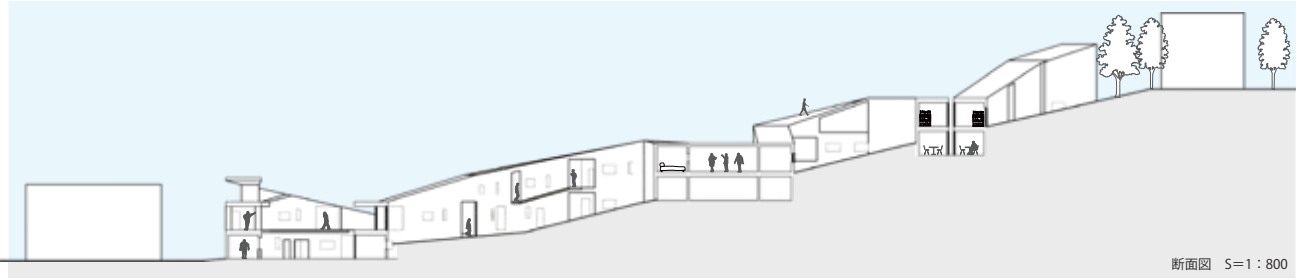
巡る
Circulate



配置図 S=1:1600



9000~12000 詳細図 S=1:500



断面図 S=1:800

担当

六角 美瑠（教授）、スタンリー ラッセル（特任教授）、吉岡 寛之（助教）、鈴木 成也（助手）、
木島 千嘉（非常勤講師）、鈴木 丈晴（非常勤講師）

Miru ROKKAKU (Professor), Stanley RUSSELL (Professor), Hiroyuki YOSHIOKA (Assistant Professor), Naruya SUZUKI (Assistant),
Chika KIJIMA (Guest Lecturer), Takeharu SUZUKI (Guest Lecturer)

伊藤 歩武（M1、TA）、小菅 大雅（M1、TA）、齋川 優香（M1、TA）、高橋 昇太郎（B4、SA）、仁昌寺 天心（B4、SA）、前川 愛結（B4、SA）
Ayumu ITO (M1), Taiga KOSUGE(M1), Yuka SAIKAWA(M1), Shotaro TAKAHASHI(B4), Tenshin NISHOJI(B4), Ayumi MAEKAWA(B4)

第一課題 Hakuraku Synergy Plaza
ー「六角橋ミニシアターコンプレックス」と広場の設計ー

白楽駅前に駅前広場と一体となった積層型のシネマコンプレックスを計画せよ。敷地はかつて白鳥座という映画館があり、近隣地区市民の文化娯楽の一翼を担っていた場所である。近年、映画を取り巻く環境はシネマコンプレックスの隆盛により映画離れに歯止めがかかったように見えるが、一方で渋谷のシネマライズ閉館に代表されるようにミニシアターは徐々にその姿を消しつつあり、映画を鑑賞する環境や映画鑑賞前後の空間体験は均質化しつつある。本課題では気持ちの高まりや余韻を受け止める空間を計画すること。

また、この施設は六角橋商店街の有志による NPO 法人が管理運営を行うものとする。地域の映画コミュニティの交流イベントや、映画制作ワークショップを行う等、映画を上映するだけではない地域の核となる建築をデザインして欲しい。駅前の場所性や商店街との補完関係を考慮し、計画する建築が地域にとってどのような役割を果たすことができるのかを広場を含めて積極的に提案すること。また周辺環境（計画地北側には集合住宅がある）にも十分に配慮すること。

第二課題 地域に開かれた小学校 -学校×公園+α-

現在の二谷小学校と公園を合わせ計画地とし、+αの施設を持ち地域に開く小学校を設計する。

この学校は、地域にとって重要なイベントの場になり、災害時には防災拠点として機能し、地域にとって重要な核となる。地域施設を複合することにより、単独の学校として計画するよりも施設機能が多機能化し、学習環境や地域活動にとって効果的な活用が期待される。地域コミュニティや活動を生むプログラムを計画し、学校の地域社会への役割を考えながら、新しい学校のあり方、デザインを積極的に提案すること。

非常勤講師 経歴

木島 千嘉
Chika KIJIMA

1966年生まれ、1989年早稲田大学理工学部建築学科卒業、1991年東京工業大学大学院修士課程修了、1991年(株)日建建設入社、1999年O.F.D.A associates所属、2001年木島千嘉建築設計事務所設立

鈴木 丈晴
Takeharu SUZUKI

1976年生まれ、1998年東京大学工学部建築科卒業、2000年同大学大学院修了、2000年安藤忠雄建築研究所、2010年京都造形芸術大学非常勤講師、2011年芝浦工業大学非常勤講師、2012年鈴木丈晴アトリエ一級建築士事務所設立

【設計条件】

敷地：神奈川県横浜市神奈川区白楽124

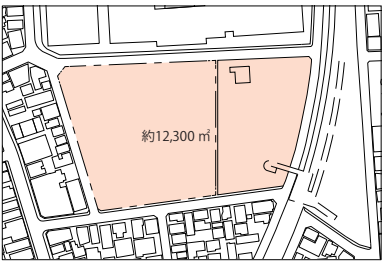
面積：約855㎡



【設計条件】

敷地：神奈川県横浜市神奈川区平川町11-1

面積：約12,300 ㎡



Hakuraku Synergy Plaza ー「六角橋ミニシアターコンプレックス」と広場の設計ー

近藤 舞幸
Mayuki KONDO

広場でつながる
Connecting at the Square



棚橋 愛夏
Aika TANAHASHI

巡り合う
Encounter



古川 朋花
Tomoka FURUKAWA

透明なつながり
transparent connection



山崎 唯人
Yuito YAMAZAKI

積層する外空間
Hakuraku Patio



太田 有哉
Yuya OTA

「流れ」と「溜まり」の交流空間
Flow and Gathering: An Interactive Space



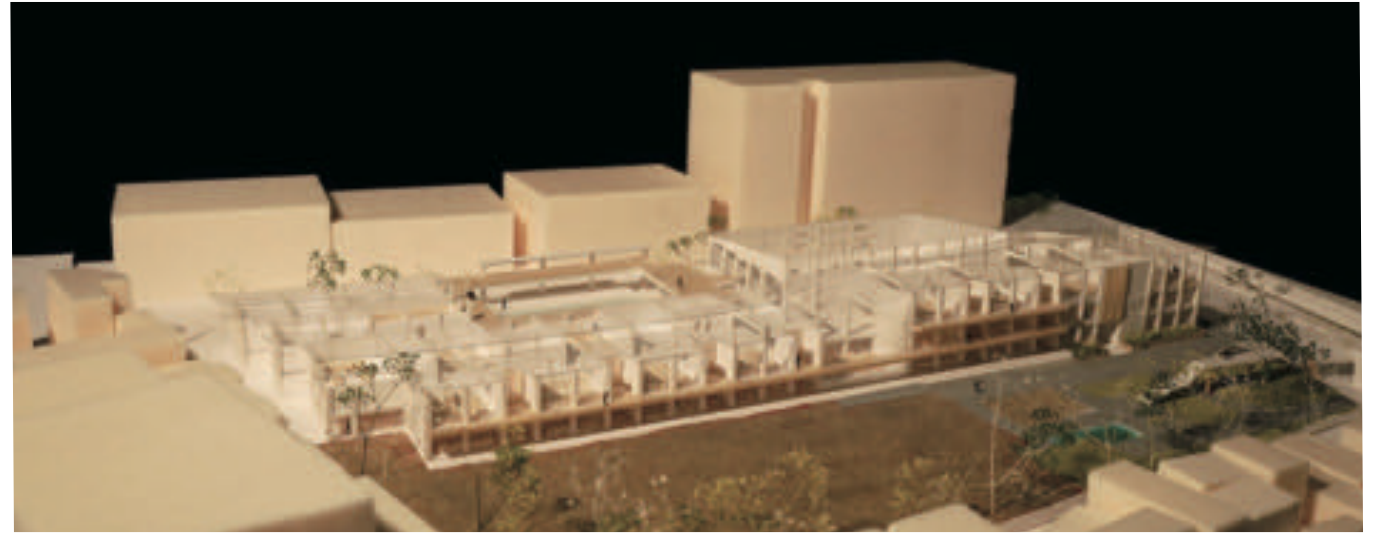
棚橋 愛夏
Aika TANAHASHI

曲面が生む居場所
Curved surfaces create a place



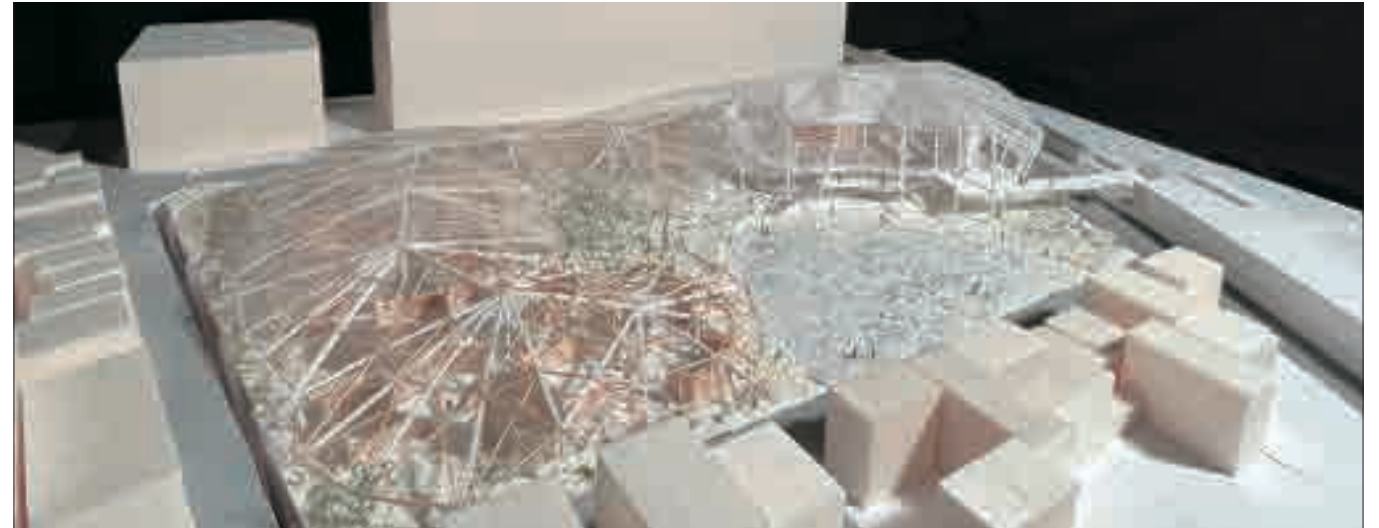
後藤 治
Haru GOTO

おびでできる小学校
An elementary school composed of "Belt"



松野 百花
Momoka MATUNO

掩うーデイサービスと小学校の複合施設の提案ー
Wear - Proposal for a complex of day services and an elementary school -



担当

中井 邦夫（教授）、吉岡 寛之（助教）、鈴木 成也（助手）、川辺 直哉（非常勤講師）、森山 ちはる（非常勤講師）
Kunio NAKAI (Professor), Hiroyuki YOSHIOKA (Assistant Professor), Naruya SUZUKI(Assistant), Naoya KAWABE (Guest Lecturer),Chiharu MORIYAMA(Guest Lecturer)
オイン シャンゲン（M2、TA）、富田 響真(M1、TA）、田中 宏武（M1、TA）、棚橋 美槻（B4、SA）山田 樹飛（B4、SA）
Xian Gen OOI (M1, TA), Kyoma TOMITA (M1, TA), Hiromu TANAKA(M1, TA), Mituki TANAHASHI(B4,SA), Mikito YAMADA (B4, SA)

非常勤講師 経歴

川辺 直哉
Naoya KAWABE
1970年神奈川県生まれ、1994年東京理科大学工学部建築学科卒業、1996年東京芸術大学大学院修士課程修了、1997～2001年、石田敏明建築設計事務所、2002年川辺直哉建築設計事務所設立、現在東京理科大学、東京電機大学、昭和女子大学にて非常勤講師

第一課題 まちのエコ・ミュージアム

「エコ・ミュージアム」とは、まちそのものを展示対象と考える博物館のことで、一般的には、情報センターや交流の場となる拠点（コア）、現地の展示物（サテライト）、コアとサテライトをつなぐルート（ディスカバリー・トレイル）から構成される。本課題では、神奈川大学周辺のまちに見つけられるユニークなテーマを各自が設定し、それに基づくエコ・ミュージアムを計画する。

テーマに関連する展示物やルートを自ら発見、設定するとともに、拠点となるコア施設を設計することを求める。

■ステップ1) 企画と調査（テーマと展示物候補の設定）
神奈川大学周辺地区（六角橋、白楽、斎藤分町、栗田谷、神大寺など）の歴史、地形、現状等について、文献や取材などで調査し、その特徴を理解する。 エコ・ミュージアムの考え方や事例について調べ、自分が面白いと思う、独自性のあるテーマを最低1つ定め、そのテーマに沿う「展示物」候補を5件以上決める。

鈴木 紗来
Sara SUZUKI

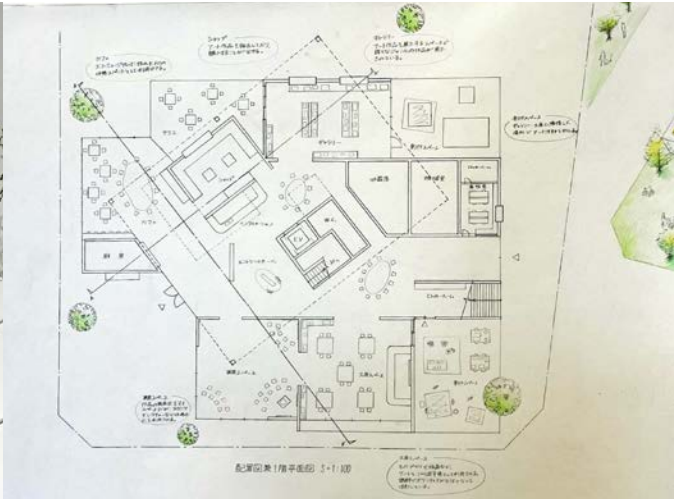


森山 ちひろ
Chiharu MORIYAMA
東京都生まれ、2003年日本女子大学政学部住居学科卒業、2005年東京工業大学大学院理工学研究科建築工学科修了（坂本研究室）、2005年-2011年、伊東豊雄建築設計事務所、2012年、日本大学生産工学部建築学科デザインコース非常勤講師、2014年、アトリエHIMC設立、2019年-、サイドバイサイド一級建築士事務所

■ステップ2) 基本構想（ルート、コア敷地、プログラムの設定）
展示物を巡るルートと、コア施設の敷地も設定する。できる限りオリジナルな視点によるテーマが望ましい。
コア施設のプログラム（用途や使い方など）を考える。各自のテーマに相応しいプログラムを自由に考えること。ただし企画内容によっては、展示物やルート（ディスカバリー・トレイル）などに、プログラムを設定してもよい。

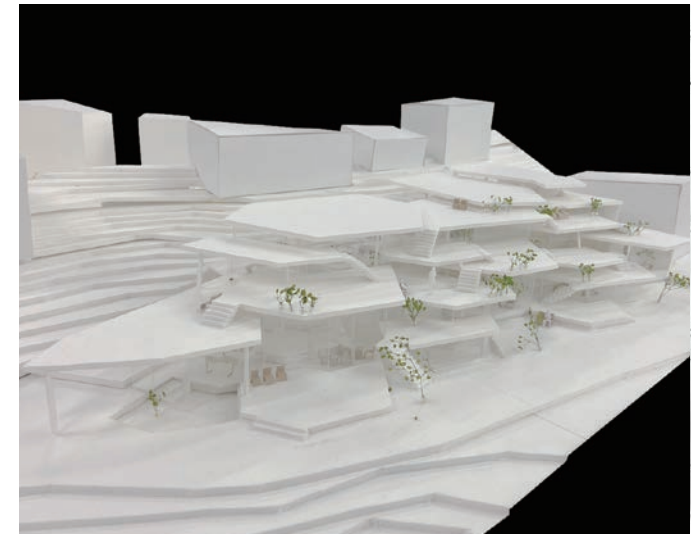
■ステップ3) 設計（コア施設を中心とした全体の設計）
基本構想に基づいて、コア施設を中心とした具体的な設計を行う。
自分で定めたテーマに相応しい建築デザインを考え、（コア施設も展示物のひとつ）エコ・ミュージアムの主旨を理解し、既存の施設や道路、街区内の通路や外部空間などとの関係や接続を考慮し設計を行うことを求める。
施設が閉まっているときでも、地域の人々の居場所となる空間をつくり、コア施設以外の、ルートとなる道や展示物周辺もできる限りデザインする。

まちで楽しむアトリエミュージアム
Enjoying the Atelier Museum as a Community



まちのエコミュージアム

皆川 真飛
Masahi MINAGAWA



ざんねんものテラス
unfortunate things terrace

東海林 真衣
Mai SHOJI



まるごと植物園
Whole Botanical garden

白取 夢叶
Yuto SHIRATORI



地形に魅せられて
Fascinated by the terrain



関原 希紗
Kisa SEKIHARA

植物の気持ち~視覚誘導による設計~
Plant feelings Design with Visual leading



吉田 瑞樹
Mizuki YOSHIDA

暗渠巡り
culvert tour



井藤 一真
Kazuma ITO

形はそのまま ~六角橋まちづくりセンター~
The shape remains the same
~ Rokkakubashi Town Development Center ~



品川 万由子
Mayuko SHINAGAWA

共存
Live together



立石 隆真
Ryuma TATEISHI

伝承~昔から受け継がれる建築の技術~
Tradition ~Architectural techniques that have been passed down from ancient times~



吉岡 里紗
Risa YOSHIOKA

壁柱に寄り添う
Leaning against the wall pillar



担当

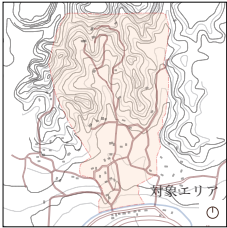
須崎 文代 (准教授)、印牧 岳彦 (助教)、武田 清明 (非常勤講師)
Fumiyo SUZAKI (Associate professor), Takahiko KANEMAKI (Assistant professor), Kiyooki TAKEDA (Guest Lecturer,)
三井田昂太 (M1、TA)、森田泰正 (M1、TA)、井口力哉 (B4、SA)
Kouta MIIDA (M1, TA), Taisei MORITA (M1, T A), Rikiya IGUCHI (B4, SA)

非常勤講師 経歴

武田 清明
Kiyooki TAKEDA
1982年神奈川県生まれ、2007年イーストロンドン大学大学院修了、2008年隈研吾建築都市設計事務所勤務、2019年武田清明建築設計事務所設立、2022年住宅建築賞受賞、日本建築学会作品選集新人賞受賞

設計課題 1 ○○のための小屋

自然豊かな里山に囲まれた、釜沼集落のなかに「小屋」を設計する。いわゆる現代社会をかたちづくっている法制度や経済システムにとらわれず、地勢や既存の植生など土地のポテンシャルを読み取って、どのような場所に、何のための、どんな小屋を建てるのか、という問題設定から考える。
「○○」は動物でも微生物でも物（ただし自然物とする）でも構わないが、人間と「○○」がその小屋を共用/共存することを念頭に置くこと。



設計課題 2 時間と建築

築35年の戸建て住宅のリノベーションの提案を行うこと。もともとハウスメーカーによって建設されたこの住宅は、1階の一部に店舗（洋裁店）部分を持つ二世帯住宅として使われていた。現在は空き家となっているこの住宅に手を加えることで、これまでに建物に蓄積されてきた過去の時間の流れや、これから25年後、50年後の変化のプロセスを意識しつつ、新旧が混在した建築のあり方を考えること。リノベーション後の用途としては、住宅+αの組み合わせを基本とする。



保坂朱乃



自然工房

Nature studio

異相惣太



春秋の小屋

Spring and Autumn Hut

甲斐陽向



竹

Bamboo

吉田圭佑



発酵～compost～

Fermentation ~compost~

保坂朱乃



安心を紡ぐ

Spin

吉田小梅



本棚のcommons

Bookshelf Commons

甲斐陽向



変化する余白

Changing margins

異相惣太



孤と輪

Solitary and Wheel

吉田圭佑



猫≥人

Cats≥People

菅沼菜月



まちの食卓

Dining in the Town

担当

上野 正也（准教授）、柏原 沙織（特別助教）、藤原 ちから（非常勤講師）
Masaya UENO(Associate Professor), Saori KASHIHARA (Assistant Professor), Chikara FUJIWARA(Guest Lecturer)
長谷 莉奈（M1、TA）、山下 由聖(M1、TA)
Rina NAGATANI(M1, Teaching Assistant), Yusei YAMASHITA (M1, Teaching Assistant)

演習のプロセス

2023年度から新しく始まった「まち再生演習I」は、まち再生コース2年次後期の演習である。都市空間調査の演習として、調査に関する基礎的な知識について理解を深めるとともに、学内外にてフィールドワークを行う。フィールドワークでは、現地でしか得られない情報の「採集」からはじまり、得られた情報の「分類・分析」を経て、その空間や都市の構成・構造について「発見」する。また、都市の様相を表現（リプレゼンテーション）する手法について学ぶ。さらには、都市にまつわる様々な表現（テキスト・映像・アート作品等）に触れることで、鋭敏な感性を養う。これら体験的な学習を通じて、都市空間や環境を読み解く力や技術を習得するとともに、他者との協働を通じて創造性を育むことを目指している。

第一課題
私の空間+キャンパス周辺のフィールドワーク

キャンパス内において、「私の空間」を見つけてプレゼンテーションする。そこでは「私の空間」とは何なのか、定義とともに説明することが必要である。また、記憶や過去の私の体験はなるべく排除し、今・現在において私というフィルターを通じて認知する／知覚する空間について、つぶさに観察することを求める。単に「心地よい」や「落ち着く」という感覚だけではなく、私という身体が空間にアンカーされる場所を見つけて具体的に指し示し、その空間の特徴を伝えることを求める。決して拡大解釈することなく、ありのままの目の前にある空間を捉えるように努力すること。

プレゼンテーションにおいては、文章は入れず、単語と図で説明ができるようにする。発表する時は、それら図を指し示し、そこに書いてあることを話すようにすること。口で補うことなく、図やスケッチなどの表現で伝えることを求める。なお、全てを説明しようとするあまりに、何でも描こうとする必要はなく、本当に自分が知覚している情報のみ入れる。また、身体スケールを活用して説明を行う。

第二課題
六角橋Research & Proposal

第2課題のグループワークでは、第1課題で学んだ先入観を排して空間をつぶさに見るというフィールドワークの手法、空間の読み取り手法をさらに深め、新しい空間の表現を求める。六角橋周辺の対象エリア内すべての道を歩いてフィールドワークを行い、空間の様相をビジュアライズする。愚直な観察から膨大な量のプロット図を作成し、それらの情報を編集・抽象化した上で、新たな視点で再び地図に落とし込む。最後に個人ワークとして、グループで読み取った空間の様相を変化させるための、何らかのデザイン提案を求めた。

非常勤講師 経歴

藤原 ちから
Chikara FUJIWARA

立教大学法学部政治学科卒業。知的障害者の働く地域作業所、都市デザインのコンサルタント会社、出版社での編集者勤務等を経てフリーランスとなり、演劇批評家としての活動の後、現在はアーティストとして横浜を拠点に国内外で活動している。2014年から遊歩型ツアープロジェクト『演劇クエスト』を、横浜、城崎、マニラ、デュッセルドルフ、安山、香港、東京、バンコク、ローザンヌ、マカオ、妙高、マカンダ、高槻、ミラノで展開してきた。また台北で開催されたADAM2017では、多国籍のアーティストたちと『IsLand Bar』を考案。2019年からは住吉山実里とアーティストコレクティブorangcosongを結成。境界を越える人々の移動や滞留によって生じる「モビリティ／グラヴィティ」や、人々を分断して差別や偏見を生み出している「見えない壁」をテーマに活動している。コロナ禍以後は特に、人々が集ってコミュニケーションを交わし合える場をオンサイト／オンラインで創出することにもフォーカスしている。書籍『演劇最強論』（徳永京子との共著、2013）、『町を旅する道具箱』（2023）。セゾン文化財団シニア・フェロー（2017-2020）、文化庁東アジア文化交流使（2017）。



自分の体で測れるスケールを知る



キャンパス内の「私の空間」フィールドワーク



授業では毎回発表



リサーチのまとめ中間発表



つぶさに観察した空間の様相を地図に落とし込む



緑を種類別にプロットしてみる



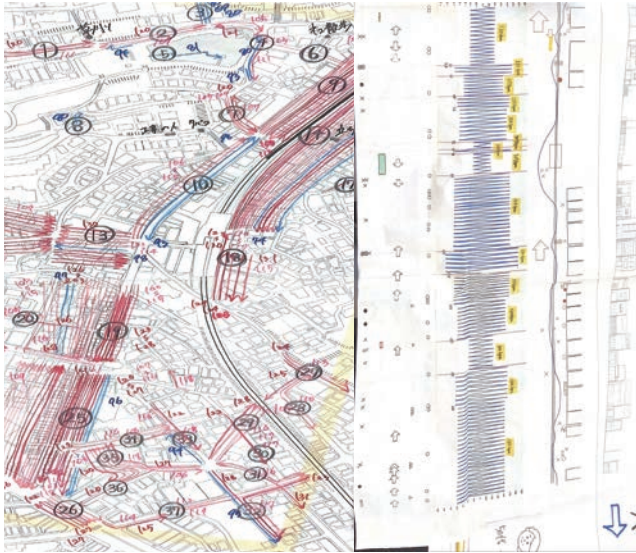
15歩ずつ歩いて前方と後方の写真をひたすら撮る



最終講評会では貼り切れない量の成果物で発表

齋藤 柊斗/中村 日南
丸山 桂詩/新倉 歩乃佳
Shuto SAITO/Hina NAKAMURA/Keishi MARUYAMA/Honoka NIHKURA

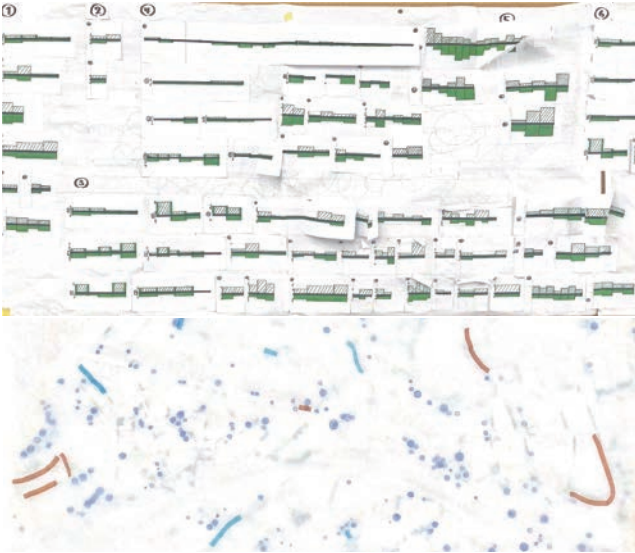
白楽音楽会
Hakuraku Concert



商店街を通る人の歩くテンポをbpmに変換して波形で表した。テンポの乱れを引き起こす空間的特徴も合わせて示し、多様な人のテンポが重なる音楽会に見立てた。

牧山 裕哉/山田 颯生
田中 智揮
Yuya MAKIYAMA/Satsuki YAMADA/Tomoki TANAKA

全緑調査
"All-green" research



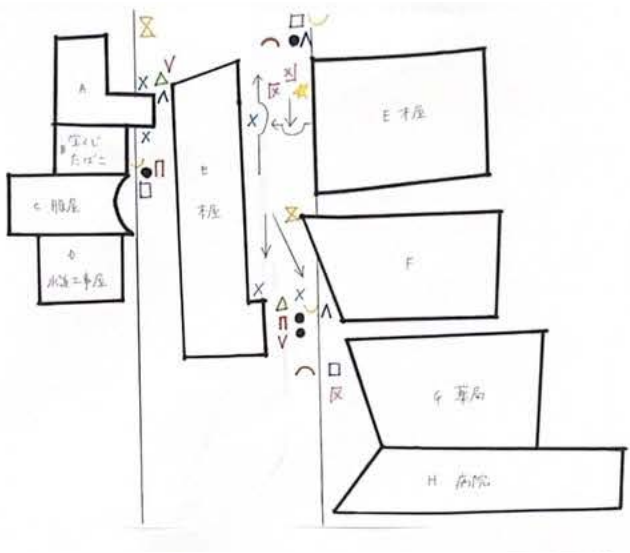
50本以上の通りそれぞれについて、視界の中の緑量を目線より上・下で分けてグラフ化し、シークエンスの中で体感緑量の推移を示した

福山 愛果

Manaka FUKUYAMA

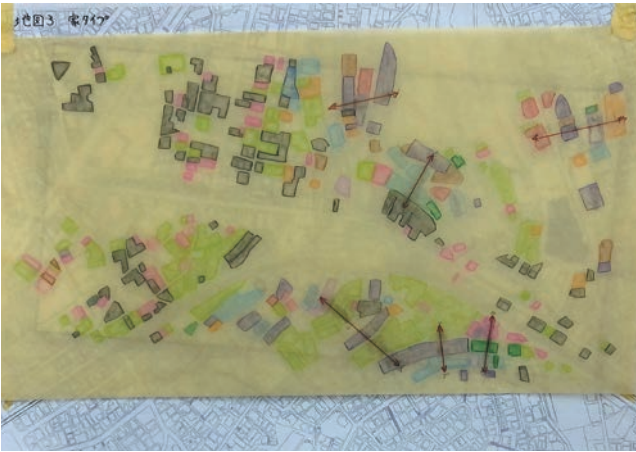


不規則な障害物を持つ商店街
Shopping street with irregular obstacles



小関 空明
佐藤 きらら
鈴木 陽麻里
Akua KOSEKI/Kirara SATO/Himari SUZUKI

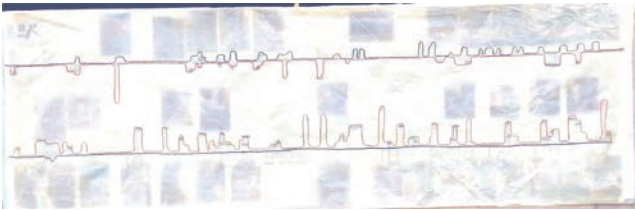
家タイプから見える地形
The landscape visible from the house type



住宅へのアプローチ、擁壁の有無、駐車場との関係を分類。それらを地図に落とし込むことで、住宅の建ち方から地形を浮かび上がらせた。

越阪部 日毬
市田 海月
小林 里咲
Himari OSAKABE/Mizuki ICHITA/Risa KOBAYASHI

はみだしてもよろしいんで商店街
It's okay to jut out Shopping Street



六角橋商店街の路上に滲み出ているものと距離をプロット。はみ出しを誘発するインジケータートと、各店舗による領域の拡張を可視化した。

久保 綾乃

Ayano KUBO



眺めの階段
Stairs for a view

敷地

★ テイクアウト可の飲食店

白楽駅周辺ではテイクアウトのできる店が増加傾向にある。買ったものを屋外で食べるスペースとしても活用できる。



担当

中井 邦夫 (教授)、曾我部 昌史 (教授)、野村 和宣 (教授)、
立花 美緒 (准教授)、姜 明采 (助教)、菊井 悠央 (助手)、
井原 佳代 (非常勤講師)、山下 貴成 (非常勤講師)、濱口 光 (非常勤講師)
Kunio NAKAI (Professor), Masashi SOGABE (Professor), Kazunari NOMURA (Professor), Mio TACHIBANA (Associate professor), Myunghae KANG (Assistant professor), Hisahiro KIKUI (Teaching Associate), Kayo IHARA (Guest Lecturer), Takashige YAMASHITA (Guest Lecturer), Hikaru HAMAGUCHI (Guest Lecturer)

黄 翼 (M2, TA)、オイン シャンゲン (M2, TA)、富田 響真 (M1, TA)、田中 宏武 (M1, TA) 小野 美咲 (M1, TA)、三井田 昂太 (M1, TA)、山下 由聖 (M1, TA)、棚橋 美楓 (B4, SA)、上田 万葉 (B4, SA) Ji HUANG (M2, TA), Xian Gen OOI (M2, TA), Kyoma TOMITA (M1, TA), Hiromu TANAKA (M1, TA), Misaki ONO (M1, SA), Kouta MIIDA (M1, TA), Yusei YAMASHITA (M1, TA), Mituki TANAHASHI (B4, SA), Kazuha UEDA (B4, SA)

設計課題1 地域とつながる集合住宅

住宅地内の敷地に、様々な世代の居住者が、ともに住む集合住宅を設計する。敷地は、四周が道路に面する三角形の区画であり、公園のそばに立地し、商店街にも近い。地域との関連性を意識して、敷地周辺の条件を最大限に活かしながら、この場所に住む様々なタイプの世帯の生活像を具体的にイメージすると同時に、個性の異なる複数の居住者が住む集合住宅ならではの楽しい提案・空間を求める。

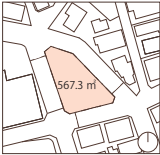
【設計条件】

敷地：神奈川区西神奈川3-9-16

地域：市街化区域、第一種住居地域、防火地域：準防火地域

構造形式：鉄筋コンクリート・壁式構造

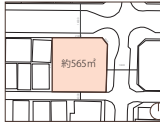
敷地面積：567.3㎡ 建ぺい率：70％ 容積率：200％



設計課題2 関内に建つオフィス

横浜市関内地区にオフィスを計画せよ。

近年、まちに開く建築が話題となっている。住宅の一部を交流の場やまちかど図書室とする「住み開き」、集合住宅の共用施設を居住者だけでなく地域にも開放する、小学校に地域施設を併設する、など。これらはこれまでコミュニティ施設が担ってきた機能を、それ以外の施設が地域と部分的にシェアすることで、自らの機能をより充実させるものである。コミュニティ活性化を図るとともに、それぞれの生活の豊かさにもつながる方向性と言える。オフィスはセキュリティの観点から、入り口にゲートを設けるなど、どちらかというと閉じていく傾向にある。しかし、オフィスもまた開くことによって、イノベーションを起こすことが期待されている。ここでは、空間的にもプログラムのにも、社会、地域に対して開かれたオフィスの提案を求める。



【設計条件】

敷地：神奈川県横浜市中区住吉町3丁目敷地面積：約565㎡ 建ぺい率：80％ 容積率：700％

鈴木 沙来

Sara SUZUKI

結ぶ

Connect



地域とつながる集合住宅

保坂 朱乃

Ayano HOSAKA

いこい

Oasis



井藤 一真

Kazuma ITO

ジュウニントイロ～通路に溢れる住人の暮

Various colors of inhabitants

~The lives of residents spill out into the hallways~



皆川 真飛

Masahi MINAGAWA

屋根でつながる家と心

Home and heart connected through the roofsss



秋田 爽空

Saku AKITA

傘

Umbrella



東海林 真衣

Mai SHOJI

重なり、つながり、

Overlap, connection,



皆川 真飛

Masahi MINAGAWA

見上げる見下ろす

Look up, look down



関原 希沙

Kisa SEKIHARA

ずれ

Composition of space created by displacement



菅沼 菜月

Natsuki SUGANUMA

虫食い

Full of holes



吉田 小梅

Koume YOSHIDA

街のショーケース

city showcase



山田 颯生

Satsuki YAMADA

REMAKU

Remaku



鈴木 紗来

Sara SUZUKI

つなぐ

Hook Up



担当

山家 京子(教授)、鈴木 信弘(教授)、六角 美瑠(教授)、姜 明采(助教)、
印牧 岳彦(助教)、鈴木 成也(助手)、井原 佳代(非常勤講師)、
岡田 雅人(非常勤講師)、古谷 洋平(非常勤講師)

*Kyoko YAMAGA (Professor), Nobuhiro SUZUKI(Professor), Miru ROKKAKU (Professor),
Myungchae KANG(Assistant professor), Takahiko KANEMAKI (Assistant professor),
Nariya SUZUKI(Assistant), Kayo IHARA (Guest Lecturer),Masato OKADA(Guest Lecturer),
Yohei FURUYA (Guest Lecturer)*

兼田 聖人 (M2、TA)、篠原 光汰 (M2、TA)、関川 吹雪 (M2、TA)、伊藤 歩武 (M1、TA)、
小菅 大雅 (M1、TA)、斎川 優香 (M1、TA)、濱 大智 (M1、TA)、勝又 智代 (B4、SA)、
村井 和樹 (B4、SA)、平井 翼 (B4、SA)
*Masato KANEDA (M2,TA), Kota SHINOHARA (M2,TA), Fubuki SEKHARA(M2,TA), Ayumu Ito(M1,SA), Taiga KOSUGE(M1,TA),
Yuka SAKAWA(M1,TA), Daichi HAMA(M1,TA), Tomoyo KATUMATA(B4,SA), Kozuki MURAI(B4,SA), Tsubasa HIRAI(B4,SA)*

授業内容

- | | |
|--|----------------------|
| 1) ガイダンス：「水道道の家」出題・説明 | 5) 設計課題1：敷地模型作成 |
| 2) トレース課題1：「水道道の家」(設計：鈴木 信弘)
意匠図 (1/50) | 6) 非常勤講師：古谷洋平 レクチャー |
| 3) 模型課題1：「水道道の家」(設計：鈴木 信弘)
軸組模型 (1/50) | 7) 設計課題2：(下記参照) |
| 4) 設計課題1：(下記参照) | 8) 設計課題2：敷地模型作成 |
| | 9) 非常勤講師：井原佳代 レクチャー |
| | 10) 非常勤講師：岡田雅人 レクチャー |

設計課題1 クラインガルテン（市民農園）に建つ
「小屋」のデザイン

横浜市神奈川区神大寺の農業専用地域内の一画を借りて、小さな「小屋」を建てること。隣接する畑・菜園にて収穫した野菜を使って調理し、食事を楽しむ場所であり、季節を感じながら過ごす、理想の小屋を設計すること。

- 【設計条件】
- ・道路沿いに広がる農地の一画、15m×8m の範囲を計画地とする。
 - ・農地には緩やかな傾斜があるが、計画地は道路を基準として平坦とみなしてもよい。
 - ・小屋の面積一屋根の掛かる面積に制限はない。
 - ・キャンプ程度の設備による炊事・食事ができる空間を考える。
 - ・屋根は木造（線材による架構）とし小屋組を見せるので屋根面（野地面）は作らない。
 - ・そのほかの壁・床などは自由。（基本的に平屋とする）



大橋 みま

Mima OHASHI

繋ぐテント

connect tent



水野 奈苗

Nanae MIZUNO

Shade of Tree

Shade of Tree



伊佐 恩雅

Una ISA

向こう側が見える家

House with a view of the other side



加藤 花

Hana KATO

あう

make new connection



大西 甘夏

Kanna ONISHI

街並みのマトリョーシカ

Matryoshka in the cityscape



照沼 モナ

Mona TERUNUMA

くつろぎの屋根の家

relaxing roof house



建築デザインⅢ

第一課題は、昨年度まで第二課題としてグループで取り組んでいたものである。地域の人たちと来訪者の両者が関わる居場所であり、複雑な交通の結節点でもある。例年同様、そうした課題を空間構成で応えるものが多かった。棚橋さんは周りの街との繋がりから、平賀さんは内部での場の連携を元に、そうした課題に応え、特徴的な空間構成を得た。山本さんの提案はそうしたものは異なる。構造や動線の計画も同時に解くことができる空間構成の仕組みをつくりだした。他の計画や条件でも応用可能な、印象深い提案となった。

今年度は第二課題を変更した。六角橋を舞台に、山本理顕氏が提唱する地域社会圏の考えにもとづいた居住エリアを構想する、というものである。性格の異なる 7 つの敷地を用意した。初日に全てを歩き、それぞれの関心に従ってグループ分けを行った。O班は、小さく分節した四角いヴォリュームが連なり、隣接する神社の外部空間を敷地に引き込んだ。M班は、敷地全体をうねるように巡る細長いヴォリュームが、ひときわ大きな高低差を解消しながら外部空間を分節した。他にも、隣接する農地に反応して住居を地下に埋め農地を広げたり（A班）、敷地の長さを活かしたつづら折りのスロープで全体を関係づけたり（K班）、点在する多様な体験の場で全体を統合したり（P班）と、敷地や周辺のように上手く反応しながら、特徴的な暮らしの様子を想起させられる提案に辿り着いた。（曾我部）

建築デザインⅡ

本授業は、建築デザインⅠ～Ⅲの一連の学びの中で中間に位置し、これまでの基礎課題に比べ計画力・構想力が求められ、敷地規模も大きくなるため構築力も磨く必要がある。また、デザインという視点では、コンセプトやダイアグラムを明確にして、最終的に魅力的な建築空間に昇華させるという目標に向かってほしいと思っている。

第一課題は、白楽駅前に積層型のシネマコンプレックス課題を設定している。タイトル

を「Hakuraku Synergy Plaza」に意図的に改名した。「シナジー」をキーコンセプトに、ブラックボックスのシネマホールの計画を重視するのではなく、その周辺で起こる人々との交流やイベントや学びなどの活動が相互作用して展開することを視野に人々が集う活気ある場を生み出す複合施設を設計することに目標をおいた。学生作品では、立体的な動線と共に交流の場が設定されている案や外部空間を活動の場としてうまく利用している案などが示された。

第二課題は、公園と一体化した地域施設を持つ小学校の課題を設定している。学校が周辺環境と関係を持ちながら活動の場として地域に開くことを目的としている。残念ながら小学校に足し算的に地域施設を組み込む設定に留まってしまった提案が多かったように思う。地域施設というプログラムを核に小学校を解くことは例年なかなか難しいようだ。ただ、学生作品を見ると、公園環境と呼応した大らかな建築が立ち現れていることは良かったと思う。（六角）

建築デザインⅠ

本科目は、小・中規模の施設の設計課題を通して、建築を成立させる計画およびデザインの基礎を学ぶことを目的とする。とくに与えられた課題に対する独自のテーマを見つけ、配置計画やゾーニング、動線計画、構造・工法の選択などを通して、そのテーマを建築化するプロセスを身につけ、さらに設計意図を表現するプレゼンテーション技術について修得することを目指す。ただし本年度は、これまでの課題がやや施設設計演習的な内容に偏りすぎなのではないかという反省のもと、上記の目的のなかでも、とくに前半の「テーマをみつけること」および「テーマを建築化するプロセス」に重点を置くこととし、実験的に半期をかけて 1 つの設計課題「エコ・ミュージアム」を課した。授業は、1）大学周辺地区において、ある特定のテーマと「展示対象」を自ら設定すること、2）展示対象を巡る「ルート」を設定すること、3）拠点となる「コア施設」を設計し、最終的にエコ・ミ

ュージアムの全体像をデザインすること、という 3 つのステップに沿って進めた。授業運営では、とくにテーマや展示対象を見つける過程において、教員と学生、および学生間のディスカッションに割く時間を例年よりも長く確保した。敷地も用途も指定がない課題に、学生たちも当初は戸惑ってはいたが、最終的には多くの学生たちが独自のテーマに基づく提案を完成させた。一方で、具体的な建物の設計や図面制作の時間をもう少し確保する必要があるのではという教員間からの指摘もあったので、今後の授業に活かしたいと考えている。（中井）

生活空間デザイン演習Ⅰ

「生活空間デザイン演習Ⅰ」は本年度より開講されたあたらしい設計演習科目である。非常勤講師に若手気鋭の建築家である武田清明先生を迎え、毎回積極的なエスキースチェックに取り組んだ。

授業では大きく 2 つの設計課題が設けられている。第 1 課題のテーマは「〇〇のための小屋」で、房総半島の里山（鴨川市釜沼）に建てる小屋を設計する課題である。前提として設定された敷地に設計するのではなく、建築する場所選びから始め、「建てる」という根本から考えることが意図されている。すなわちその建築（小屋）を建てる場所の地形、風や水の流れ、周辺環境のなかでの位置、そこで想定される身体の使い方と環境との連関について検討し、建築（小屋）のかたちへと展開させるスタディである。

第 2 課題のテーマは「時間と建築」で、街中（横浜市内）に建つ某ハウスメーカー設計の店舗併用住宅のリノベーション設計である。デザインにおいては、簡単な実測調査を実施したうえで、何を残し、何を改修・改築するのか、さらに数十年後にはどう変化するかという課題の発見と更新のデザインに取り組むことを課題とされた。また、第 1 課題のコンセプトを参照して居住者以外の「〇〇(何か)」との共生もデザインに含むこととされた。いずれも非常に意欲的で、あたらしい建築のあり方として興味深い提案が多くみられた。（須崎）

まち再生演習Ⅰ

本演習は「目にみえる事実」を積み上げることで「目に見えない構造」を明らかにすることを目指した。また、曖昧な表現に逃げることや安易な答えに飛びつくことを注意深く排除した。車が通るから・暗いから・狭いから危ないとか、公園に人が多いとか、人通りが少ないから活気がないとか、慣用句のような言葉に絡め取られた判断・既成概念をいかに取払い、自分の言葉や表現をつくり出せるかに挑戦した。ひたすらにまちを歩き情報を集め、それを地図に落とし込む作業を繰り返した。その上で、分析フェーズに移行した。自らが集めた情報を客観視することで初めて見えてくる特徴や物事の関係性を探った。結果、道の古さ（歴史）と開口部の関係、歩く体験と周辺環境との関係、道を挟んだ情報量の差異や誰かの行為の積み重ねられ方の構造、歩く人同士のモーションタイポロジーやテンポの可視化、緑量と視線との関係、隙間の数値化（自分たちの定義による計算）、そして、地形と開発の現状を擁壁と住宅アプローチとの関係から導き出した新しい地形図までつくられた。その上で、得られた結果（エリアの状況）に対して空間提案を行うことで、都市への介入をささやかに図った。結果、提案の中には、単純な機能で語られることができない、多様な解釈を持った空間が立ち現れた。愚直に途方もない作業と向き合い、既成概念にとらわれない思考と自由な表現を自分たちでつくりあげたことは素直に素晴らしいことだと思う。（上野）

設計製図Ⅱ

本授業は建築学科生全員を対象とする最後の製図系必修科目であり、主に鉄筋コンクリート（RC）構造を主とする中小規模建築について、1）建築の製図及び設計に関する基礎を学び修得すること、2）空間および立体の把握力と表現力を養うこと、3）図面や模型および言葉で建築の設計内容を表現する力を養うこと、4）計画、構造、設備などを考慮し総合的な建築の構想力を養うこと等を通し

て、建築の設計製図に関する基本的な知識と技術を身につけることを目標としている。具体的には、代表的な RC 工法である壁式構造およびラーメン構造について、事例の図面トレースおよび設計課題を課した。トレース課題としては、壁式構造事例として「住吉の長屋（設計：安藤忠雄、併せて模型制作）」、「萩塚の長屋（設計：藤野高志）」、ラーメン構造事例として「神奈川大学 6 号館（設計：RIA）」を課した。また設計課題は、「地域とつながる集合住宅」と「閑内に建つオフィス」の 2 課題を順に課し、それぞれ履修生を 7 ユニットに分けて指導し、中間と最終で全体講習会を行った。またこれらと並行して「代官山ヒルサイドテラス（設計：槇文彦）」等を含む代表的な RC 造建築作品の見学レポートを 3 回と、ル・コルビュジェ著『建築をめざして』の読書感想文を課した。さらに普段は建築家として設計実務に携わる非常勤講師によるレクチャーを通して、設計実務の様子や新しい建築デザインの潮流についても学ぶ機会を設けた。（中井）

設計製図Ⅰ

本科目は、1 年生を対象とした学部必修の製図科目で、木構造を主とする小規模の住宅建築について、設計および製図の基礎的演習を行うものである。

最初の 4 週は「水道道の家」を対象としたトレースと軸組模型制作である。

設計課題 1「クラインガルテン（市民農園）に建つ『小屋』のデザイン」では、まず、A3判の敷地に、収穫した野菜を楽しむシーンを再現し、それを覆う軸組を模型でスタディする。最終的に模型を図面化しプレゼンテーションボードとして提出させた。平面的に部屋を作る意識ではなく、軸組を立体的に操作しながら考える方が上手くいく。

設計課題 2「まちとつながる住まい」は都市型住宅の課題であり、菊名池公園に面する敷地に 4 人家族のための住宅を設計する。まちとつながる機能はややもするとカフェ等の設置で終わってしまうのだが、住宅と切り離して計画しては課題の意図から外れてしまう。

まちとつながりつつも家族の生活と絡めたプログラムの設定とその空間化が肝であり難しいところである。（山家）

非常勤講師



岡村 晶義
Akiyoshi OKAMURA

一級建築士事務所アトリエ鯨



佐々木 龍郎
Tatsuro SASAKI

佐々木設計事務所



渡瀬 正記
Masanori WATASE

一級建築士事務所設計室



木島 千嘉
Chika KIJIMA

木島千嘉建築設計事務所



鈴木 丈晴
Takeharu SUZUKI

鈴木丈晴アトリエ
一級建築士事務所



川辺 直哉
Naoya KAWABE

川辺直哉建築設計事務所



森山 ちはる
Chiharu MORIYAMA

サイドバイサイド一級建築士事務所



井原 佳代
Kayo IHARA

ihrmk一級建築士事務所



山下 貴成
Takashige YAMASHITA

山下貴成建築設計事務所



濱口 光
Hikaru HAMAGUCHI

ミタリ設計一級建築事務所



岡田 雅人
Masato OKADA

岡田雅人建築設計事務所



古谷 洋平
Yohei FURUYA

アトリエ ドゥウエル合同会社



武田 清明
Kiyoaki TAKEDA

武田清明建築設計事務所



藤原 ちから
Chikara FUJIWARA

orangcosong

NEWS

学外受賞

学内受賞

留学生レポート

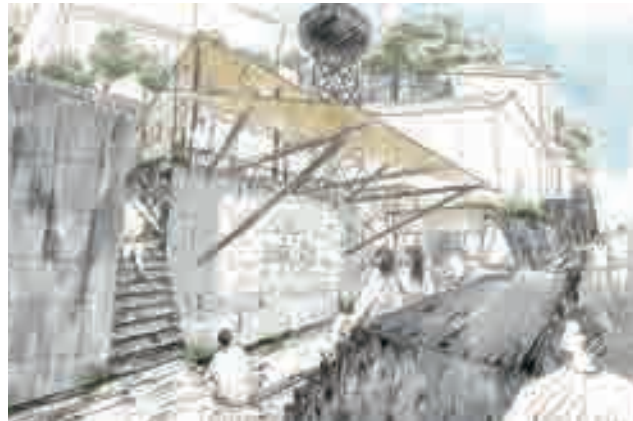
2023 年度支部共通事業日本建築学会設計競技

擁壁と共創する生活景

[関東支部入選]

- まちの未利用地は関わりしろへ -

兼田 聖人、篠原洸太、関川吹雪、濱大智



「2023 年度支部共通事業日本建築学会設計競技」において、山家研究室の兼田聖人さん(当時修士2年)、篠原洸太さん(当時修士2年)、関川吹雪さん(当時修士2年)と濱大智さん(当時修士1年)が関東支部入選しました。

2023 年度グッドデザイン・ニューホープ賞

自他の葺き替え

[入選]

〜「むさしの方式」を背景としたこの先のコミュニティ形成建築〜

三井田 昂太 (当時立花研究室修士1年)



「2023年度 グッドデザイン・ニューホープ賞」において、三井田昂太さん(当時立花研究室修士1年)が入選しました。

全国合同卒業設計展 2023

[佳作]

共鳴のアーキテクチャ

- 環境音と音楽が織りなす環境に開かれた芸術鑑賞の場の提案 -

高橋 昇太郎 (当時六角研究室学部4年)



心を紡ぐ

[50選]

- 精神的なケアを必要とするこどもの自立を促す場の提案 -

高梨 颯斗 (当時六角研究室学部4年)



「全国合同卒業設計展 2023」において、高橋昇太郎さん(当時六角研究室学部4年)が佳作を受賞し、高梨颯斗さん(当時六角研究室学部4年)が50選を受賞しました。

建築学縁祭 2023 ~Rookie 選~

[100選]

まちのテラス

太田 有哉 (当時鈴木研究室学部3年)



全国合同卒業設計展 2023

[50選]

赤レンガ卒業設計展

[100選]

減築デヴォリューション

- 農藝セツルメントによる都市更新の提案 -

井口 力哉 (当時須崎研究室学部4年)

その他に下記の卒業設計・修士設計・設計課題に関連する賞につきましては、記載ページに詳細が掲載しております。

JIA 神奈川卒業設計コンクール

[12選]

CAVE STREET 線上の余白

- スラム街の日常に根付く避難タワー及び避難経路の提案 -

仁昌寺 天心 (当時六角研究室学部4年) 詳細 P46-47

建築学縁祭 2023 ~Rookie 選~

[100選]

抱う

- デイサービスと小学校の複合施設の提案 -

松野 百花 (当時六角研究室学部3年) 詳細 P73

住宅課題賞 2023

[入選]

結ぶ

鈴木 紗来 詳細 P84

2023 年度 神奈川大学 SDGs アワード

農家さんとお客さんが寄り合う直売神興

[最優秀賞]

〜持続可能な消費と生産を目指して〜

ろくらぼ



「2023年度 神奈川大学 SDGsアワード」において、六角研究室の伊藤歩武さん(当時修士1年)、小菅大雅さん(当時修士1年)、斎川優香さん(当時修士1年)、後藤治さん(当時学部3年)、平田大地(当時学部3年)、荻野健太郎(当時学部3年)、田中文太(当時学部3年)、西谷清良(当時学部3年)、松野百花(当時学部3年)、山本紗也子(当時学部3年)、慶應義塾大学の梅澤達紀さん(当時修士1年)が最優秀賞を受賞しました。

留学生レポート



Hermet Solène

国立モンペリエ高等建築学校大学より
曾我部・吉岡研究室

My experience as an international student in an architecture program in Japan has been enriching. I arrived in September 2023 and will complete my exchange in August 2024. Within the lab, I participated in numerous projects and even a competition.

Cultural adaptation was a challenge, mainly due to the language barrier. Fortunately, the university offers Japanese language courses, and many professors spoke English. Understanding Japanese cultural norms, such as respect and punctuality, enriched my immersion.

Living in Japan required daily adjustments. I stayed in university dorms, which allowed me to meet other students and form strong bonds. Forming friendships with both Japanese and international students was an essential part of my

experience. Participating in clubs and university events expanded my network and provided cultural exchange opportunities. Visiting historical sites and modern landmarks across Japan complemented my theoretical learning. I visited Kyoto, Tokyo, and many other places.

Academically, the program significantly improved my design and problem-solving skills. Living and studying in Japan also made me more independent and confident, and it increased my cultural sensitivity by exposing me to different architectures every day. I also had the opportunity to visit very interesting places with Professor Sogabe’s studio.



研究室での集合写真



日本文化体験の様子



研究室でのプレゼンテーションの様子



研究室で模型の作成に参加した

デザインコース



松隈 洋 | Hiroshi MATSUKUMA
教授
建築史研究室
[担当授業] 近現代建築史A、
建築グラフィックス 他
[部屋番号] 8-510



曾我部 昌史 | Masashi SOGABE
教授
都市デザイン研究室
[担当授業] 都市デザイン論、
建築デザインIII 他
[部屋番号] 8-61



中井 邦夫 | Kunio NAKAI
教授
建築計画研究室
[担当授業] 設計製図II、
建築デザインI 他
[部屋番号] 8-67A



六角 美瑠 | Miru ROKKAKU
教授
建築デザイン研究室
[担当授業] 建築設計論、
建築デザインII 他
[部屋番号] 8-68A



内田 青蔵 | Seizo UCHIDA
特任教授
[担当授業] 横浜建築、
近現代建築史B、
建築史フィールドワーク 他
[部屋番号] 8-510



姜 明采 | Myungchae KANG
助教
建築史研究室
[担当授業] 設計製図I・II、
建築グラフィックス 他
[部屋番号] 8-510



吉岡 寛之 | Hiroyuki YOSHIOKA
助教
都市デザイン研究室
[担当授業]
建築デザインI・II・III 他
[部屋番号] 8-61



鈴木 成也 | Naruya SUZUKI
助手
建築計画研究室
[担当授業] 設計製図I、
建築デザインI・II 他
[部屋番号] 8-67

まち再生コース



山家 京子 | Kyoko YAMAGA
教授
都市計画研究室
[担当授業] 都市計画、
設計製図I 他
[部屋番号] 8-66A



野村 和宣 | Kazunori NOMURA
教授
建築保存活用研究室
[担当授業] 建築保存活用計画論、
まち再生演習III 他
[部屋番号] 9-62



高橋 寿太郎 | Jutaro TAKAHASHI
教授
不動産デザイン研究室
[担当授業] デザイン系不動産学基礎、
まち再生演習IV 他
[部屋番号] 9-62



上野 正也 | Masaya UENO
准教授
まちづくり研究室
[担当授業] まちづくり論、
まち再生演習I 他
[部屋番号] 9-63



柏原 沙織 | Saori KASHIHARA
助教
都市計画研究室
[担当授業] 建築CAD演習II 他
[部屋番号] 9-61



塩脇 祥 | Syou SHIOWAKI
助手
建築保存活用研究室
[担当授業] まち再生概論、
まち再生演習III・IV 他
[部屋番号] 9-61

住生活創造コース



鈴木 信弘 | Nobuhiro SUZUKI
教授
住宅デザイン研究室
[担当授業] 住宅設計論、
生活空間デザイン演習II 他
[部屋番号] 9-63



須崎 文代 | Fumiyo SUZAKI
准教授
生活デザイン史研究室
[担当授業] 生活空間デザイン演習I、
居住空間史 他
[部屋番号] 9-64



立花 美緒 | Mio TACHIBANA
准教授
居住環境デザイン研究室
[担当授業] 生活環境論、
生活空間デザイン演習III 他
[部屋番号] 9-65



印牧 岳彦 | Takahiko KANEMAKI
助教
生活デザイン史研究室
[担当授業] 設計製図I
生活空間デザイン演習I 他
[部屋番号] 9-64



菊井 悠矢 | Hisahiro KUKUI
助手
住宅デザイン研究室
[担当授業] 設計製図II、
生活空間デザイン演習 他
[部屋番号] 9-63

学部共通



スタンリー・ラッセル | Stanley RUSSELL
特任教授
[担当授業] 建築批評特論
建築デザイン特別講義 他
[部屋番号] 9-63



河内由希 | Yuki KAWACHI
教務技術職員
[担当授業] 工房ものづくり演習
[部屋番号] 31-101-1

神奈川大学工学部建築学科・大学院工学研究科建築学専攻 沿革

- 1928 米田吉盛が「横浜学院」創設(旧横浜市中区桜木町)
- 1929 専門学校令により「横浜専門学校」設立認可
- 1930 六角橋に移転、横浜キャンパス開設(5月15日 創立記念日)
- 1949 学制改革により「神奈川大学」設置
- 1952 神奈川大学整備拡張計画(設計:山口文象/RIA)
- 1965 神奈川大学工学部建築学科創設(初代学科長:谷口忠教授、定員80名)
8号館(建築学科研究室、製図室)竣工
- 1967 12号館(建築学科総合実験棟)竣工
- 1971 大学院工学研究科建築学専攻博士前期(修士)課程設置
- 1973 かなな会(建築学科同窓会)設立
- 1985 建築学科創設20周年 記念誌発刊
- 1990 大学院工学研究科建築学専攻博士後期課程設置
- 1994 建築学科にシステムコースとデザインコースの2コース制導入
- 1998 横浜キャンパス再開発開始(2002年完了)
- 2005 RAKU(デザインコース年鑑)vol.1発刊
- 2006 建築学科に建築環境コース、建築構造コース、建築デザインコースの3コース制導入
第1回東アジア大学建築学術交流セミナー(以後毎年開催)
日本建築学会120周年記念大会を神奈川大学で開催
- 2008 神奈川大学創立80周年、「学校法人神奈川大学将来構想」公表
- 2015 建築学科創設50周年 記念誌発刊
- 2022 建築学部建築学科設立。建築学系、都市生活学系の2学系を設置し、構造コース、
環境コース、デザインコース、住生活創造コース、まち再生コースの5コース制導入



8号館

建築学科・専攻関連の主な学術交流協定校 *派遣交換留学有り(U:全学、E:部局間))

- アジア: 同济大学(中国、1982～)、武漢理工大学(中国、1982～)、成均館大学校(韓国、2002～)、
国立台湾科技大学(台湾、*E 2005～)、モンクット王工科大学トンブリー校(タイ、*E 2019～)
- 欧州: デンマーク王立芸術アカデミー建築大学(デンマーク、2010～)、国立モンペリエ高等建築大学(フランス、*E 2013～)、
バスク大学(スペイン、*U 2017～)、ルツェルン応用科学芸術大学工学・建築学部(スイス、*U 2017～)、
チェコ工科大学(チェコ、*U 2018～)、カールスルーエ応用科学大学(ドイツ、*U 2018～)、
ケルン工科大学(ドイツ、*U 2018～)
- その他: タスマニア大学(オーストラリア、*U 2011～)、南フロリダ大学(アメリカ、*E 2020～)

RAKUバックナンバー



vol.1 vol.2 vol.3 vol.4 vol.5



vol.6 「室伏次郎研究室」 vol.7 「白濱謙一先生 追悼特集」 vol.8 「山口文象/RIAの神奈川大学総合計画」 vol.9 「大学との連携による六角橋駅前通りのまちづくり」 vol.10 「東アジア建築都市学術交流セミナー」 vol.11 「西和夫先生 追悼特集」



vol.12 「重村力の足跡」 vol.13 「JINDAI KENCHIKUの記憶」 vol.14 「私たちのキャンパスの建築」 vol.15 「廃材標本 学生によるセルフリノベーションの軌跡」



vol.16 「まちのように住む 国際学生寮・栗田谷アカデミア」 vol.17 「コミュニティから地域防災を考える」 vol.18 「破壊と復興」 vol.19 「建築史という学び 過去と未来をつなぐ」

RAKUは2005年から建築学科建築デザインコースによる発行が始まり、2022年からは建築学部建築学科都市生活学系にて発行しています。発刊からすでに17年を経ているRAKUに対しては各方面から高い評価をいただいておりますが、これは単なる大学の学生作品の記録・紹介集にとどまらず、ひとつの建築誌としても楽しめる企画・内容であることが評価に繋がっていると考えられます。大学院生が主体的にテーマ特集について取り組み、編集者の二階さちえ氏、デザイナーのqp氏とともに、熱意を持って制作に取り組んできました。最後のページまで楽しんでいただければと思います。

(都市生活学系主任 鈴木信弘)

学生編集委員

- 制作代表 荻原脩斗
- 制作副代表 仁昌寺天心
- 特集班 早坂恒成、平井翼、阿部凌大、稲葉圭美、王斯文、
許智程、佐藤秀哉、鈴木迭式、東野葉月、平島岳、
吉田慶祐、田口綾乃、大石純麗、高橋昇太郎
- 探訪班 横山凱一、西岡理子、張逸村、渡邊柊吾、顔凡迪
- 作品収集班 前川愛結、熊谷匠、嶋岡礼奈、井口力哉

監修／鈴木信弘、
塩脇祥、菊井悠央
特集ページ編集／二階さちえ
デザイン／qp

「RAKU Vol.20」 発行／神奈川大学建築学部建築学科都市生活学系
発行日／2024年8月1日 [横浜キャンパス]横浜市神奈川区六角橋3-27-1

